

コミュニティ

The Community

40

コミュニティ——10年

1975

財団法人 地域社会研究所

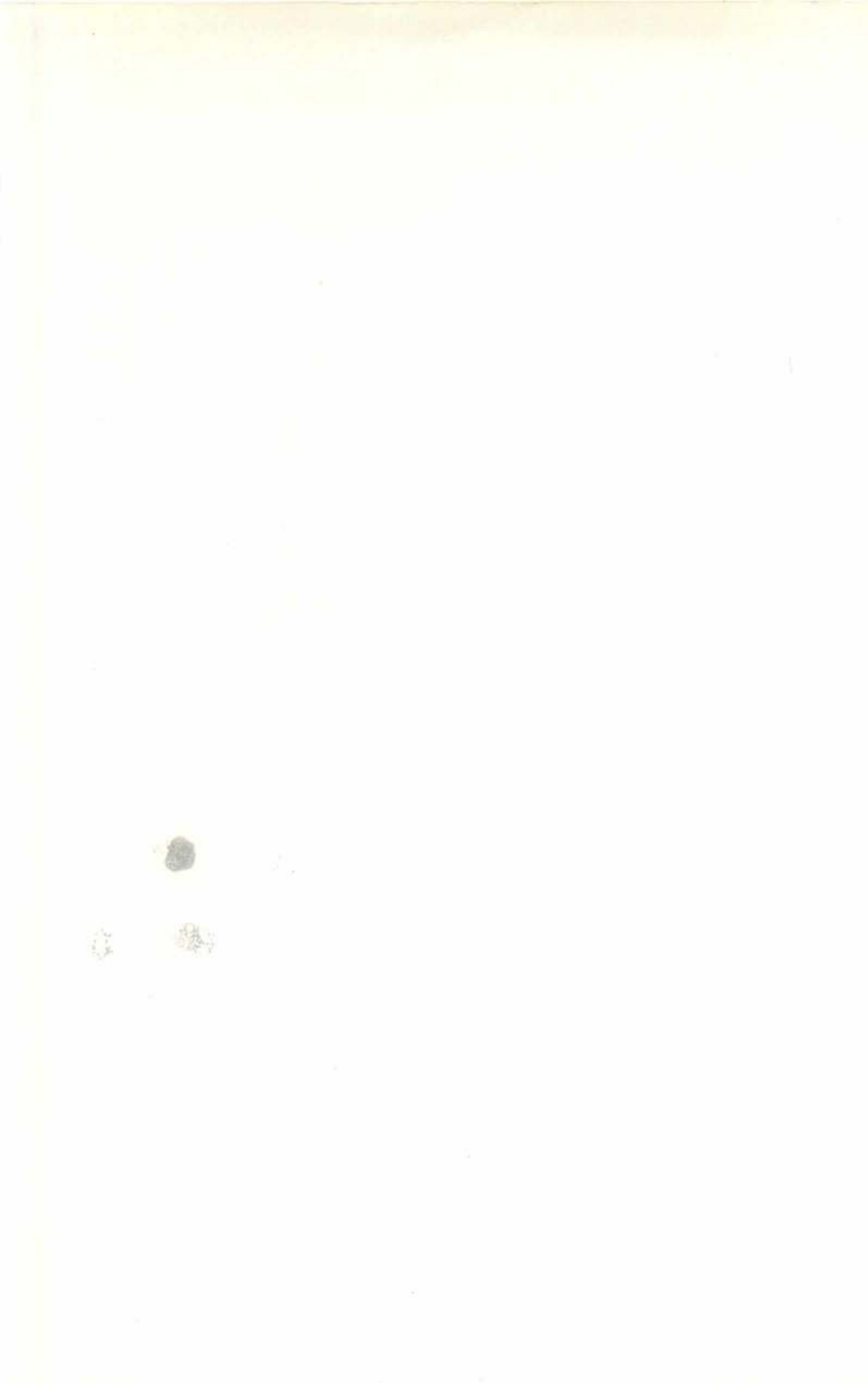
コ ミ ュ ニ テ ィ

The Community

40

財団法人 地域社会研究所

1975



発刊のことば

(創刊号から)

人間は、ひとりでは生きてゆかれない。つねに多数の他人とともに、助けあって生きてゆく。その生活、職業、学問、趣味などにおいて、なにごとによらず志を同じくする人間の集団はこれをコミュニティと呼ぶ。人間は今日まで、あらゆる工夫を凝らして、いろいろな形のコミュニティをつくって、その中に生きてきた。これからさきも、人間のあるかぎりその努力はつづけられるであろう。

日本人もまた、古来いろいろなタイプの集団生活を経験してきた。しかし、その大部分は、封建的な社会制度を土台としたコミュニティであって、個々の自由な人間を平等に扱ったものではなかった。さいきん新しい日本になって、初めて民主的なコミュニティを形成すべき責任を負ったわけであるが、まだ、旧来の慣習と惰性にも力強いものが残っているし、新しい観念もいまだしの感が強い。

そのために、形のうえにおいて民主的社会となったわが国も、その実においては、いまだ空虚な状態であるといわざるをえない。いかにして良い民主的なコミュニティをつくるかということこそ、今日、日本人が直面している緊急課題である。

財団法人地域社会研究所は、この問題と取り組む目的で創立されたのであるが、国民全般にコミュニティの観念とその意欲がはなはだ薄いことがもっとも基本的な問題であることに着目して、まず活動の第一歩として、平易で通俗的な叢書の刊行を計画した次第である。

叢書の名称を「コミュニティ」と定め、今後、各分野にわたる基礎的な知識の普及を目指して、つぎつぎとこれを取り上げて刊行をつづける予定であるが、われわれの念願のごとく、この叢書が広く国民の間に多少なりともコミュニティの観念を植えていくことに役だつならば、誠に本懐の至りである。

昭和39年（1964）春

財団法人 地域社会研究所

理事長 矢野 一郎

“コミュニティ”誌発行

—昭和38年10月—



外国歌劇団がこぞって来日

ドイツ・ベルリンオペラ、イタリア・オペラ
がそれぞれ上演、オペラファンを堪能させた
(38年10月)

ドイツベルリンオペラ“フィデリオ”
提供・共同通信社



イタリアオペラ“蝶々夫人”



この年11月、パリのルーブル美術館所蔵の“ミロのビーナス”が
仏政府の好意で初の海外公開と決まった。

撮影・白石 清

東京国際スポーツ大会

オリンピック東京大会まで
あと1年を控えて38年10月
11日から16日迄新装なった
明治神宮外苑の国立競技場
その他で開催された。

(右)
開会式の予行演習のプラカード

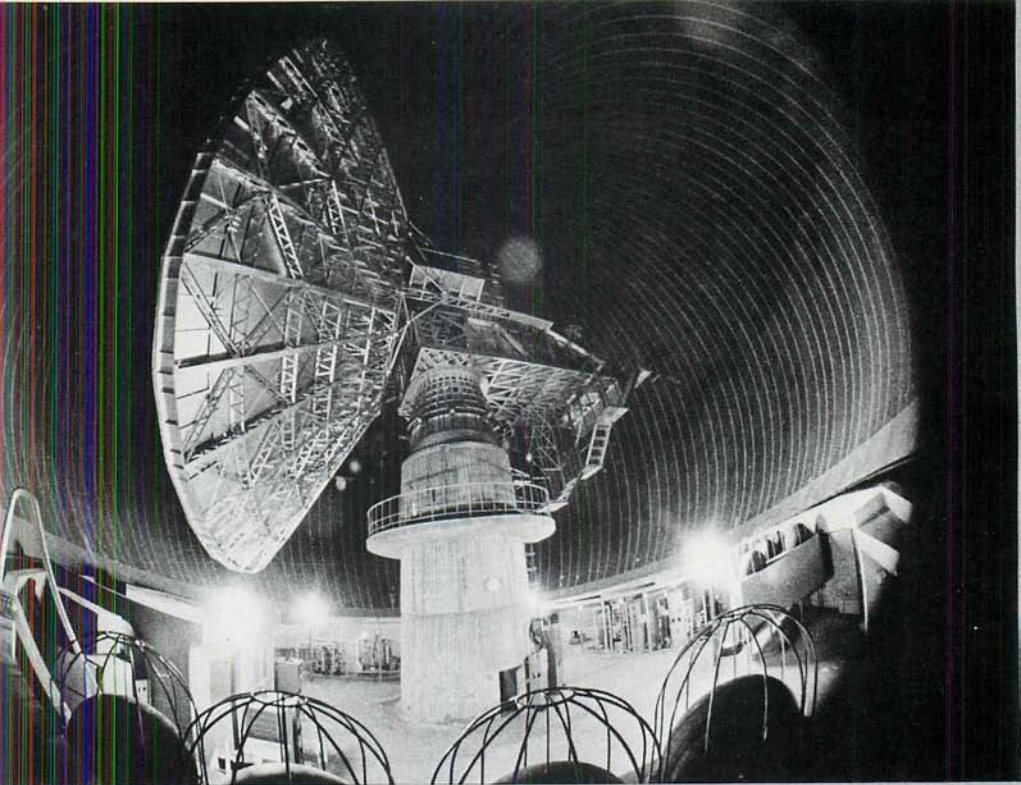
提供・朝日新聞社





提供・共同通信社

まちに出た新千円札
(38年11月1日)



宇宙通信時代——

日米間のテレビ中継成功(11月23日)



(上)

茨城県十王町の国際電々
公社宇宙通信実験所

(右)

初実験で電波に乗って
きたケネディー大統領
生前の姿(大統領はそ
の前日暗殺された)

提供・共同通信社



第3次池田内閣誕生(12月9日)

全閣僚再任で発足

總理	池田	田	勇	人	法務	賀	屋	興	宣	外務	大	平	正	芳	大藏	田	中	角	榮
文部	瀨尾	尾	弘	吉	厚生	小	林	武	治	農林	赤	城	宗	徳	通産	福	野	一	一郎
運輸	綾部	健	太	郎	生	古	池	信	三	労働	大	橋	武	夫	建設	河	喜	一	三
自治	早川	川	崇		政	佐	藤	米	作	国務	福	田	野	林	局	宮	修		
国務	山村	新	治	郎	官	房	長	官	美	総務	野	田	武	夫	長	林			

ハイウェー時代のさきがけ
高速道路開通——

38年12月20日、首都高速道路1号線、4号線スタート
(1号線、江戸橋インターチェンジ付近)





師走もせまった11月9日国営常陸筑波線の
二重衝突事故。死亡160名重軽傷70名。



ゆく年くる年……

かくて38年もくれば行く

目 次

10周年を迎えて.....	矢野一郎.....	11
---------------	-----------	----

《座 談 会》

コミュニティ——10年

I コミュニティとは何か.....	13
II コミュニティのモデル.....	27
III コミュニティ生活の基礎——人口・食糧・資源.....	40
IV コミュニティ・プランニング.....	52
V コミュニティづくりの要諦.....	63
付 論.....	松原 治郎（紙上参加）.....79

日本の社会とイギリスの社会とについて

——R. P. ドーア教授を囲んで——

I 家庭とコミュニティとの関係.....	96
II 家族の人間関係.....	107
III 教 育.....	116
IV 階級と身分.....	133
V コミュニティの展望.....	147



10周年を迎えて

矢野 一郎

人類は自然の恩寵（おんちょう）の下にのみ生き得る生物である。しかも人間は独りでは生きられない。常に多数の同志と共同の社会を形成して、分業による相互扶助を営んでいる。これが人類の生き方であり、やさしく言えば「天の道」に対する「人の道」である。

そういう共存共栄形態の集団は「コミュニティ」と呼ぶことが正しい。そして個人の自由も平等も権利も義務もすべてこの「コミュニティ」理念の中において考えられるべきものである。

しかるにわが国では、不幸にして永く封建制度下にあった為、この観念は育ちにくかったが、新生日本にとっては何よりも大切なことであるので、先ず国民の常識の中にこの理念を普及させる目的を以ってこの財団を設立し、只管通俗的な方法によって国民に訴えて来た。

幸にして10年前には「コミュニティ」とは何であるかも知られなかった状態であったのに、今日では日常用語として広く使用される迄に至ったことは、この財団の努力の一端が貢献したものと信じ欣懐に堪えない。

今後共益々真の「コミュニティ」理念の普及の為に一層の精進を続けたい所存である。

10周年に当り一言所懐を述べてご挨拶とする。

（当研究所理事長）



(向って左から並木、日笠、青井、宮坂、前田(手前)、白石の各氏)

◀座 談 会▶

コミュニティ——10年

出 席 者

(発言順)

- | | | |
|-----|-----|------------------|
| 白 石 | 清 | 〈当所常務理事・第一生命監査役〉 |
| 並 木 | 正 吉 | 〈農林省農業総合研究所計画部長〉 |
| 青 井 | 和 夫 | 〈東京大学教授・社会学〉 |
| 前 田 | 和 甫 | 〈東京大学助教授・公衆衛生学〉 |
| 日 笠 | 端 | 〈東京大学教授・都市工学〉 |
| 宮 坂 | 忠 夫 | 〈東京大学教授・保健社会学〉 |
| 松 原 | 治 郎 | 〈東京大学助教授・地域社会学〉 |

(紙上参加)

I コミュニティとは何か

白石 この地域社会研究所が、よいコミュニティを目指して設立されて約10年たったわけですが、設位当時、世間では耳新しかった「コミュニティ」という言葉が、いまやそれこそ氾濫しているといえるくらいあちこちで使われるようになりました。これは、やはりわれわれの努力してきたことが多少の力になったのではないか、というふうに考えております。



《白石 清氏》

そこで、10年を記念して、実際にこの仕事のお手伝いをしてたわれわれが、編集にたずさわった「コミュニティ」誌についての反省、あるいは課題・展望といったようなものを語るのもよろしかろうかということでお集まりいただいたわけでございます。

まず皮切りとして、コミュニティとはなんぞやということを並木先生に、研究所ができた初めのころの奥井先生のことあたりからちょっとお話しただけたらと思います。

農業人口30%の線がコミュニティ問題をうむ

並木 奥井先生のご生存中のお話で「コミュニティ」という言葉がヨーロッパ社会でひんばんに使われるようになったのはいつごろ



《並木 正吉氏》

かということが印象深いのです。そのとき奥井先生は、大体1920年から30年ごろで、それは働いている人の中で農業人口の占める割合が3割ぐらいに減ったところだった、という話をされたことをおぼえておるわけです。コミュニティという言葉、あるいは問題がこの地域社会研究所で上げられたのは昭和30年代の後半になりますが、ちょうどそのころ日本では農業人口の割合が3割前後ということで、たまたま一致しているという印象をもったことがあります。

す。

では、なぜそのころコミュニティという言葉が取り上げられたかといいますと、それまでの地域社会がいろんな意味でくずれてくる、いろいろな問題が起きてくる。その一つとして、チルドレン・オン・ストリートつまり街頭児の問題があり「おまえ、そんな悪いことをしちゃだめじゃないか」といっても「おじさん、おれの名前知らねえだろう」といって逃げられてしまう。そういう子どもが町の中に出てくる。

そこでもう一度、かつての地域的な連帯感を取り戻そうと、いまのコミュニティがいろいろ問題になったんだ、ということです。そして、そのころの問題を集約したR. パークの著書があるんですが——ちょっと、忘れましたので、青井先生から補足していただければいいと思うんですけども——日本でコミュニティが問題になったのは、ある意味ではそういう意識があつてのことではなかったか、というふうに思うんです。

そういうことで、今まで「コミュニティ」という雑誌で40回くらいやってまいったわけですが、私が今まで勉強した感じから申しますと、旧来のコミュニティというのは、ある意味では人間が生活していく過程でや

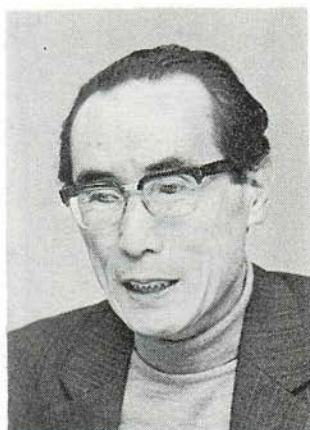
むをえず、ないしは必要不可欠なものとして自然に作りあげてしまっていたものではないか。もちろんその中には人間のいろんな努力が入っているわけですが、そして、これからのコミュニティという場合には、これまでのコミュニティと比べて、はるかに住民の意識的な努力というものが必要になってきているんじゃないだろうか、そういう感じがしているわけです。

この40号を振り返ってみて、コミュニティがどういう意味で使われているか、コミュニティとは何かということになりますと、必ずしも議論がまとまっているわけではなくて、コミュニティという言葉をあくまで地域と結びつけて、地域性が大前提だということで論じておられる方と、そういうものから離れて興味・関心・志を等しくする人間の集団はすべてコミュニティだと考えられる方と、大きく分かれておったように思います。そして、どちらかと言えば学者先生方はコミュニティを地域性と結びつけて論じておられる場合が多い。それに対して、人生における大先輩、実践的な意味での経験者の方がたは、むしろもう少し広い使い方をされているような気がいたします。私の個人的な感じといたしましては、こういう定義・用語の問題も大事なんですけれども、要は、住みやすい、楽しい生活社会をつくっていくにはどうしたらいいかというところに問題があると考えますので、コミュニティという言葉についてはあまり厳格に考えないで、この場合はこういう使い方だということさえ分かれば、少し広めに、自由奔放に使っていいんじゃないだろうか。そして、この「コミュニティ」は大体はそういう使い方をしてきたように思います。そういう意味では、学問的にやや厳密性を欠いているという批判はあったかも知れませんが、実践的な意味で言えばむしろそのほうが賢明ではなかったか、という印象をもっておるわけです。

コミュニティとアソ
シレーション

白石 青井先生、少し補足していただけますか。

青井 コミュニティという言葉は社会学
ではだいぶ古くから使われているんですけ
れども、一番はじめ本の題目で「コミュニ
ティ」を使ったのはマッキーバー (R. M.
MacIver 1882~) なんです。マッキーバ
ーはイギリス生まれで、カナダを経由して
アメリカへ行った人なんですけれども、
アメリカで1920年代のコミュニティ解体時
代に「コミュニティ」(R. M. MacIver,
Community : A Sociological Study, 1917)



《青井 和夫氏》

という有名な本を書きまして、それから社
会学では地域社会のことをコミュニティというふうに使うようになったと
思うんです。それ以外に、パークという人とパーゼスというシカゴ学派の
都市社会学などをやった人がおりまして、奥井先生が関心をおもちになっ
ていたのは、おそらくパーク & パーゼスという2人のシカゴ学派の地域社
会の研究(R. E. Park, E. W. Burgess & R. D. MacKenzie, The City,
1925) というものを頭におかれてのことだと思います。これがやっぱり
1920年代、並木先生がおっしゃったように、ちょうど農業就業人口が30%
を割る前後なんですね。日本も農業就業人口30%代にコミュニティの解体
がはっきりと意識されるようになりますし、なんとかしなければいかんとい
ったような気分が出てきたわけです。ところが日本は時期的にはだいぶ
遅れまして、戦後いろいろな社会変動をへて大体1960年代になってこのよ
うな現象が起きたのだと思います。

少し堅い話になるんですけれども、社会学で「コミュニティ」という言
葉を使う場合、非常に多義的でした、最初は共同体、ドイツ語でいいます
とゲマインデ (Gemeinde) と同義に使われていた。ところが、共同体がだ
んだん解体してくるにつれまして、むしろその後は、ゲマインシャフト

(Gemeinschaft)——共同社会という意味でずっと使われていたわけです。それがこんど地域共同社会あるいは地域社会というふうに使われるようになったのは、さきほど述べましたマッキーバーの『コミュニティ』以後でございます。ですから私は、地域共同社会あるいは地域社会のことは、むしろローカルという言葉をつけて、「ローカル・コミュニティ」という使い方をするのが正しいと思います。

では、マッキーバーはコミュニティというものについてどんなことを頭に描いていたかと申しますと、一つは「自然発生的」という条件を入れているわけです。もう一つは、「その内部に住んでいる人びとの生活関心の全体を満たす」という条件が入っております。それに対して、そういう条件のない、逆に申しますと人為的であって、ある特定の関心しか満たさないような集団のことを、アソシエーション (Association) という対概念で使っているわけです。これは普通、社会学で“結社”あるいは“結社体”と訳しております。

つまり、マッキーバーの「コミュニティ」という本が契機になりました、コミュニティというのを通常ローカル・コミュニティという意味に使い、コミュニティの中において「特殊な部分的目的を達成するために」「人為的につくられた」集団をアソシエーションということにして区別する。そうしますと——彼が言っているんですけども——「アソシエーション」は結局コミュニティの中のいろんな諸機関である、その諸機関がいろいろ集まって、住民の全体の関心を満たすような地域的範囲が出来あがる、これが「コミュニティ」だというように使い分けられる。

そういうことで、元来コミュニティという言葉が非常に多義的なものですから、われわれのこの「コミュニティ」という雑誌においても、一番最初のゲマインデ (共同体) という意味に使う人もありますし、さきほど並木先生がおっしゃいました「一つの共通の関心——必ずしも地域的な関心だけでなくでもいいんですが——につながれて、それを実現するためにあ

ることを行なっている一部の人の」というような使い方をする人も出てきた。人によって使い方が非常にバラバラになっておるように思います。

使い方がはっきりしないもう一つの原因は、かつての農村共同体が解体して、それが幾つかのアソシエーションに分かれて来るといったような条件も現在出て来ているものですから、ローカル・コミュニティだと言ってもそれは住民の全体の関心を満たしていないじゃないかとか、いろんなアソシエーションに分離しているじゃないかということから、コミュニティを地域共同社会という意味だけに取ってはいけないというような主張もあるいは出てくると思います。

将来を展望しますと、必ずしも「地域性」というものにこだわらずに、いろいろな集団の中の「共同性」を考えるとということも、これから次第に必要になって来るんじゃないか。そういう意味で、並木先生の要約された「共同性」というものと「地域性」という二つを両方とも考えなきゃいけないんだという説は、これから次第に重要になって来るんじゃないかという気がいたします。

言葉じりをとらえた定義の問題ばかりになりましたけれども……。

**コミュニティ精神
が問題の中核**

白石 それについて実は第1号でこの理事長が、コミュニティに当たる日本語の訳語がない、したがって止むをえずこの研究所の名前を地域社会

研究所とした、というふうなことを言っておりますが、ほぼそれは当たっているということなんでしょうか。

青井 そうですね。

それでちょっと考えたんですけれども、「会社」というのは一体コミュニティなのか、こう言われますと、コミュニティ的な共同という側面もありますし、利潤追求のために従業員を支配統制しなきゃいかんというような側面もあります。しかし将来のあるべき一つの目標としては、そういうアソシエーションの中にもやっぱり共同的なものをもっと育てるべきだと

いう主張も出てくると思うんです。

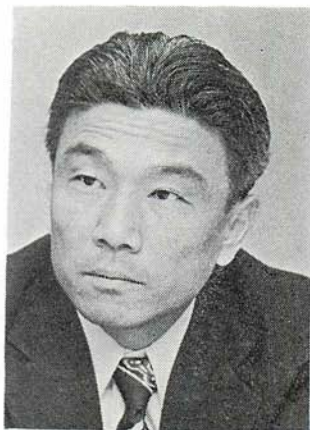
白石 たいへん素人的なんですけれども、日本で使われた、とくに最近使われているコミュニティという考え方は、ある時期のアメリカの農村社会におけるコミュニティを一つの理想形態として考えてるんじゃないかという気がするんです。そういう点はどうなのでしょう？

並木 どうでしょうかねえ……。第1号で理事長その他の先生方から出たおった問題の中に、コミュニティという言葉と、コミュニティ精神という言葉と二つあった。その二つ、どちらも大事なんですけれども、やはり貫くものとしてコミュニティ精神という言葉で言おうとされたものが実は大事だったんだろうと思います。

いま青井先生がおっしゃった会社、これは一つの企業と考えてもいいんですけれども、企業は、技術的な組織として物をつくって利益をあげる役割をもつてると同時に、企業自身が人間的な組織であるという側面をもっておって、それを十分に考慮しないと能率が上がらないということが非常にはっきりしてきた。そういうことで、資本主義的な企業という概念に対して少し修正を加えざるをえなくなってきた。いわゆる営利企業と考えていたものも実は人間の組織である。人間がつくる組織であるという面から、人間に満足を分配する、満足を与えるということをやらなければ社会に対して存在理由を主張するわけにはいなくなってきた、ということが私は大事だと思うんです。そういう意味でいわゆる企業についても一種の技術的な組織じゃなくて、それを構成する人間的な側面——コミュニティ精神というようなところがやはり大事だろうと思います。

さっき白石さんの出された、1920年ないし30年代のアメリカの農村社会を一つのモデルにしていたかどうかという問題は、どうでしょうか……。日本で昭和30年代に農家や農民が地域社会の主たる構成員で、比較的同質の人、比較的動かない人が住んでいた場合のコミュニティは、もはやむしろかしくなったんじゃないか。奥井先生も、日本でこれからコミュニティを

考えるときには、異質な人がつくっている社会であること、そこにいる人間が流動性をもってきていること、その中でどういうコミュニティをつくりあげていくことができるか、それが問題じゃなかろうか、と言っておられた。ですから、必ずしもかつてのあまりモビリティのない、そして比較的質のそろった人たちで構成していた時代のコミュニティ、さっきの青井先生の言葉でいえばローカル・コミュニティそれ自身はあまりモデルにはしてなかったんじゃない



《前田 和甫氏》

か。もしモデルにしていたとすれば、そこを貫いていた精神じゃないでしょうか。

白石 そうなんです。そういう意味で私は申し上げたんです。

前田 ただいま並木先生が、前に青井先生のお
異質なものの統合 っしやったことに関連して、要約されたんですけ

れども、青井先生はさきほど、コミュニティの一つの考え方として、アソシエーションが幾つかあり、それが共通な面であってコミュニティを構成すると言われました。また、いま並木先生は、モビリティが少なく同質性のものが多かった、かつての日本のコミュニティはもはや存立しえない、したがって異質な人びとを包含するような形で、しかも旧来の精神を生かして新しい概念設定を考えていく、というお話でした。

そこで、青井先生、さきほどその点に関していくつかのアソシエーションの間はやはり異質なものを包含していると考えてよろしいんでしょうか。

青井 ええ。おそらく、その目的から申しますと、いろんな異質なアソシエーションが交錯してくるという状況になるでしょうね。

前田 私の狭い経験の範囲、とくに公衆衛生の活動関係で申しますと、年齢とか、性とかで当然問題が違いますから、たとえば若妻教育だとか、妊婦の会だとか、若い女性を対象とした婚前教育だとか、それから場合によってはファミリー・プランニングに関連して年ごろの男子青年も含むとかいうことで行ないますと、非常に機能的につながります。ですから、それはやはりそれぞれ異質ではないんじゃないか。異質と申しますよりも、生物学的に考えて違うのは当然で機能的には違ってないと思うんです。

ただいまの青井先生のお話ですと、そのような違いじゃなくて、もっと本質的に違うものがある。たとえば、農業者と、そこに定住しながら都会へ通うサラリーマンというような意味で、異質の幅の広いものを考えてもよろしいんでしょうか。

青井 たとえば学校だとか工場もそこにありますし、寺院・教会もあります。それらは目的としてはかなり違った目的をもってるわけですね。しかし、それらが全部集まって、ある一つの統合といいますか、連帯みたいなものを形成しませんと、われわれの欲望を全体的に満たすことはできない。ですから、われわれの「生活要求を満たす」という意味においてはそれぞれ同じだということもできるかも知れませんが、非常に特殊化したグループ、あるいは特殊化した組織がたくさん出てきてる。さきほどのファミリー・プランニングといった範囲内だけで考えますと、まだ統一性があるように見えますけれども、それとはまったく違った若者の集団とか、いろんなものがございますね。それらがバラバラのかっこうのままで、これまた統合性が欠けちゃって、そこでわれわれの「生活要求の全体を満たす」ことができなくなってくる。そこで相互の間に、ある程度の相互連関というものをどうしても図らなければいけないという意味で、何か統一的なものを想定する。そうすると、それはかなり「地域的なもの」になってくるわけですね。アソシエーションの場合には地域性というのがあまりはいってきません。もちろん空間性はあるはずで。会社でも工場で



《日笠 端氏》

も、やはり一定の空間を占めていますから。いろんな異質のアソシエーションを全体として統合しようとする、どうしてもそこに一種の地域性みたいなものが出てくるものですから、「コミュニティ」といえば、自然に「ローカル・コミュニティ」をさす、というようになってきたんじゃないだろうかという気持ちを私はもっているんです。

日笠 その点
アソシエーションと
地域性
に関しまして私
はこんなふうに

考えるんです。コミュニティというのはとにかく地域性と共同性の二つの要素が欠くことのできない条件である、ということと言われる学者が多いと思うんですね。その場合、アソシエーションというのは、マッキーバーの定義によると何らかのコミュニティに包含されている。現在のコミュニティというのは昔と違って、地域性といっても小さな都市の範囲の中だけでなく、都市群化というか非常に広域的な都市であったり、メトロポリスあるいはメガロポリスとかドキシアディスの12の段階^(注85頁)があって、そして最後までいくと世界都市ということになるわけですね。

そうなると、アソシエーションに対応して必ず地域があるんじゃないだろうか。たとえば人間のアクティビティとして東京のどこかにみんなが集まって会議を開く、これは東京という地域の中での一つのアクティビティであるということで、その会議はたぶんアソシエーションなんでしょうけど、同好会、あるいは企業の経営的な議題による会議、とにかくどんな会議であっても、それはやっぱり地域が対応しているんじゃないかという気がする。国際会議ということで東京に会場が設けられて世界各国から人が集まってくる。その場合、議題は何にせよ、やっぱりグローバルな地域と

いうものが対応しているんじゃないか。国連の会議でもそうではないか。

「そういうようにしますと、地域性・共同性という定義をそのまま尊重しながら、アソシエーションもコミュニティの一部である、というふうに説明できるんじゃないかという気もするんですけども、いかがでしょうか。

青井 さっきの、「生活の全面、あるいはわれわれの生活関心の全体を満たす」これを徹底すると全世界しかコミュニティというものはないわけです。日本という全体社会を考えてもオイルは大部分外からきてるわけですから、おそらく「人類コミュニティ」といったようなもの以外は完全な包括性をもちえない。ですから、多かれ少なかれローカル・コミュニティというのはかなり相対化されざるをえないわけです。しかし、その内部に——さきほど日笠先生がおっしゃったように——なにかある一定のまとまりみたいなものがおのずからある。それは相対的なもので絶対的なものじゃありませんが……。

日笠 PTAなどはアソシエーションですが、子どもが小学校に通うんですから、小学校区という地域に対応しているんじゃないかという気もするんですが……。

白石 コミュニティというのは、やはり食べて寝る生活と、同じ生活でも働くというのがありますね。そうすると、われわれは食べて寝るところと働くところはすでに別になっていて、われわれがここに集まっているのは、アソシエーションで集まっているわけでしょうが、食べて寝ているときは原則として地域のコミュニティにいる。だから、そういう非常に素朴な生活基礎のあるところという考え方はないでしょうか。

青井 ございますね。たとえば、経済的な意味における消費生活といったものを中心にしてある一定のエリア（地域）を考える、というのが普通の考え方ですね。しかしよく考えてみると、私の家は千葉県ですが、千葉県に住んで1日の時間の大半は東京で過ごしているわけです。そうします

と、私の生活というのは、東京を除いてしまえばその大半の意味を喪失してしまいますので、もし私の「生活圏」というのを考えるなら、どうしても東京まで含めた消費生活と生産生活の範囲内ということになりますね。

日笠 私は、それは見方の違いじゃないかと思うんですね。たとえば、会社は人を集めて仕事をやってもうける、こういう見方をしますと、これはコミュニティという見方じゃない。ただ、自分の生活の延長としてこれを見るならば会社は職場であって、職場というのは働く場所なんですね。そういうふうに見ますと、広域化しても同じことがコミュニティとして把握えられるんじゃないかと思うんです。

青井 コミュニティという場合はあくまでも「生活者」といったものを単位にして考えているという側面がございますね。

日笠 居住地における狭い意味のコミュニティと職場まで入れた広い意味のコミュニティ、そういう区別が必要です。ただコミュニティというと非常に漠然としてしまう。

並木 考え方を整理する意味で、次のように
機能性と共同性

いえないでしょうか。かつての地域は生活関心の全体を満たすことが可能であったものとしてローカルな地域であった。ところがそれでは生活が完結しなくなって、さまざまなアソシエーションが生まれ、そのアソシエーションに対応してさまざまな地域が生まれてきた。その場合の地域というのは、私は一種の機能概念といいますか機能としての地域だと思う。だから、さっき青井先生は「地域というよりも空間性」とおっしゃったけれども、用語的にはそう分けたほうがかえっていいかもしれない。

そしていまは、さまざまなアソシエーションに分かれたわけですが、そのアソシエーションが人為的な特殊な機能集団として非常に合理的なものとして成り立ったものと考えてきた。ところが、たとえば企業にとってみれば、物を安く生産して利潤をあげる技術的な組織だけではうまく

動かないことがわかってきた。

なぜなら、人間はそういう技術的な側面だけに満足しない。もっと人間的な欲望をそこで満足させたい、仲間とはうまくやっていきたいというふうに考えてる。つまり、前の、物を安くつくって利益をあげようというのは、どれだけ安いコストで組織を運営するかという費用概念です。それに対してあとのほうは、情緒的な概念です。その二つをうまく妥協させないと能率が上がらないということが分かってきた。

私はその点が大事じゃないかと思います。つまり、アソシエーションとコミュニティは別だと考えてやってた、ところがやってるうちに、一つ一つのアソシエーションの中にコミュニティ精神がないとうまくいかないということが分かってきた。そこでコミュニティというものが新しく生まれ変わる。しかし生まれ変わるときの地域については生活関心の全体を満たしているという小さな地域という側面はなくなって、コミュニティ精神としてアソシエーションの中に入っていき、そこで機能する、こういう関係になってきたんじゃないかと思います。

ですからそういう意味で、われわれがコミュニティを問題にしてきたが、もっと正確にはコミュニティ精神のほうだったのではないか。そうすると地域と無関係であってもすべての人間の集団についてコミュニティを論ずるというこれまで「コミュニティ」誌でとってきた考え方がやっぱりよかったのではないか。いまは学者先生の中で共感いただくことが少なくとも、やがて学問的な検討にも耐えられるだろう。そのように私は思っているのです。

青井 そうだと思います。いま並木先生がおっしゃったように「コミュニティがアソシエーション化」し、「アソシエーションがコミュニティ化」というのが現代なんですね。かつてはそれをまったく別ものとして取り扱ってもよかった。コミュニティはローカル・コミュニティだけだと今まで社会学では使っていたんだけど、それだけでは事態を処理するこ

とができなくなってきたというのが現代的な状況なんじゃないでしょうか。

並木 私は素人的には大体そう思っていました。青井先生に裏付けていただいて、これからは相当自信もちましょう（笑）。

Ⅱ コミュニティのモデル

モデル1——精神・ 人間・組織の面から

宮坂 ちょっ
と話が戻ってし
まうんですけど

さきほどのアメリカのある特定のコミュニティを頭に描いてじゃないかというお話ですが、それは実際には、公衆衛生なら公衆衛生の人間はアメリカの公衆衛生の人と付き合っ、あるいは公衆衛生の文献から、コミュニティというものを引っ張ってくる、社会福祉の人はそっちからとる、あえて言



《宮坂 忠夫氏》

えば社会学は社会学からということになる。ところが、アメリカ人がまたことばについては自由奔放ですから、ぼくにはあちらさんは好き勝手に使っていたという印象が非常にあります。公衆衛生のほうですと、似たような考え方があったかどうかは別にして、コミュニティという言葉はもちろん戦後のことで、例のコミュニティ・オーガニゼーション、簡単にいうと住民運動、あるいは市民運動のようなものとの関係で「コミュニティ」が年中出てきた。そうすると、その運動が全市にわたることを希望しているときは、一つの市はコミュニティであるというし、小さなタウンに当てはめていくときはそれをコミュニティというし、場合によっては、世界は一つと言いたくてコミュニティといって

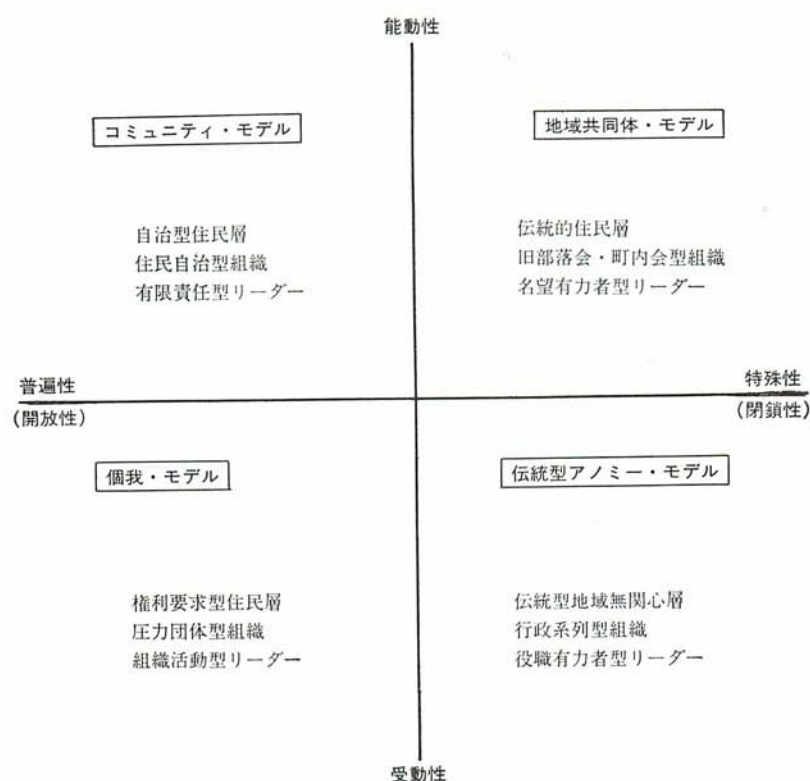
しまうし、ぼくなんかの場合ですと、むしろそういうような使い方が先に入っちゃっている。ですから、そういう意味ではこの「コミュニティ」誌の第1号にいったるような感じで、やっぱり精神だなと思う。

たとえば、コミュニティ・オーガニゼーションの原理・原則は、会社の運営・マネジメントにあてはまる、というような言い方がそのころすでに出ていた。ですから、一つはアメリカ人自身が好きなように使っていたという影響がいろんな形で出てきてるし、公衆衛生の場合でも、コミュニティを一つの場というか、手段のような見方をするもんですから、それでいろんな使い方が出て、結局、基本的には精神的なところにいっちゃうという感じですね。

それからもう一点公衆衛生のほうでも新しいつもりでさんざん「コミュニティ」を使ったわけで、たとえば、コミュニティ・オーガニゼーションが大変強調され、かつての力とハエをなくす運動は農村で非常にうまくいったけれども、それはいわゆる半封建的な仕組みがうまくあいに動いてくれて実績が上がるということだったんですね。流行のトップのつもりが、実は大変古い仕組みに乗っていたものが多かったわけです。それと同じように、こういう座談会の場では非常によくわかるんですけども、それが実際にものに書かれ印刷されると、たとえば“何々一家”式にこんどは古いタイプのものがそういうところに持ち込まれるというおそれを感じるんで。

青井 これは私の考えではなくて、立教大学の奥田先生の分け方の表ですが、彼は普通いろんな地域社会のモデルを考える場合に二つの軸を立てるわけです。一つは「能動性と受動性」——彼の言葉はちょっと違いますけれども、おそらく能動性・受動性という方がよく分かると思います——そういう軸と、それから精神的な意味における「普遍性と特殊性」という二つの軸を掲げまして四つの局面をつくっています。そして能動性と特殊性との間にあるようなタイプのモデルを「地域共同体的なモデル」と呼んでいるわけです。そこでの住民というのは、伝統的な——ちょうど昔の日本

の村落共同体などを考えるといいと思うんですけども——ずうっと昔からそこに住みついでいて、血縁関係も深いし、地縁関係も深いといったようなかっこうの住民から成り立っている。その例としては、旧村の部落だとか昔の町内会だとか、そういう組織を考える。そこでは、どちらかという、名望家だとか有力者といったような人にゲタを預けるというかっこうでリーダーシップがとられていた。それが一番もとの、さきほどのお話ではゲマインデの中におけるタイプなんですね。



それがずっとくずれた形になりますと、こんどは特殊性と受動性のワケに囲まれた、彼の言葉でいうと「伝統型アノミー・モデル」(アノミーとは「無規制」の意)というのになります。つまり、それがバラバラに崩れて

きますと、かつての住民層は、ワクは伝統的に維持しながら無関心になってしまふ。そして上から言われたことを下請的に行なうというような行政系列型の組織に変わってしまう。その中に出てくるリーダーは役職有力者型である、ということを使うわけですね。

ところが現代ではこれがまた崩れてきて、ある意味においては普遍的な考え方に影響され、しかし全体としては受動性をもっているといったような——「個我・モデル」と彼は言うておりますけれども——バラバラな個人に解体されてしまふ。そして、そのバラバラな個人が集まる契機は、何かの権利を要求するときに限られる。つまり、権利要求型の住民になるわけで、それが充たされるとあとはまたバラバラになっちゃう。組織は、圧力団体型の組織をそのつどその関心に応じてつくる。そして、その中に組織活動家型のリーダーが出てきて、住民を引っ張っていく。こういうかっこうになっているわけです。

現在の地域社会は、大部分が彼のいう「個我・モデル」的なものに近づいているんですけども、それを、かつての伝統的な地域共同体的なモデルでない新しいモデルにもっていけないかと考えて、それを新しい意味における「コミュニティ・モデル」と名付けているわけです。それは考え方からいうと、特殊のではない、万人に共通なある一定の普遍的な原理を堅持しながら、同時に単なる受動性ではなくて能動的に動きうるような組織づくりをやるべきだ。そしてこういう言葉でいっていいかどうか分かりませんが——そこにおける住民は、いわゆる自治型の住民というタイプになるべきである。それから組織も、ただ単にある特定の目標を達成するための圧力団体的な、個別的な組織でなくて、住民自治型の組織でなければならず、その場合のリーダーは、ある意味において有限責任型のリーダーでなければならない——というようなことを言ってるわけです。

ですから、この図で申しますと、地域社会の歴史は右上からずっと時計型に回ってきましたが、それをさらに左上の形のものにまでもっていけな

いだろうか、という一つの夢があるわけですね。非常にむずかしい問題なんですけれども……。

日笠 それに関連しまして、(本誌33号「乗物と人間」)の座談会をやりましたときに、伊藤ていじさんが、いまの大都市の居住者というのは考え方もばらばらだし、非常に個人主義で、これからコミュニティをつくっていくというのは伊藤さんとしては悲観的である、そういう発言をされたんです。

そうしましたら辻村さんが、日本は大家族主義でやってきて家族というものが重荷になっていたけれども、核家族になってようやく——アメリカでは最初からそうであったけれども——個人主義が定着してきているんじゃないか。反面、アメリカで個人主義が徹底すると、寂しさというか不安がつきまとうてきて、逆に社交を求めるようになる。日本では今ちょうど個人主義が定着し始めたというか、芽生え始めた時期で、もう1ラウンド回れば、再びコミュニティの回復は十分考えられるんじゃないか、そういうことを述べておられますが、これはいまの時計の針の考え方に関連があるように思います。

並木 いま青井先生から出された奥田先生のモ
やはり精神が中心 デルは……。これは私、とても面白いと思います。特殊性と普遍性とあるところが、奥井先生の問題提起からいいますと特殊性のところが閉鎖的になり、普遍性のところが開放的になるような気がするんです。そうしますと、能動的・意識的というのと受動的・消極的といいますか、縦軸と閉鎖的・開放的という横軸が交わるようになるのではないか、これもやはり考え方としては、時計の針と同じように問題が推移していくという理解も成り立つと思うんです。ところで、このモデルは一応地域社会に関してのモデルですね。

私は地域社会から離れて、アソシエーションについてもこういうモデルが考えられるのじゃなかろうか、そして地域社会にしてもアソシエーショ

ンにしても、このように時計回りで回っていくのは、ある意味では外形標準から見た分類であって、この中にもう一つコミュニティ精神が入るか入らないかという問題を、ここへかぶせないといけないのじゃないか。これがコミュニティ誌がこれまで40回やって得た一つの仮説的な判断じゃなからうかという感じがしますね。

青井 確かに特殊性というのは閉鎖性なんです。ただ、そこに通用する原理というのは、ある特殊な集団内部だけに通用するような集団原理といってもいいと思います。ところが普遍性というのは、他の集団にも通用するような原理に基づいてやらなければいけないという意味ですから、閉鎖性あるいは開放性という方が一般の人びとには分りやすいかも知れません。

並木 と同時に、地域社会だけじゃなくてそのほかの人間の集団について、積極的であるか消極的であるか、受動的であるか能動的であるか、閉鎖的であるか開放的であるかという分類ができますね。

青井 アソシエーションの場合にも、国鉄一家だけに通用するような原理、そこだけに通用するようなある一定の昇進の原理があるということを考えると、やっぱり二つの軸というものが……。

並木 積極的か受動的かということになりますね。ただ、その中にコミュニティ精神が入っているか入っていないかは別の話になる。

白石 大体いままでのお話で、われわれが従来考えてここでいろいろ問題としてきた、コミュニティとアソシエーションとの関連、それからそれについてコミュニティ精神が必要なんじゃないかと並木先生はおっしゃっているわけなんです、確かにそうだと思うんです。われわれがこういうことをやって希求してきたものは、コミュニティだけでもなし、アソシエーションだけでもない、全部をカバーするコミュニティ精神なので、それをどうやれば養うことができるかということを追求してきたんじゃないかと思うので、ここでわれわれに一つの方向づけができたような気がするん

ですが、いかがでしょうか。

並木 白石さんのまとめられたとおりです。最初私はしろうととして参加して、無我夢中でやってきて、いま振り返ってみたところ、いま、まとめられたような方向を模索していたということです。第1巻で、理事長が実証性については問題があったかも知れませんが、大胆にある仮説を出されて、大体そのワクの中で考えてきた。大筋においては間違っていなかったのじゃないか、こういう印象ですね。

白石 それと、いまの奥田先生のご意見と青井先生・並木先生から付け加えていただいたもので、一つの進行方向と申しますか、あるモデルが少しできてきたような気がいたしますね。

モデル2——生活空

間・施設の面から

日笠 いま出ていたお話は、コミュニティのソーシャルの面ですね。もちろん人間が主体ですから、人間の何らかの発想があって、活動があって、それからコミュニティ活動があるわけですが、活動の場というかベースというか、そういうものとしてフィジカルな問題があり、これがまた非常に重要になってきている。いろいろな理由があるわけですが、フィジカルにコミュニティというものを考えた場合には、地域性というものから全く離れますと非常に考えづらい。

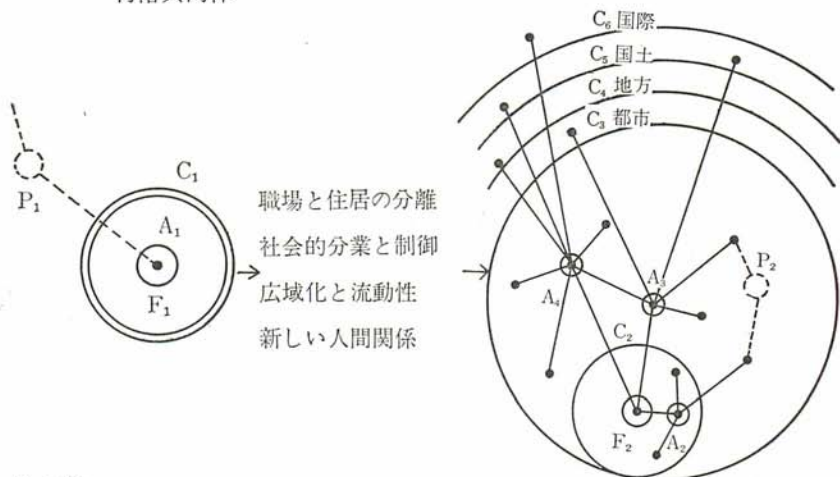
そこで、地域にかかわらずコミュニティというものはありうるというのが、あるいはアソシエーションでも必ず地域は対応しているんだ——それはいろいろなスケールがあるけれども——というように考えますと、それはフィジカル・プランニングで受けとめられると思いますけれども、アソシエーションが地域性が全くないということになりますと、アソシエーションの場をどう計画するかということは、私たちの一つの問題になってくるわけです。

次頁の左側の図は村落共同体で、人の社会的諸関係のほとんどが見出されるような古いコミュニティです。アソシエーション的な活動をその中に

地域社会とアソシエーションの空間的關係

現代社会

村落共同体



F_1 : 家

C_1 : 古いコミュニティ

人の社会的諸関係がその内部に見出される。古い人間関係

A_1 : コミュニティの中のアソシエーション生産(1次産業)雇傭・福祉・レクリエーション・文化(年中行事, まつり……)

C_1 と A_1 は空間的にほぼ一致していた。

P_1 : 旅先などにおける接触

F_2 : 家庭

C_2 : 居住地の近隣地域社会

$C_3 \sim C_6$: 都市, 地方, 国土, 国際

A_2 : 居住地の近隣アソシエーション

A_3 : 都市レベルのアソシエーション(会社, 文化団体, 宗教団体……)

A_4 : 国土, 国際レベルにわたるアソシエーション

P_2 : 公共の場における接触

識別しうるとしてもそれはコミュニティと一致していたと考えられます。外部との接触は村落の代表者に限られ、一般の人たちは旅先などで接触するにすぎず、きわめて閉鎖的なコミュニティであった。

これに対して現代社会は、次の点で村落共同体とは大きく相違している。第1は職場と住居の分離、第2に社会的な分業が進んだこと、第3は活動の広域化と人の流動性の高まったこと、第4は新しい人間関係が生じたことである。

すなわち、右側の図は現代社会を模式化したものである。家庭を中心に近隣の地域社会があり、それは都市の一部を形成している。さらにその外側には地方・国土・国際というようなスケールが考えられる。これらは特定の目的を持たず、またその境も必ずしも明確ではないが、重層的な地域構造をもっており、社会的分業によって行政機関が教育・福祉・文化など多面的な機能を分担している。そのうち C_2 は権力構造をもたないローカル・コミュニティである。

また、従来コミュニティの中に含まれていた各種の機能はそれぞれの目的に従ってアソシエーションを生み出していった。これらはそれぞれ機能集団でもあるが生活サイドからみれば職場であり、生活圏の一部でもある。家庭と職場との間には通勤現象が一般にみられる。アソシエーションの種類は工業・商業・業務サービス・学術・文化・レクリエーションなどきわめて多岐にわたっているが、特定の目的をもっている点で地域社会とは異っている。メンバーの分布もさまざまであるが、いずれかの地域が対応しており、その地域の中ではアソシエーションもまたメンバーである。このほか多くの人々が接触する現代社会では、公共の場における個人の偶然的接触の機会もきわめて多い。(P₂)

このような複雑な人間関係を生じている現代社会において、何れをコミュニティと呼ぶかはかなり意見がわかれるのは当然です。それは何を最も重要と考えるかによって異っているように思います。

並木 アソシエーションには地域性がないということではなくて、従来のコミュニティは、ローカルな、つまり足で歩いていける距離なり、比較的狭い地域で生活関心全体を満たしうるような機能、そういうものとしての地域を考えていたと思います。

ところがそういう一つのコミュニティで生活の全関心・全欲望を満たしうるようなものはなくなって、いろいろなアソシエーションが出てきている。ところが、そのアソシエーションは、一つ一つが必ずそれに対応する地域性をもっているということで、やっぱりアソシエーションと言っても、地域性とは無関係じゃないということなんですね。

フィジカル・プラン ニングの諸段階

日笠 そう思います。たとえば国連ビルの場合、アクティビティとしてはグローバル（世界的）であっても、そのほかにニューヨーク市とのつき合いとか、ビルの周辺の町とのつき合いとか、ビルの中での組織の運営とかいろいろな段階があるのではないのでしょうか。

白石 フィジカルなものによって、いかにすればよりっぱなコミュニティ精神をこさえることができるかということを考えるわけじゃないんですか。

日笠 そういう精神の育つような環境をつくり出す……。

白石 そうしたことなんですね。それが今のアソシエーションなりコミュニティなりと、フィジカルなものとの結びつきでしょうね。

並木 標語的にいえば、“健全な精神は健全な肉体に宿る”（笑い）そしてもう一つ「飽食・暖衣・逸居して教えなければ禽獣に近し」です。

日笠 物と精神の関係ですね。

青井 社会学で考える場合には四つのメルクマール（特徴）をあげるんです。一つは「共属感情」もう一つは「共同活動」、そうするとそこには当然「共同の施設」というものがある、施設を入れると、ある意味における「ローカリティ(地域性)」というものを考えざるをえなくなってくる、

というようなかっこうでローカルというような意味がずっと前面に出てきたのだと思うので、先ほどの「生活のとは矛盾はしないと思うんですね。

日笠 都市計画でコミュニティ・プランニングという場合には、やっぱりローカルなコミュニティ・プランニングが主体なんですね。ドキシアデスの12段階がありますね。すべてのあの段階に計画がありうるわけです。近隣計画・都市計画・地方計画・国土計画……ですからどんなスケールにも対応できる。コミュニティのアクティビティがどんな広域にわたろうと、どんな小さな地域にとどまろうと、やはり地域計画が受けとめられるというふうに考えているんですけども。

青井 グローバルな社会的な規模で考えますと……。

日笠 エキュメノポリス（世界都市）の計画というものがあるはずなんですね。

青井 南北問題にしても東西問題にしても、ある調和がないと全体として生きていけない。そうすると、どこで石油をとりどこで精製するかというのが、恐らくこれからは非常に重大な問題になってくると思います。今までは国単位でみんな考えていましたけれども、これからは人口問題一つとっても、食糧問題・資源問題を取り上げて、全体的でグローバルな計画というものがどうしても必要になってくるんじゃないでしょうか。



昭和38年 3月3日

タイム・イン・ファミリー
—— 定点観測式撮影による ——

撮影・富岡畦草



昭和48年12月30日

東京日本橋と高速道路 撮影者の家族の変容に時の流れを見る

Ⅲ コミュニティ生活の基礎 ——人口・食糧・資源

白石 というところで、この問題は一応くぎりまして次には、これまた並木先生にばかりお

願いするようですが、農村なり農業の問題、それにくわえて、今の時代でたいへん問題になっております食糧の問題、これを一つやっていただきたいと思います。

並木 いまの食糧問題を考える基礎的な事実をまず簡単に申し上げます。

中心は穀物ですが、これは麦類・米・そのほかにえさ用の穀物がある。この三つを合わせますと、昭和45年ごろに世界で約11億トン生産され、消費されていたという状況です。その中身は、半分がえさ用の穀物、3割が小麦、2割が米という状況です。それを世界の三つのブロック、先進資本主義諸国・共産圏諸国・発展途上国で大体3分の1ずつ消費しておるんですが、これを大きい順序で申しますと、共産圏諸国が1番で、2番目が先進資本主義諸国、3番目が発展途上国、この発展途上国は3割を少し割るという状況です。世界の人口は、ちょうど昭和45年ごろは36億3,000万人ですから、1人当たりの年間の穀類消費量はちょうど300キロになるわけです。これはえさ用の穀物も人間が家畜の腹を通して食べたという計算です。

ところが、日本ではたまたま現在1人当たり300キロ食べていますから、世界の平均を食べておるといわけですが、これをさっきの三つのブロッ

クに分けてみますと、先進資本主義諸国では大体 520 キロを食べ、共産圏諸国は360キロ、発展途上国は180キロになる。つまり先進資本主義諸国は発展途上国の 3 倍を消費しておるわけですね。

そしてアメリカにいたっては、1 人当たりの消費量というのは年間 850 キロを超えています。そういう意味では、食糧問題というのは、一つは人口のふえる率と食糧のふえる率とのバランスなのですけれども、より決定的なのは、1 人当たりいくら食べるかという方で、発展途上国並みの食糧消費を世界の人類全部がやるとすれば、現在の時点でも60億を超える人口をゆうゆう養える。ところがアメリカ的な食糧消費をやるとすれば、せいぜい13億人の人口を養えるに過ぎない。こういうことになるわけです。

そういう中で、一昨年から生じましたああいふ食糧問題の背景ですが、いまの11億トンの中で世界で取引されるのが約 1 割の 1 億トン、そのうち日本が最大の輸入国で、年間 1,500 万トンぐらいつつ輸入していたところへ、ソ連が突然 3,000 万トンという大量の買い付けをやった。一挙に過剰ムードから足りないという状況へ変わったわけです。しかし、ソ連だけがただ一つの食糧不足を起こした責任者だとすれば、1973年のソ連は大豊作でしたから、もうもとに戻っていなければいけないんですけれども、必ずしもまだ戻っておらないということからみて、ほかにもっと原因があったということになる。その原因をさがす手がかりとして、FAO（国際連合食糧農業機構）とかアメリカの農務省が考えていた、昭和55年までは世界の穀物は余るであろうという推計、これは数年前にそういう推計をし、多くの食糧問題の専門家が同意しておったわけですが、それがどうしてひっくり返ったのか、これが手がかりになると思うんです。

過度の楽観も悲観も 禁物

並木 それで調べてみますと、生産のほうで見込み違いがあったわけじゃなくて、生産はむしろFAOなりアメリカの農務省が考えた以上

に伸びている。にもかかわらず足りないという問題が起きてきたのは、消

費のほうが予想以上に伸びたからです。なぜ消費が伸びたか、世界の好景気で経済成長率が、FAOなりアメリカ農務省が考えたよりもはるかに早かった。そのためにふところぐあいが豊かになって、1人当たりの穀物の消費量、とくに畜産物の消費がふえてきた。こういうことで世界の食糧不足の下地づくりをやってきていた。そこへソ連が大量の買い付けをやったので、一挙にその問題が露呈した。

ですから少し類型化していいますと、FAOとかアメリカ農務省が、余るとみておった状況の中に、実は足りなくなる芽が含まれておったわけです。そして足りなくなる方向へ向いておったわけです。それがソ連の買い付けで一挙に露呈してきた。専門家の多くは、過剰だ過剰だということで安心していて、世界の食糧消費と生産の関係が足りない方向に向いていることに気がつかなかったわけです。

ところで今度はどうかと言えば、一挙に世界の食糧が足りなくなっていて、いまにも人類の何割かが餓死しなければならぬとか……。最近私のところに、ある週刊誌の記者が、5年後には日本の食糧事情が敗戦直後みたいに悪くなるのじゃないかという想定で取材に来たんですが、そういうことはあり得ないという話をしましたら、がっかりして帰っていききましたけれども(笑)、私は、現在の時点はもう一度穀物の緩和が起ころうる状況になってきたと見ておるわけです。

それはなぜかと言いますと、いまの世界の食糧不足問題を起こしている一番大きな基本的要因が、1人当たりの食糧消費の増大、つまり畜産物の消費の増大が予想以上に早かったということだったわけですから、こんどは石油ショックで世界の経済成長はスローダウンする。結局、所得の伸び率が落ちますから、畜産物の消費の伸び率は落ちるのが当然だとみておるわけです。

それに対して生産のほうは、それまでアメリカ・カナダが作付制限し、しかも穀物の値段はべらぼうに安かった状態で、なおかつ予想以上の伸び

を示しておったわけですから、その生産制限を解除して、しかも穀物の値段が倍に上がったということになりますと、オイルショックでコストが上がるという点を考えても、農民は相当に増産意欲を燃やしたということは確実なので、需要と供給の関係は傾向としては逆転した、もう一度余る方向へ向いたという判断をしておるわけです。

それを裏づける材料になるかどうか、まだ即断はできませんけれども、4月1日(昭49)にアメリカの農務長官がロイターの記者と会見しましたときに、農務省の予想どおりの穀物が取れるとすれば、年末には値段が大暴落すると、農民は不満をもらしているが、これは理由がある。その心配があるのなら、先物の値段がまだ幸いにして高いから、今のうちに先物を売っておけ、しかし若干の不確定要素があるから、全部売ることはおすすめしない、こういう言い方をしている。

そして4月13日(昭49)の朝刊を見ますと、1975年、来年の小麦の作付面積については、かりに小麦の値段が下がったときは、価格補償することになっている面積を削減するということで、不足ムードの中で過剰を心配した措置を発表するようになってきています。

そういう意味では、世界の食糧問題というのは、短期的と言ったほうがいいのかもかもしれませんが、経済的な問題として起きている。それを、最近では気象が非常に寒くなるとか、人口が今世紀末には70億になるとか、相当長期の問題と混同して、必要以上の不安感が起きているというのが現状じゃないかと思うんです。

食糧問題に対処する 途

並木　そういう状況に対して日本がどういうふうに対処したらいいのかということになりますと、これは長くなりますからそう申しません

が、私自身は、世界の食糧事情はいちがい不足ときめつけるわけにもいかず、過剰ときめつけるわけにもいかず、両者が同時存在しておるような状況で、一方が現われ、一方が引込むということを繰り返すという風に

みておりますから、そういう不安定性に対してどのように万全の対策をとるかということが大事です。

常識的に考えられるのは、常時在庫をもつという方法と、潜在的な生産力といいますか、必要に応じて増産できる態勢をとっていくという二つの方法があると思うんです。その二つの方法の中では、在庫を沢山もつというやり方は、つねに古くなったものを食べなければいけないということと、非常にコストがかかるということから、必ずしも国民の共感を得られる政策じゃないと思う。

と言いますのは、日本の小麦に対して半値のものが入ってくるということとはこれからもありうるわけですから、あんなに安く入ってくるのに、どうして国内でこんな高いものをためておくんだという不平が、今はそういうことはありませんけれども、そういう事態になれば必ずまたそういうことになる。そういう意味では、潜在生産力を確保する対策のほうを重視すべきじゃないかと考えているわけです。

これまでの農政でいいますと、なにか一本調子で考え過ぎて、その辺のところを反省してやっていけばいいんじゃないかというのが私の判断です。衣食足って……という点でいえば、食のほうは、ぜいたくなと言うとおかしいんですが、畜産物を世界の人類がうんと食べようということにならない限り、快適な生活、コミュニティをつくるに足るだけの食糧は十分にあると思いますので、安心してコミュニティの議論を続けていただきたい、こういうふうに思います（笑）。

前田 そうしますと、そういう農産物は、天然資源の問題とは根本的に違うと考えてよろしいわけですか。

並木 非常に違うと思います。増産の可能性があるわけです。ただ、石油問題にしても値段との関係で、上がればある程度消費が押さえられ、下がれば消費がふえるという意味では似たところがあります。しかし天然資源のほうはある程度やればなくなってしまう。農産物は絶えず拡大再生産

できるという点は違うと思いますね。

日笠 肉類はあまり取れないというようなことになると、穀類をまた従前どおりよく摂取するということになるかと思いますが、栄養学的に保健の問題はいかがでしょうか。

並木 これは宮坂先生にやっていただいた方がいいんですけども、栄養学者は、現在の日本人の食べているたん白の量、それからそのたん白の中の動物性たん白の比率、その動物性たん白の中では畜産物と魚と両方あって、いまは大体半々、やや動物性たん白が多いという状況になっているのですが、その状況そのものは、栄養的に考えてまず十分であるというふうに見ているわけです。これ以上畜産物の消費がふえる一番大きい要素はアミューズメント——楽しみ、おいしさです。その要素のほうが大きいんです。栄養の問題じゃない。ヨーロッパの連中は、動物性たん白の取り過ぎで、ヨーロッパの食糧問題の専門家には、超長期に世界の食糧問題を考えるなら、畜産物の消費を西欧社会において規制すべきではないかといっている。そういう点では、日本の食生活のバランスはきわめていいのではないか。

白石 グローバルにみて、いまの程度の食生活をやっていけば、まずそう足りないことはないと考えられますね。ところが、いままでは畜類をあまり食べない、しかも人数が非常にたくさんいるアフリカなんていうところで、文明社会とコミュニケーションがよくなって豚肉を1回か2回食べてみたら大変うまいということになって、おれも豚を食べようということになる。現実には、ニューギニアなどに行くとたいへん豚を大事にしていますね。

そうしてみると、そのための畜類の消費というのは、これだけコミュニケーションが発達してくると非常にふえる可能性があるのではないか。その面からの不安といいますか、それは多少考えのどこかに入れておかねばいけないのではないかという気はします。

並木 それはまさにおっしゃるとおりで、1人当たり年間180キロの消費、あれをやっている人口は、世界の5割に達する発展途上国ですから。しかも人口の増加率が高い。それが世界の平均たとえば日本並みに300キロ食べるという状況になったときには、これはなかなか大きい問題です。

ですからそこへ問題がいくことを頭に置けば、さっきのアメリカの専門家が言っているように、先進資本主義国の畜産物の消費をある程度規制し、人工食料を考えるととか大豆肉を考えるととか、とくに植物性たん白の増産や海洋資源に相当力を入れなければいかんのだらうと思います。

青井 ことしブカレストで世界人口会議という
人口問題のむずかし
さ

のがありますが、そこでの一番の難問題の一つに
エネルギー問題があります。1人当たりエネルギーの消費量をみると、アメリカはインドの約40倍です。アメリカの人口は2億ちょっとですが、その使用エネルギーをインドの人口に換算しますと40倍の80億になるわけですね。

そうすると、インドの人口は4億5,000万で多い多いといっているけれども、エネルギー消費量からいけばアメリカは40億の人口をすでにかかえていることになりますから、発展途上国からいえば、先進諸国のほうこそ人口を減らせという反論が出てくるわけです。ところが先進諸国のほうは、人口はほとんどいま停滞状態のようなかっこうになっておりますけれども、エネルギーの消費量だけはどんどん増している。そこに一つの問題があって、人口抑制政策を発展途上国に納得させるのが非常にむずかしいということがあります。

もう一つは、人口をある程度制限することに一番積極的なのは、現在アジア諸国なのです。これは中国も含めましてね。中国はイデオロギーから言うとマルサス理論を認めるわけにはいかない。しかし現実の問題としては、産児制限をどんどんやっているわけです。ですから中国のほうとしては、自分のところは自分なりにやるけれども、他国に自分のイデオロギー

を輸出しようとは思わないというような非常に微妙なことを言っています。はっきり反対しているのはソビエトと東欧ですね。これは人口抑制政策をとるべきでないということを、マルクス・レーニン主義から非常に強く主張するわけです。実際は、国土が大きくて労働力が不足しているということがその背後にあるわけですが。西欧諸国でも労働力が不足しているものですから、とくにフランスなどは、人口をこれから少し増やすべきだという主張をどんどんやっています。ラテンアメリカはなかなか難しい問題をかかえていまして――

白石 宗教の問題がありますからね。（カソリックは避妊できない）

青井 そうです。結局、世界全体としてはいまのままでいくと人口抑制をするというのは非常に難しいだろうという結論になります。そこで、現在短期的にみた場合には、食糧生産と人口とが抜きつ抜かれつというかっこうでバランスを保つことができるとしましても、20世紀の終わりになると全世界の人口は70億、いまの倍くらいになるという状況がはっきりしているわけですから、大へんな食糧問題がおきるわけです。

将来のGNPなどはどんどんその予測が狂いますが、人口統計の予測は一番正確なわけですから。長期的にみた場合、21世紀になって世界の食糧問題というのは解決できるであろうかというような難問があると思いますが、どうでしょうか。

並木 70億にふえた場合、1人当たりの消費量が変わらなければ、食糧生産が対応できないテンボじゃないのです。問題は、発展途上国の人たちに対して人口抑制をもたらそうとすれば、子どもつくり以外の楽しみを与えなければいかんわけですね。今はそれしか楽しみがないということでどんどん増えるわけですから。子どもつくり以外の楽しみを与えるためには、生活を豊かにしていかなければいかん、つまり所得を殖やしてやることです。一番いい人口抑制策になる。ところが所得が殖えれば必ず――。

白石 豚肉を食べる。

並木 ええ。つまり主食のほうの消費は減るはずな
生活水準の影響 んです。もっともある程度まで増えます。日本でも、

明治から大正にかけては米の消費はずっと増えてきた
んですから。それがあるところまでいって、主食用の穀物が減って畜産物
がふえて、全体の穀物の消費が増えていくわけですね。そのパターンに発
展途上国がはいり始めますと、これは相当に高い価格になるんだろうと思
う。

そこでの問題は、これは日本の立場というのは非常に微妙なんですけれ
ども、日本がこれから先も食糧を輸入できる相手先というのは、発展途上
国じゃなくて、アメリカとカナダ・オーストラリア・ニュージーランド・
ブラジルというようなところで、そういうところの輸出余力は今後もかな
りあるとみられる。足りないのは発展途上国で、その発展途上国と日本が
せり合うところがいやらしいところです。

日本の政策としては、発展途上国から開発輸入するとか何とかいう政策
は絶対に打ち出しちゃいかん。気持ちはどんなに善意でも、相手に正しく
理解してもらうことは困難です。ですから、考え方としては発展途上国の
食糧増産に徹し切って、そこの食糧を増産して自給率を高めてあげる援助
をする。そうすると、アメリカからの輸入国としての競争関係が弱くなる
わけです。その分だけ買いやすくなる。私は、“情は人のためならず”と言
うことわざがあるじゃないか、食糧政策についてはそいつを世界的な規模
でやれと考えているんです。

青井 この間、大来先生とお話ししていましたら、1人当たりのGNP
が300ドルの線というのが大きな分れ目らしいですね。そこまでいくと、
放っておいても自分たちで人口抑制をやり出す。それまではいくらいろい
ろな手を打っても人口は増える。むしろ子どもを沢山つくらないと食って
いけない、貧乏なるがゆえに働き手をたくさんつくって、共働きで、手間
仕事でも何でもいいからそれで食っていくといったような形が一般的なん

ですね。そして1人当りGNP 300ドルの線になると人口のほうは、ある程度抑制されてくるんだそうですが、こんどは食物の質が上がってくるというもう一つの難関があるわけですね。

並木 300ドルまでは主食の増ですね。いまの大来さんとかティンバーゲンさんが言っているのは、ワールド・ミニマムを設定して300ドル以下の国民に対しては、先進国がネガティブ・タックス（税供与）みたいなものをやって、そこへいくまで先進国から所得の再配分をやれ、それが人口抑制に一番きくんじゃないかということですね。

白石 そこでこんどは宮坂先生にお尋ねするんです

保健衛生の問題 けれども、いまの話に関連しまして文明が進むにつれて

て、発展途上国の人口増が死亡率の低下から目立って出てくるだろうと思うんです。そうすると今のままの増え方よりももっと恐ろしい、人口爆発というような増え方が出てくるのじゃないかということも言われているわけなんです、その点はいかがなものでございましょうか。これはご専門でないかもしれませんが。

宮坂 前田先生の方がむしろご専門でしょうから。

前田 フィリピンとかパキスタンの方を見てきたり、見てきたかたの話から考えますと、死亡率の低下という点でみた場合、第2次大戦後に日本が経験したような、あれほど急速なものは当分期待できないだろうという感じは濃厚です。

国際的な援助等が保健の面、とくに消化器系の伝染病の対策等では、何よりも先がけて開発途上国援助が熱心に行なわれていると思いますけれども、どぶにお金を捨てるようなものですね。もちろん効果がないわけではないでしょうけれども、遅々としている。それよりも先に、教育の問題とか習慣の問題とかが言われておりますから、そちらが人口増加に2乗にも3乗にも影響するのはだいぶ時間がかかろう、その前に解決すべき問題が多々あるような、そういう実態的な印象です。

宮坂 WHOができて25年ですか、ずっとやってきたのは、マラリアとコレラのような急性伝染病のすごいやつですね。

白石 肺結核はないんですか。

宮坂 それはこれからです。要するに、予防手段が相当はっきりしているものばかりです。ある意味で安くつくといえますか、経済的な効率が良いものですね。一番基本になる一般的な保健医療サービス、今まで要するにマラリア対策・コレラ対策のようなものをずっとやってきて、一応は形がついて、これから一般的な保健医療サービスの基礎づくりをやろうという段階なんです、これがたいへんなわけです。

前田 急性伝染病の場合でも、対応策のめどがついたというところじゃないでしょうか。日本ではコレラが1人か2人入ってきても大騒ぎですね。ということは、普段ほとんどなくなっているわけです。ところがマニラのような首都圏においても多数常在する。ただワーッと爆発的にならないというだけの話です。ですから、めどがついたということで、日本あるいはその他の先進諸国のようにエラディケート（根絶）しようと思ったら、これまたたいへんな話です。

ですから、先ほどの収入の格差あるいは穀物消費の格差以上に差があるように、私はその方にばかり目が向きますけれども、実感があります。コレラ患者が入院してきてもだれも驚かない。毎日7～8人出てきても、季節的に多いんだぐらいのことです。

白石 やっぱり死ぬでしょう。

前田 入院させたものだけはあまり死ななくなっただです。爆発的になると、入院施設が限られておりますから手が回らなくて死んでしまいますけれども、爆発的にならない限りあまり死なないんです。

それはまだコレラのある国はどこでも大体同じです。治療に必要な、たとえば輸液その他の薬剤等は援助物資としてどんどん入っておりますから。

どちらかというと消化器感染症のほうが対応しやすい点があります。空気感染したり接触感染したりする病気はもう少しやっかいです。

Ⅳ コミュニティ・プランニング

コミュニティ・プランニングの歴史

白石 どうも話がたいへん遠くへ行きましたが
日本へ戻りまして、日笠先生ひとつ。

日笠 コミュニティというものと、私どもの方の
コミュニティ・プランニングというものとは多少違うわけなんです。

そもそもコミュニティ・プランニングという言葉が使われ出したのは20世紀になってからだと思うんですが、アメリカでセントルイスの住宅地の市民連合体、セントルイス・シビック・リーグというんですが、そこで1907年に、自分たちの居住地域の環境といろいろな生活のために必要な施設を充実すべきであるということ、住民がリポートをまとめてましてそういう主張をしたんです。

1907年というと、アメリカの都市計画の歴史では、シティ・ビューティフルの運動が起ったところで、これはシカゴ博がきっかけになったといわれています。というのは、これまでのアメリカの都市というのは非常に索漠としていて、パリのようなああい都市の美しさがないじゃないかということが問題とされはじめていた、シカゴ博ではアメリカの建築家・造園家などが活躍して、パリをモデルにして非常にりっぱな会場をつくったわけで、これが動機となってシティ・ビューティフルの運動が起り、アメリカの各都市の都心部を整備することが始まるわけです。

都心を整備したり、大規模な公園系統をつくったりするというようなことは始まっているのですが、そういう大きなことばかりやっているのでは

なくて、もっと自分たちの身近な居住地を整備することが大事だということをシビック・リーグ（市民連合）のレポートが主張しているのです。一方、イギリスに起ったセツルメント運動がアメリカに移入され、シカゴを起点として広まったわけです。それから20年ぐらいあと1929年ですけれどもアーサー・ペリー（Arthur Perry）が居住地を計画的にまとめる一つのうまい単位を考えましてその中で交通の安全も確保する、したがって学童の通学が非常に安全に行なえる。その単位の中では、日常生活に必要ないろいろな要求がほぼ満たせるような施設も整備できる。いわゆるネイバーフッド・ユニット（近隣住区）というものを提案したわけです。それと前後して、そういう望ましい居住地域を実際につくろうという運動がありまして、その運動がいくつかの実例を生み出しています。たとえばニューヨークの一サニーサイド・ガーデンズとかラドバーンとかの開発地区に、そういったような実例があるんですが、そういうようなことからコミュニティのフィジカルなパターンをつくり出す。同時に、その当時はおそらくそこでコミュニティ活動というものが並行してあったんだと思うんですね。

ところがこの考え方がヨーロッパに非常に影響を与えた。つまり都市計画は本来住宅問題から発生しているんですけども、時がたつにつれて都市計画の概念が非常に拡大されていって、幹線道路を整備したり、大きな公園を整備したりということが都市計画の仕事の中心になってしまったときに、いまのような地区の環境をまとめて整備するという発想が逆にアメリカからヨーロッパの都市計画の中へ取り入れられていったわけです。つまり都市の骨組みをつくるということだけではなくて、地区ごとに肉付けをしていくということだと思えます。

その後になると、よくわからないんですけども、必ずしも住民のコミュニティ活動があって、その地域が整備されるというのではなくて、都市計画のスタンダードのような形で近隣住区を整備していくことが定式化していったんですね。それが一つの原則みたいになりまして、ニュートاون

をつくるときでも、市街地の再開発をするときでも、そういうユニットをできるだけつくり出すようにしていくという形で発展してきました。

結局都市計画の歴史の中で理想都市の発想というのがいろいろな形であるんですけども、その多くは一方において、技術革新や工業化を受入れ、都市の近代化を認めながら、そこで起こってくるいろいろなマイナス面をなくしていこう、より便利な、より快適なものにしていこう、そういうような発想が多いんですが、近隣住区というのもまさにその典型的なものだと考えます。

その後ある建築家のグループから次のような意見が出たことがある。すなわち社会学者はコミュニティなんていうものは崩壊しつつあるといっているんで、いまさらコミュニティ・プランニングというのはおかしいじゃないか。近代的な大都市ではコミュニティは崩壊していく方向にあって、むしろそれに代るものとして、アソシエーションが派生しているので、これに合わせてプランニングの方式を変えたらどうか。近隣住区なんていうのはやめちゃって、いまの近代的な建設技術を使って単一中心の人口10万ぐらいの一つの都市をつくってしまったらどうかというような発想も出てきているわけです。

イギリスでニュータウンを戦後いくつも開発していますがけれども、初期のニュータウンはほとんど近隣住区制によっています。一つの試みとして、いくつかのニュータウンが近隣住区制によらない単一中心的手法を試みた。しかしその次につくるニュータウンは必ずしもそれを踏襲しているのではなくて、また近隣住区をモデルファイして住戸グループに分けるなど各種の試みが行なわれて、結論がでていない。いずれにしても、よりよい地域社会をつくらうということに変わりはないが、技術的には今のような変遷があるということだと思います。

コミュニティ・プランニングの方向 日笠 そうすることで、都市計画のほうは、コミュニティの物的な基盤をつくることですから、

社会学や心理学その他の分野から、将来のコミュニティというのはかくあるべしということが出ますと、それに対応して、そういう意見を取り入れながら技術的な問題は解決できると思うんですが、その辺がどうもはっきりした結論が出てこないで現在ではかなり模索的なわけです。

日本ではそういう計画的な開発というのはこれまで多くないんですけれども、昭和30年に日本住宅公団が発足してから進めている団地開発、この開発の中で近隣住区的な発想を取り入れていくつかのニュータウンができていますが、これについてもいろいろご批判を願って、そういうものを踏まえてこれからの開発をまた進めていくのがいいのではないかと考えているわけです。もう一つは、いま自治省で進めているモデル・コミュニティがあります。これも活動計画と環境計画の両方があるわけです。その際にどのくらいのユニットが適当かということですけれども、小学校区を標準にしたらどうかという発想がありまして、それで進めている。ところがモデル地区によりまして、大都市の中だと密度が高いものですから、日本では小学校区よりも中学校区くらいをとったほうが徒歩圏に入るんですね。小学校区ではちょっと小さすぎるんです。そういうことになる中学校区のほうがいい。農村に行きますと、小学校区というのはばかに大きくなって老人や子供が歩いてこれない。もっと小さい単位がいいということで、社会学の先生方と一緒に議論しているわけです。

次に日本の都市計画が住民の要求によってコミュニティ・プランニングの方向に動きつつあるということに触れたいと思います。日本の都市計画は非常におくれていてアメリカやヨーロッパの都市計画に比べると、土地の利用計画というものがまずないんですね。建築は取り締まれますけれども、将来の都市をどうしようというピタッとした計画が、ヨーロッパのようにないわけで、融通無碍にやっている。何がしかの道路とか公園は整備してっておりますが、これもアメリカあたりの公共施設の整備に比べて非常におくれている。そういうようなやり方でも、今まであまり文句も

でなかったんですけれども、最近はそうはいかなくなってきました。たとえば既存の住宅地に、ハイウエーが通るといことになりますと、今までの計画がかなりズサンなものですから、住民の生活の地域単位をあまり考えないで道路を引っぱったりしていることが多いんですね。そういうところで住民の反対運動が起こっている。その影響が強く出て来まして、道路計画もコミュニティを尊重してきめるべきであるとか、道路をつくるときにはその沿道の環境を整備しながらつくっていくのだということが、ようやくいま始まってきたということです。

もう一つコミュニティと関連するのは防災問題です。この間、防災をテーマに座談会をやっていたんですが（本誌38号「災害とコミュニティ」）その時も出てきた問題は、江東地区のような場合、日本の都市計画がまだ未熟な時代にどんどん市街地が形成されてしまって、いまではどうしようもないというようなことで、防災対策では、まず最初の発想として拠点をつくったほうがいい。いざというときには逃げ込めるような避難拠点をいくつかつくっていくということで防災計画というものがスタートしているわけです。

ところが最近になりまして、防災拠点といったっていくつもないものですから非常に遠いわけで、老人や子どもがそこへ逃げていけるかどうか。江東地区が震災を受けた場合、防災拠点があってもかなりの人が死ぬのじゃないかという予測がほぼ確実になってまいりました。拠点づくりだけではだめということになりますと、結局コミュニティの問題になってくる。そこで拠点だけではなく、一般の市街地に対して何らかの形でコミュニティづくりをやっていくことがぜひ必要である。こういう地域は日常生活のいろいろな施設も不足しているので、そういうものも整備しながら、同時に避難路を整備するとか、初期消火のために近隣の防火組織をつくるとかいうことをやらなければならない。そういうことなくしては、江東の防災対策は考えられないという風になってきております。生命や財産を守る

という基本的な要求から緊急にコミュニティの整備をしなければならないというような、差し迫った問題もあるわけです。

青井 コミュニティづくりをどうやったい
生活のレベルを考える いかということとは、社会学の方でもはっきりわ

かっていないんです。というのは、今までの社会学というのはでき上がったコミュニティをあとで分析していた。自分で意図的にコミュニティをつくった経験は一つもないんですね。それはおそらく新産業都市というような問題が出たときに初めてだったわけです。ところがあれはうまくいきませんで、今でもうやむやのかっこうになっておりますけれども、とにかく今までそういう経験が全然なかったものですから、どの程度のユニットが最も適当であるかということすら、今までの社会学者はほとんど知識もなかった。これからどうしてもそういうものをみつけ出さなければいけないという状態にあるわけです。

それともう一つは、コミュニティを施設との関連において考えました場合、ローカル・コミュニティに限って申し上げますと、生活レベルの中を最低・中間・最高の三つの段階「ミニマム・レベル」「オブティマム・レベル」「マキシマム・レベル」に分けて考える必要があるように思います。生活のミニマム・レベルを確保するには公共の手を十分入れると同時に、もっと極端な形で申しますと、これは機械化し自動化してもいいと思うんです。早い話が電力などは自動的にその家へ来るようになっているし、水道もひねれば出るようになっていますね。下水道もつけられる。そうすると、それは住民が特別に協力しなくても自動的に満たされるという形のところまでもっていくこともできるだろう。それを越えるオブティマム・レベルのところになりますと、自動化・機械化だけでは実現が非常にむずかしいと思います。オブティマム・レベルになると、こんどは企業業あるいは企業家が参加するようになるかもしれない。いろいろな創意を発揮できるような自由の余地を、ある程度残しておく必要がありますから。

さらに、マキシマム・レベルになりますと、各家族単位や各人単位でいろいろな試みをやらないと、自分の望ましい生活というのは実現できないだろうと思うんです。これまた企業家にまかしておいた範囲では、個性の違う人間が、自分に最も合うような生活形態をそこでつくり上げることは難しい、そこには個人の創意を発揮できる余地をつくっておかなければいけないと思うんです。そうすると、生活の「ミニマム・レベル」「オブティマム・レベル」「マキシマム・レベル」というのをある程度区分して考えていく必要があるんじゃないでしょうか。

ただ、地域単位をどうするかという場合に、たとえばある処に一つのアミューズメント・センターを一つつくり、別の処に別なセンターをつくり、そこを消費者は渡り歩けばいいじゃないかという考えもありますが、消費の側面だけから考えればそれでいいと思うんですけれども、地域単位をきめる場合には、先ほど申しましたような、自動化しうるもの、企業家がタッチしてもいいもの、個人の創意を生かさなければいけないものという3段階を考えますと、ユニットというのは、ある程度みんなが協力できて、しかもその機構や施設をコントロールできる範囲ということが重要になる。ただ使うというだけでなく、それらを住民がある程度コントロールできるような、それくらいの単位を考える必要があるんじゃないか。「利用する」という観点じゃなくて、それを「使いこなす」という観点から、将来はユニットを決めていかなければいけないのじゃないだろうかというような発想法が、現在社会学の中では出ているわけです。

しかしまだ、どの範囲であればそれが可能であるかというのがビシッときめられていない。もっと広い範囲もコミュニケーション手段が発達すれば、ある程度コントロールできるようになるでしょうし、いろいろな条件がありますので、はっきりは決まらないのだけれども、あくまでも、住民がそれらの機構や施設をたんに利用し、その恩恵をうけるということじゃなくて、むしろ主人公としてそれをコントロールし、いざという場合には

快適な住み家という一つのベースはあると思いますが、いま言った大きさにからまって、これ位のところまでならばという一つの大きさというのが当然考えられるんでしょうね。それは間隔を調べることで出てくるんじゃないか。

並木 いまお出しになられた問題を考える場合に、古い地域社会と全く新しい団地が生まれてきたようなところと、そのミックスしたところと、それぞれずいぶん違うだろうという気がするんです。一番最初に日笠先生が、社会学者のほうから、コミュニティという問題はもう古いのでコミュニティ・プランニングなんていうことはおかしいじゃないかという批判があったというお話でしたが……。

日笠 ええ、一部の建築家の間にそういう意見があります。

並木 社会学者からもそういう話があるという
住民の異質性と移動
性

ことでしたが、さきほど青井先生がローカル・コミュニティということで、従来のコミュニティの中の、つまり生活の関心全体を満たすものとしてローカル・コミュニティという概念を一つ置かれて、そのほかにアソシエーションという考え方を
ミューニティということで、従来のコミュニティの中、つまり生活の関心全体を満たすものとしてローカル・コミュニティという概念を一つ置かれて、そのほかにアソシエーションという考え方を
出されました、と同時に、その後の展開からみると、ローカル・コミュニティ自身も生活の全体を満たすという機能はなくなってきているわけですから、それもある意味ではアソシエーション化してきつつあるわけです。

そういう意味で、都市計画の方がおっしゃる、コミュニティ・プランニングという場合のコミュニティの中味自身が、かつての生活の全体欲望を満たす意味のコミュニティじゃなくなって、かなり機能的なものに変わってきているんだろうと思います。そのプランと施設を使う場合に、コミュニティ精神が入っていくかどうかという問題は、依然としてそこであるわけです。そういうふうにいまの問題が整理できないかということが一つ。それから、事実上そういう施設を考えていく場合、さっき近隣住区というお話が出ましたが、その主役は女・子ども・老人ということになります

ね。ですからその人たちを頭に置いた近隣住区といいますか、コミュニティ施設というものを考えていく必要がある。

もう一つの点は、こういう設計をやられる場合の場所によるのですけれども、一番めんどろなのは、団地ができてしょっちゅう入れかわるという流動性の高いところで、果してどういうコミュニティ・プランニングができるかという問題がある。その点ではどう考えていいのかわからないんですが、私が新開地に住んで見ての感じで言いますと、第3次産業的な分野はあまり出入りがない。

つまり、団地ができてその団地族を相手にした商業とかサービス業が周辺に張りついてきますが、この人達は、おそらく親子相伝か家業世襲か何かで、わりとそこに住みつくのじゃないか。そうすると非常にモビリティの高い住民の中でも、比較的固定性をもったグループとそうじゃないグループに分けて、機能分担させるというやり方が考えられないかどうか。同じ団地の中にも、しょっちゅう動く層と、比較的動かない層がないかどうか。比較的動かない方を核にして考えることができないかどうか。

ところで、比較的動かない層について地域社会をつくっていかうとする時に、そこにコミュニティがあるんじゃないくて、これからつくっていかなければならない。自然にできるのを待ったのではだめなんで、意識的な人間の努力がどうしても必要になってくる。そこで、そういう人間の努力というものを期待しようとするときに、実にめんどろな問題が起こります。

座談会(本誌33号「乗物と人間」)にも出ていただいた辻村先生もそういう話をされたことがありましたけれども、団地の住民に、団地で遊んでいる子どもが悪いことをしたときどこまで注意をするかというアンケートに対して、黙って放っておけという意見と、そこまで注意すべきだという意見、つまりある程度のおせっかいを覚悟して注意して、みんなで気をつけろという意見と、無関心でやれというのが、ちょうど半々に分かれるそうです。どっちの説をとっても一方から批判されるというのが実態らしいで

す。だからその辺は、具体的にはたぶん実にめんどろな問題だと思うんですけれども、そういう問題を頭に入れて、だれか積極的にやるという人間の努力というか、やっぱり一つの運動じゃないかという気がします。

V コミュニティづくりの要諦

コミュニティ・オー
ガニゼーション・ワ
ーカー

宮坂 そこで、コミュニティづくりのいろいろな場面でどういう手を打つかということは、たとえば総理府の、新しいコミュニティ、という問題が出たときも、それから他の役所が、言い方はいろいろですけれども、モデル地区を設けようとかするときに、一番弱いのは、コミュニティづくりの専門家、組織づくりの専門家の養成というものがありいられないことなんです。アメリカの場合にはそのような専門家の養成がかなりやられているとみていいと思うんです。マスターを終わったぐらいのレベルです。衣食住とか、経済とか、保健とか、そういう意味の専門は特に何も持っていないが、ある町にはいり込んで、どうやって組織化していったらいいか、それも、あの人が組織化しているとわかるようなんじゃないためなので、そういう専門家の養成が日本ではほとんどないんです。新しいコミュニティづくりについて何か新しい政策なり対策を打ち出したときに、そういう専門家を養成しろというのはあんまり聞かない。ほんとうは、それがいるかいらないかで大違いだろうと思うんですけれども。

白石 アメリカではあるんですか。

宮坂 コミュニティ・オーガニゼーション・ワーカーとか、そういうもので、ある程度はいます。

日笠 子どもの遊びの指導なんかもやるわけですね。

並木 それはアメリカだけでなく、ヨーロッパ全部でしょうか。

宮坂 アメリカだろうと思いますが。

日笠 ヨーロッパでは役所がやる場合があるわけでしょう。

宮坂 日本を含めてほかの国では、コミュニティづくりについていろいろいっていますが、公衆衛生は公衆衛生だけで、福祉は福祉だけというわけです。コミュニティづくり一般の専門家がたいへん少ないんです。

白石 それの全般的なものが――

並木 コミュニティ・オーガニゼーション・ワーカーですね。

青井 ですから一番下の単位から申しますと、ケース・ワーカー（社会福祉の仕事に当る人）……。これはどちらかというところ、個人のクライアント（依頼人）をとっていろいろ指導いたしますね。もう一つ上にいくと「グループ・ワーカー」というのがいます。さらに進むと、こんどはグループとグループとの間の関連をはかっていかねばいけないというので、「インターグループ・ワーカー」みたいなのが必要になってくる。さらにもう一歩いきますと、こんどはコミュニティづくりになるわけです。ですからソーシャル・ワーカーもだんだん発展していくと、最初は個人対策でよかったのが、グループ対策になり、グループ関係になり、こんどはいろいろな組織間の協調をやらなければいけないというかっこうで、「コミュニティ・オーガニゼーション・ワーカー」といった専門家をつくらうということになる。

白石 日本ではそんなことをおおよそ考えられたことがないような気がするんですけども。

宮坂 端的に言って労働組合のオルグ（組織する仕事はオルグ活動 担当者）です。

青井 共産党などはその専門家をがっちり養成しているわけじゃないでしょうか。

並木 もう一つは宗教団体もやっているわけです。

青井 自民党は古い地域組織の上ののっかってそれをやってきたんですが、だんだんくずれてきて、足をすくわれているんですね。

白石 アメリカの場合も、政党ということじゃなくて、自治体なら自治体の仕事としてやっているんですね。

宮坂 自治体であったり、民間組織に働いていることもあります。

並木 それはサラリーはどこからもらっているんですか。

宮坂 役所なら役所です。

日笠 一般の住宅地もそうですか。

宮坂 ええ。

日笠 高級住宅なんかはないでしょうね。

宮坂 そのときどきの、政治全体あるいは行政全体の力点の置きようで、最近では低所得のほうにはいり込んでいるようですが。

日笠 コミュニティ・オーガニゼーションといった場合に、都市計画で対象としているような全般的な地域なのか、あるいは福祉に欠けるような特殊な地域なのか、そういうことがよくわからなかったんですがね。

宮坂 それはケース・バイ・ケースで、そこにはいり込んで、その人間が一つの市全体の組織化を、10年先、15年先に考えるかもしれないけれども、現状を見た上で、さしあたりは、さっきの奥田先生のでいう、理想的にはコミュニティ・モデルになるような方向を頭に描いて、たとえばかたまるどころからかためていくような動きをとるわけですね。

白石 たいへんおもしろいと思うんですけども、アメリカの場合、具体的にやっているところはどこかご存じでしょうか。

宮坂 町づくりをやっているところは、実態としてはたいへんはいっているんだと思いますけれども。

並木 アメリカで農業の普及員制度があります。あれを地域社会づくりまで発展させたものですか。たとえば日本にも農業改良普及員とか生活改良普及員という制度がありますが、これはいまの青井先生の分類でいえば、ケース・ワーカーからグループ・ワーカー、その辺までですね。インターグループまではいっていない。あるいは非常にいいやつはそこまでい

くかもしれない。ただ、コミュニティまではいきませんね。だからあれがそこまでいったという感じです。

青井 おもしろいのは、最近のアメリカの新左翼の連中が、学校をドロップ・アウト（脱落）して地域にはいらなければいかんというので、一生懸命コミュニティ・オーガニゼーションの手法を勉強しているんです。地域にはいって行って、草の根から現在の体制に対してある程度抵抗しようというような運動をやるために、彼ら自身センシティビティ・トレーニング（感受性訓練）のグループにはいったりいまのコミュニティ・オーガニゼーションの逆手を使ったりしていますね。コミュニティの中に組織づくりをして、細胞を植えつけ、たんだん組織を拡大していくというようなことを一生懸命やっているんです。

白石 日本は、もし自治体がそういうことをやれば、やはりお上からということで抵抗があってもなかなか踏み切れないんでしょうか。

宮坂 ぼくはやはりそのような仕事を、一つの専門分野として認めてないことのほうが先だと思うんです。やや似ているのは社会教育主事なんていうのがあります。公衆衛生関係ですとほんとうにそのような動きをしている人は少ないんですけれども、保健所に衛生教育担当者というのがいるんですよ。それが場合によるとそういう動きをしているんです。岩波新書で、愛媛県の公衆衛生関係のそういう動きを取扱った「草の根に生きる」（稲葉峯雄著）というのが出たんですが、その人はそういう動きをずっとやっていて、たとえば保健所につとめていて保健所にあまりいないんですよ。あっちこっち年じゅう回っていました。

アメリカの長所と短所

白石 アメリカでは、今おっしゃったようにこわれて行くコミュニティ再建のためにいい方法を考えて進めている。ところが一方では、今おっしゃったようなドロップ・アウトが出てくる、麻薬患者は出てくる。なぜこんなのが出てくるんだろう、たとえば小学校教育をみてみても、国旗に対

する尊敬、国家に対する忠誠、これを第一に叩き込んでいる。その人間が、どうしてあんなにドロップ・アウトするんだろう、日本の社会がアメリカを追いかけているような動きをしている以上は、そういう点も今から考えておかないと困ると思うんです。

いま日本がアメリカと違って救われるのは麻薬だけだと思います。それ以外は何から何まであとを追っかけてやっていますからね。そういう制度なり組織があって良いコミュニティをつくりながら、なぜそういうのが出てくるんだらうという、たいへん素朴な疑問が出てくるんです。

日笠 アメリカはそういう意味で、最近再開発が変わってきていますね。例のスラム・クリアランスから始まったんですけども、戦前から戦後にかけて、スラムを取り払い、前の人はかなり住み込めるようなアパートを建てていた。戦後それがだんだん発展して、また法律も改正されたものですから、それをどけてしましまして、オフィスやホテルを建て、住んでいた人がまわりに散らばされるんですね、これが非常に悪評をよんで、「フェデラル・ブルドーザー」なんていう本も出ています。そこでいまはそれを改めまして、居住者をできるだけ外に出さないで、現地に住まわせる、ただ、非常に悪い家は取り除くし、少しいたんだ家は直す、そういうリハビリテーションという形に変わってきていますね。そういうときに、やはりかなりスラムですから貧困な黒人がいるわけですね。そういう人たちに対しては、家だけ直してもだめなんです。そこでソーシャル・プランというんですか、今おっしゃったような組織づくりがあって、教育もやればいろいろなトレーニングもやると思いますけれども、そういうようなことと、環境を改善することとあわせていく。これをモデル・シティ・プロジェクトと呼んでいます。連邦の補助金も、その目的のためであればどんな割合に何に使ってもいい。その地区を総合的に改善するということで5年間位継続してかなり自由に使える補助金が連邦から出ているんですね。ですから都市計画のやり方も社会的な問題とタイアップして非常に変わっ

てきているわけです。しかし、アメリカの社会は日本とちがって特殊な条件をかかえていることは確かですね。

並木 『コミュニティ』誌の第1回目の座談会
ワーカーとしての人 材と訓練
で、大井町でいいコミュニティづくりをするのに
どういう人が住みこめばいいだろうかという話が

出まして、そのとき、藤田たき先生が、私の友だちで、どこへ行ってもすぐ近くの人と仲よしになってしまう女性がいるという話を紹介された。奥井先生がそれはどういう人かと質問され、「いなか出身の人で女子大を出ている人だ」ということで、「それでわかった」といわれた。ぼくが、いったい何がおわかりになったんですかと聞いたら、「いなかの人でないと、人と会う場合の親しみ、だれとでもすぐあいさつをかわすという親しみは出てこない。しかしいなかの人は視野が狭いんでだめだ、それにインテリジェンスが加わっていれば、いい町づくりに役立つ人なんだ」という話をされたことを覚えているんですが、いまの宮坂先生のお話は、さらにそれに一種の技術が加わるわけですね。

青井 スペシャリストなんですよ。

白石 それは結局社会学の部門なんですか。

宮坂 社会学の出身者も少なくともありません。あるいは社会福祉ですね。この間、僕の所の助手、女性ですけど、ハワイ大学に、1年半ほど行ってややそれに近いトレーニングを受けたんですが、これはいきなりどこかの地区に放り出されるわけです。彼女の場合一種のハウジング・プロジェクトの地区でしたが、わりに低い階層で、韓国人もいれば日本人もいる、太平洋諸島から来たものもいるというようなところにいきなり行って、何でもいいからそこの人と仲よくなって、そこの問題を一つ取り上げて、どうやって解決したらいいかやってみろ、そういうトレーニングを受けるわけです。

白石 それがお上からやっているというような形が出ないようにしろということですね。

青井　すでに「コミュニティ」のお話し合いの中で出たことがあると思うんですが、キブツ（イスラエルの協同組合的集団社会）などにはいる場合には、トレーニングを受けた人間がはいらなければならないけども、日本の場合、公団住宅などへはいるときは、たまたま1,000人に1人ぐらい当たっちゃって、ワアッと大喜びではいるだけなんだということなんですね。

白石　トレーニングあるいはテストが必要になってくるわけですか。

並木　協調性とか。

四権分立の制度づくり

青井　この間神戸の丸山地区のお話しがたまにありますが、あそこで非常におもしろいと思ったのは、

コミュニティ・オーガニゼーション・ワーカーにしても、ややもすれば行政の手先とみられちゃう。やはり行政以外のもう一つの組織があってもいいんじゃないか、もちろん行政がやってもいいですけれども。丸山地区の場合、たとえば神戸新聞というのが横について、住民と行政の二元的対立、（ほんとうをいえば、行政のほかに立法もあり、司法もあるんですが、現在は圧倒的に行政が強くて、立法も司法も影が薄いですから）の中間に介在し、両方をチェックしながら結びつけているわけです。二元構造を三元構造になおすためにもう一つの権力があっていいんじゃないですかね。もう一つの権力としては、新聞社のような情報機関でもいいと思いますし、大学のようなものでもいい。ただ、立法・行政・司法といった形式的な三権分立じゃなくて、もう一つ別な中立的な媒介の機関があって、常時調査をし、常時評価をし、新しいアイディアを出すということをすれば住民と行政が真正面から対立することも少なくなるんじゃないでしょうか。それらの中間にスペシャリストがいていい。それをどんどん養成していく。そうしないと、日本の場合にはややもすると上から下への行政指導になっちゃうわけです。

白石　しかもそれに対する心理的な抵抗がたいへん強い。

日笠　地方の大学なんていうのはそういう役割をはたすといいんです

ね。いろいろなものに関連して専門がありますから、そういう先生方がグループをつくって指導していく。

白石 そうですね。地方の大学も、そういう使命あるいは機能をもってやってもらえればもっといいものになるんでしょうが。

並木 どうしたらそういうふうに行くかという問題ですね。アメリカの農業改良普及員制度、あれは大学と非常に密接に結びついているようです。

宮坂 生活改良普及員がそうです。

並木 ところが、日本のは地方の大学とは全然関係ない。

白石 あれはどういう人になるんですか。

並木 農林省が採用して、それぞれ市町村単位にまとめてやっているわけです。

日笠 環境の問題でいえば、シティ・レベルの環境とか、コミュニティ・レベルの環境というのは、その地域できめられるようにすべきだと思います。最近では国もずいぶん権限委譲はしていますけれども、まだまだ中央でコントロールしている面が多いですから。

並木 スペシャリストに対する評価がないとおっしゃったでしょう、日本の場合、どういふんでしょうか。

宮坂 専門領域に対する評価ですね。結局媒介的な仕事なんですよ。行政官の観点というのは、たとえば結核が減ったとか、赤痢がなくなったとか、あるいは橋ができたとか、そういう評価になる。つまり他の手段を使っても組織づくりという行政効果は出るであろう。裏返しにいうと、一生懸命組織づくりをして、その結果として目に見える結果が出ないという、縁の下へかくれてしまうものだから、それで評価されにくいんじゃないかなという気がします。

住民の中にとけこむ 並木 いまの問題は、日本の社会の特殊性といこと
うか、特徴とたぶん関係がある。たとえば労働

力についても、専門職として格づけをやろうというときに、おれの会社の中でなら認めるけれども、会社を離れて認めるということがなかなかむずかしい。これは一種のタテ社会的なものがそこにあるということと関係する。いまのお話で、例はよくないかもしれませんが、共産党とか創価学会が今の町づくり、地域社会づくりを始めているとすれば、どういう機能、役割り、資格においてそういうことが可能なのか。従来だったら、その中にとけ込んで、その中で信頼される住民になり切っていないと、リーダー・シップはとれなかったはずですね。それが、よそ者が一種の組織づくりのスペシャリストとしてオルグする、どうしてそういうことができるようになってきたのかということですが。

青井 地域づくりのリーダーは、実際は地域の中に住み込んでしまっていると思います。いまのスペシャリストも、やろうとするなら、用事のあるときだけ、たまたまそこへ出向いていくのではなくて、そこに住み込まねばだめでしょうね。共産党や創価学会は目標がはっきりしていて、活動の成果によって自分があとで評価されますから、やる人も本気になれるんじゃないでしょうか。もちろん、自分の活動に対する熱情や信念の問題もありますが。

並木 どこが信頼されてそういうことになっているんでしょうか。

宮坂 そのような人の養成の場合 わりにうるさいのはパーソナリティです。それからやっぱり社会学とか、そういう仕事の背景にある社会心理学とか、文化人類学。そういうものを背景にして、アウトサイダーがはいっていくときはどういうアプローチやテクニックに基づいてというような、一応の理屈はあるわけです。それが新左翼運動なら新左翼運動のリーダーが、それが役に立つとわかるから、コミュニティ・オーガニゼーションの勉強をして、テクニックとしてはほぼ同じものが使える、それである程度は動いちゃうんです。

白石 共産党に習いにいかなければいけませんな。

並木 逆な見方をしますと、農村社会だったら、共産党が動かすのではなくて、農村社会が共産党を使うだろうという気がするんです。動かされていたような顔をして、実は使っている、その役割りがなくなったらそれまで。ちょうど「7人の侍」、あれです。戦争のときには専門家だから雇って、銀めし食わせて、自分たちはヒエを食っている。終わったらそれまで。というそういう形。

白石 農民はそういう知恵がありますね。

並木 スペシャリストと日本の地域社会は従来ならそういう結びつきになりそうな気がする。ところがアメリカの場合はそうじゃないんですね。

白石 それと今おっしゃったのは、オーガニゼーションのためにはいったということになるべく知られないで没入するわけでしょう。

宮坂 その辺がアメリカと日本の違いだと思うんですが、役所対住民の対立が、日本のほうがずっとはっきりしているんじゃないか。つまり、アメリカ人は、私は役所から来ましたといっても、そうたいして抵抗は感じないで、いいことはいいと……。

並木 バブリック・サーバントじゃないけれども、おれが雇っているというやつでね。お上という感覚がないから。

日笠 ヨーロッパはコミュニティなんていうことはあまりいわない。いわないということは、自治体がコミュニティなんです。だから自治体の職員が来ていろいろやっても、どうということはない。

白石 それをやるのが当然だと思うんですね。

並木 おれが月給払ってやとっているじゃないかと。

日笠 日本の自治体というのはほんとうの自治体でなくて……。

白石 他治体ですか(笑)。

日笠 もう少しまかしてもらって、責任もってめんどろみれるようにすべきですよ。

オールラウンドの人
間づくり

前田 コミュニティ・オーガナイザーというよ
うな人が活躍しうる幅が広がるとしますと、宮坂
先生のご説明のそういう人たちはある専門職、た

たとえば保健とか、農業改良とか、栄養改善とか、そういうようなことを必
ずしももたない、ある意味ではオールラウンド（万能）であるようにも思
えます。そうすると、活躍の場が与えられて、育って、成功すると今の過
疎地域の対応というようなことにも活躍が期待できるというようなことは
いかがでしょうか、つまり、さきほどから話題になっている、コミュニテ
ィが崩壊しつつある云々のことは、一つは、先鋭な形で過疎あるいは過密
というような問題が出てくるわけですが、とくに過疎の面に対して、Uタ
ーン現象というようなことも一般的になれば、先ほど並木先生も強調して
いらしたように、コミュニティ精神というものを基盤に置いて、そこでお
互いに復興しうるようなことに働きうるということが期待できるんじゃない
かと思うんですが、私、自分の仕事の仕事なものですから 具体的な技
術的なことが結びついてしまって、そうした場合の実態的なイメージがピ
ッタリしないんです。

青井 組織化しようとする、ある具体的な目的がないとだめですね。
だから、はいるのはあるときは保健衛生からはいる場合があるかもしれな
いが保健衛生だけにとどめず、だんだん広げていくわけです。

前田 オールラウンドのワーカーというか、それでとくに強いのがオー
ガニゼーション・オルグ的な要素、というようなことでしょうか。

青井 たとえばカウンセリングというものがありますね。カウンセリング
のクライアントというのは、ある特定の悩みを解決するためにやって来
るわけですが、人間の悩みというのは、一つを解決すればまた次に新し
い悩みがでてくる。だから具体的な悩みの解決にばかり目を向けている
と、カウンセラーは無限の悩みに対応しなければいけないことになってし
まう。そこで、一番最初はある特定の悩みに応じてやりますけれども、あ

らゆる悩みに耐えられる、あるいは自分の力でそれを解決できるような人間をつくるためには、ある悩みの具体的な解決法をポンと与えてやっただけでは不十分です。むしろ具体的な解決法を与えれば与えるほど、クライアントはカウンセラーに寄りかかってしまう。そうするとその人間を自立させるためにはどうしたらいいかが問題になります。はいるのは具体的ところからはいりますけれども、カウンセリングがねらっていることは、ある特定の悩みを解決するということではなくて、どんな悩みにも対処しうるオールラウンドな人間をどうしたらつくることができるかというのが最終の目的なんですね。具体的ところからはいれるけれども、その解決法を与えるのじゃなくて、クライアントを自立的な人間にするにはどうしたらいいのかという方向へもっていく、クライアントさえ自立させれば、新しい悩みができたときにもクライアントは自分で解決することができるわけですから。だから、結局自分で悩みを解決できるような人間をどうしてつくるかということになっちゃう。しかし最初はかなり具体的ところからはいらないと、向こうから来ませんからね。

宮坂 コミュニティ・オーガナイザーも、動きは全く同じです。ただ、ぼくは多少似た仕事をやっていて感ずるのは、そういう人間が信念を失なっちゃうというのは、たとえばさっきの奥田先生のモデルに戻っちゃうんですけれども、かつてスタートのときの時計の始まりのようなところでは、アイデアとしてはすぐ左を頭に描きながらやっていけば……。

並木 そこへ一足とびにいけないから……。

宮坂 日本のコミュニティというのはいかにあるべきかというのがわからなくなってしまう。このモデルでいうと、左上のコミュニティ・モデルという、これでいくんだということがはっきりしていると、相当動くんじゃないかと思うんですがね。

並木 不満をかきたてて意識させて、それに対するある解決方法を注入していくというのは、ある意味では楽なんです。

ニード・きっかけ・
リーダー

日笠 ニードですよ。住民の間にいろいろな
ニードがあるんです。たとえば騒音問題なんか動
機になってコミュニティが活動を始める場合があ

る、大阪空港の周辺ですが、あそこは騒音反対で住民が運動を起こしてい
る。それに運輸省が対応したりして、学校を二重ガラス窓にしたり、いろ
んな施設をつくったりした。そういうことで住民が集まったものですか
ら、騒音問題は一応置いといて、地域社会をもっとよくしようじゃないか
ということから、自治省のコミュニティに指定されたり、そこで活動が始
まっている。だからいろいろなきっかけがあるんですよ。

宮坂 おそらくコミュニティ・オーガニゼーション・ワーカーなしにそ
こへいくというのは、そこにたまたまりっぱなリーダーがいるとか、だれ
かがオーガナイザーの役割りを果たしているとかですね。

日笠 丸山だって最初には何かあったんでしょう。

白石 あれは防犯だときいています。

並木 まず出発点みたいところで、コミュニティにとっての敵が必ず
いるわけですよ。先鋭な目的意識をもった人が、住民の眠ったものをうま
くさまして敵を意識させて、これは解決できる、倒せる敵であるというこ
とを自覚させる。

白石 問題は倒したあとなんですよ。

並木 そうなんです。それで敵のない状態で暮らしやすくするコミュニ
ティはいったいどうしたらいいか、これがほんとうのはずなんです。

日笠 そういうコミュニティは、自治省のモデル・コミュニティの中で
も非常に例が少ない。多くは、何にも問題がない、そういうところで役所
から話がいった。それはいいだろう、施設の設計も活動計画も市につくっ
てもらおうじゃないかという、役所主導型のコミュニティが圧倒的に多い
です。

前田 逆説的な言い方になりますが、例の名古屋の新幹線公害の訴訟と

いうのがありますね。あれなんかは、もっと早くから問題を意識してまとめる組織者というか世話役というか、そういうものが全く欠けていたからあのように年配の方を中心とした、非常にシリアスな形、訴訟というような形で最終的なところまで突っ走ってしまったと理解していいでしょうか。

宮坂 訴訟が絶対いけないということを言い切っているかどうかは別として、そうだと思います。

並木 新幹線でも首都高速でも、つくったときは沿道の人に相当迷惑をかけていますが、本来あんなばかなことはあっちゃいけないと思う。それを公共優先とか、大国日本とかいうようなことで、つくる人も利用している人もあまり反省しないでやってしまった。

日笠 あれは都市計画にコミュニティ・プランニングというものがはいっていないからです。

白石 ほんとうにそうですね。

青井 道をつけるときは道だけでしょう。

総合的なソーシャル
アセスメント
並木 アセスメント（事前の評価）という言葉を使えば、ソーシャル・アセスメントがなかったということでしょう。

白石 ただ問題は、たとえば、文明の進歩と個人の迷惑との接点をどこにみつければいいか。車の問題にしても、なにをそんなに急いで走り回らんだ、テクテク歩いたり少しずつ運んだり出来ればいいじゃないか、文明の進歩と他人に迷惑をかけない、個人のしあわせとのある接点が何処かにありそうだという気がするんですが、それが社会定員論でしょうか。

日笠 西ドイツから来ている人に、西ドイツの最近の都市計画の傾向を聞いているんですが、大体おっしゃるような傾向になってきているんですね。都市の人口はふやさない、いままでは、将来どのくらい車が走るから道路はどのくらいにしましょうという計画の立て方だったんですが、そう

じゃなくて、いまある道路を有効に使うにはどれだけ車が走れるか、そういう発想に変わってきていますね。西ドイツの都市というのは、ベルリン・ハンブルク・ミュンヘンの3都市を除けば大都市といったって人口80万ぐらいですが、そのぐらいの都市でもそういう発想だそうです。非常に価値観が変わってきていますね。

青井 いままでのグループの使い方は、どちらかというグループを使って皆で何かしようとしたわけです。ところが、もう一つのこれから非常に重要になってくるのは、グループを使って自分自身をどうやって認識するか、手段としてのグループじゃなくて、グループ自身によって自己を発見するといったようなグループの使い方、そういうものからまず始めないと、いまの価値の転換というのは非常にむずかしいんじゃないかという気はするんですが。

白石 大体いいところへ来たんですが、結論というものが出ましかか。

並木 一番初めに出ちゃったのではないか。初めのところで路線が敷かれたから、その路線の上で各論をやったということじゃないですか。

日笠 今後どういう問題を取り上げるかというようなことで、ずいぶんいろいろな問題が出ましたから。

この10年間、研究所がとりあげてきた問題は、コミュニティとは何かという問題について結論はでていないけれども、これまで学者の間でいわれてきた狭い意味のコミュニティやアソシエーションの概念を超えて、人間社会という広い概念での問題も多く扱ってきたように思います。だからその意味では地域社会（研究所の名称になっている）という言葉は若干狭い意味に限定されているので、むしろ人間社会研究所といった方がびったりするように思います。そうすれば、狭い意味のコミュニティもアソシエーションも当然含まれるし、これらに共通した人間社会のあり方も含まれることになると思います。

そこで、今後の課題として重要と考えられるものを列記してみると、次のような項目に整理されるように思います。

- 1 すべての人間関係に共通なもの（A、C、F、Pに共通）
 - ・人間社会に共通する価値感
 - ・人間同志のつき合いの規範
- 2 地域社会とアソシエーションの関係（CとAの関係）
 - ・アソシエーションの社会的責任
 - ・地域社会に対するアソシエーションの貢献
- 3 スケールの異なる地域社会同志の関係（C₂～C₆ ローカルコミュニティの関係）
 - ・地方自治の確立
 - ・地域における自治体の役割
- 4 それぞれの地域社会、アソシエーションに固有の問題、（Fも含む）
 - ・目標
 - ・組織と活動
 - ・空間計画

並木 今後取り上げる問題は、青井先生のところでいくつか残された問題とか、それから今の日笠先生のところ、宮坂先生のところ、私も多少そのようなことをいっておきましたので、これの扱いをきめれば、残された問題は大体出るんじゃないでしょうか。

白石 どうも長時間ありがとうございました。

付 論

松 原 治 郎（紙上参加）

「コミュニティ」誌10



1 はじめに 周年の座談に参加できませんでしたので、紙上参加させていただきます。地域社会研究所が、「コミュニティ」という言葉を変動社会の中で、積極的な生き方を求める人たちの地域的連帯を指し示すものとして用い、そうした新しいコミュニティを目指すいろいろな生活の営みを、広くさぐっていこうという発想で、様々なテーマのもとに問題

追求をやってきたことは、時宜を得た——というよりは、時代の先達ともいえる——仕事をしてきたと思います。

ただ、それだけに、「コミュニティ」という言葉を一般化させ、社会に定着させる上で、ある種の責任を負ってしまったともいえましょう。私も、これまでコミュニティに関係する勉強をしてきた人間として、この際少し言葉の内実の検討に加わせていただき「コミュニティ」誌の存在意義について、いささかなりとも付言させていただきたいと願っています。

2 コミュニティの 定義

まず最も今日的な規定の仕方をしていますならば……、「コミュニティ」(Community)とは、地域社会という生活の場において、市民としての自主性と主体性と責任とを自覚した住民によって、共通の地域への帰属意識と、共通の目標と、役割意識とをもって、共通の行動がとられようとする、その態度のうちに見出されるものである。とくに、生活環境を等しく

し、かつそれを中心に生活を向上させようとする共通利害の方向で、合意できる人々が作り上げる地域集団活動の体系が、まさにコミュニティの発現形態といえる……ざっとこのようにいえると思います。

ところで、こうした規定の中には、四つの意味が含まれているといえます。第1に、コミュニティというからには、その基底には地理的空間としての「領域性」があります。土地を基盤にしたところの一定範囲内にみられる集群的な定住、あるいは土地への共属の認識を支えにした社会、それがコミュニティをコミュニティたらしめる規定要因の第1です（コミュニティの地理的規定）。

しかしながら、単に一定の地理的範囲内に生態学的な人々の集群があれば、それだけで直ちにコミュニティといえるかということ、決してそうではありません。コミュニティを規定する第2の条件は、その人々の間には、生活上になんらかの相互連関が生じており、個人のあれやこれやの（不特定多数の）日常的生活欲求が、それらの相互連関を通して充足されているという点に求められます。そうした人々の日常生活における相互作用のからみ合いは、長年の間に、彼らに共通の特徴的な慣習をも生み出します（コミュニティの相互作用的規定）。

有名なアメリカの社会学者 R. M. マッキーバーは、コミュニティを、「共同生活が営まれているあらゆる地域、または地域的基盤をもったあらゆる共同生活」といったように、上の地域性と共同性の二点から規定しています。伝統的には、コミュニティは、おおむねこの二つの要因だけから規定されていました。

しかしながら、とくに第二次大戦後になって、コミュニティという言葉がむしろ実践的な意味で使われ、コミュニティに期待する度合が高まってくるにつれて、次に述べる第3、第4の規定条件の方が、重視されるようになってきました。

第3の条件とは、変動する社会の中で、上の二つの条件——地域性と共

同性——を、意識的に結びつける要因、いいかえるならば、人々の生活上の相互連関を一定の地理的範囲で果たさしめ、自足させている条件としての、生活環境施設の組み合わせの体系（システム）としてコミュニティが存在しているという事実です。人々の定住の生活は、社会的に共通に存在している生活環境施設の共通利用を媒介にして成り立つもので、それによって生活欲求が社会的に充足されているわけです。一定地理的範囲上に、そうした施設の一定の組み合わせの体系がなければ、人々の地域生活は成り立たないわけです。こう考えてきますと、この規定は、より豊かな生活の場として、新しいコミュニティ形成を志向する際に、ひとつの戦略的視点を提供することにもなります。「コミュニティ・ミニマム」という発想はここから出てきます（コミュニティの施設体系的規定）。

そして第4に、これら施設に媒介された生活利害の共通性がテコになって、同じ土地に共属するという感想が呼び醒されて、人々は共通の生活防衛や維持や向上という目標に向かって活動を展開させようとする、そうしたコンセンサス（合意）と、それにもとづく行動のなかにコミュニティの存在を見出そうとする規定の仕方があります（コミュニティの態度的規定）。

たしかに社会の変動、交通、通信、情報体系の発達、伝統的、牧歌的なローカル・コミュニティの存在を次々に打ち壊し、人々の生活の空間を拡げ、共同体の秩序や地域連帯を失わしめました。けれども、そうした「地域性」と「共同性」というコミュニティを支える条件が弱まれば弱まるほど、逆にコミュニティを存在せしめなければならないという力が働き、人々の心の中、態度のうちにコミュニティを見出そうとする傾向が強まってきたといえましょう。

3 コミュニティ形成の範囲

こうして「コミュニティ」が、現実を説明する存在概念（sein）というよりは、こういうものでありたいとする当為概念（Sollen）として語られ

るようになりますと、コミュニティ形成という観点でどうしたらよいかが、話題の焦点になってきます。

その際一番先に問題になるのは「範域」の点です。つまりどの範域でコミュニティを作ることが効果的かという問題です。すでに述べましたように、「コミュニティ」ということばで語られるものは、単なる地域的な空間といったものではなくて、窮極的には地域生活を等しくする地域住民の心の中に形成されていくもの、いいかえれば人々のもつ価値観にふれあう意識の問題です。したがって地域的な範域はいろいろであり得るわけで、一義的に決めることは困難でしょう。

けれども、コミュニティは同時に、そうした共通の認識を手掛りにしながら、現実の日常生活上の問題解決や、共同の地域生活の向上を目指して、共通の行動に立ち上がろうとする人々の行動体系でもあり、その際、生活環境施設の体系的整備ということが、戦略点ともなりますから、それに最も適合的範域を指定してみることは、必要なことがらだといえましょう。

そこで、最も日常生活的な狭域のコミュニティ形成を考えるとときに、どのくらいの拡がりを想定したらよいかですが、最近のコミュニティ形成論で、ほぼ共通しているのは、伝統的な地域結合の単位であった町内会、部落会、自治会の拡がりよりは広く、かつまた市区町村といった行政区域よりは狭い範域として、中間の「小学校区」もしくは「中学校区」ないしそれに準ずる範域のようです。

コミュニティ形成という新しい酒を盛る器として、既存の町内会、部落会というものがあまりにも手垢に汚れすぎているという意味もないではありませんが、それよりは、日常定住の生活を、公共の環境施設の体系的整備によって確保させ、また向上させていくことを考えると、町内の範囲では狭すぎるようです。そこで新たに、ある程度日常的な親近性が保てて、またある程度効果的に施設利用ができる範域として「学校区」が浮かび上

がってきたわけです。

学校を中心とし、幼稚園、児童文化センター、あるいは児童館、老人憩いの家など、本来一番行動範囲の狭い幼児、児童、老人にとっての、教育や文化や福祉の施設で、かつ徒歩による利用圏域が想定され、またそこに、最も日常性の高い購買品目に対応する商店街（群）が形成されており、郵便局、駐在所、役場出張所などの行政サービス機関も設置されている……こうした拡がりの地域が想定されます。

面積はふつう4km²前後、人口規範からいって、町村あたりで5千人、大都市で2万人ぐらいといったところでしょうか。上のほかに、小公園、緑道、安全通路などのネットワーク、さらに人々を求心的に集めるコミュニティ・センターの集会施設、体育施設などを整備するという努力も必要でしょう。

もうひとつのコミュニティ戦略は、こうしてコミュニティ施設体系の整備計画が出来たあとの施設の管理、運営までを一貫しておしすすめることの可能な住民組織をどう作るかです。そのためには、やはり住民各層のそれぞれ多様な生活欲求が作り出す各種の集団や組織を糾合できる「コミュニティ委員会」のようなものが必要なようです。既存の自治会連合会のようなものをそのまま担い手にしようとする、どうしても動脈硬化をおこしてうまくいかないようです。とくに婦人層、子供、老人といった人々が、主要な行動隊になって、その人たちのエネルギーをうまく生かす組織がなければだめなようです。

4 コミュニティ・ ミニマム

一方、施設体系についての「ミニマム」の論理が、コミュニティ形成に際しては大切だと思います。最近はやりの「シビル・ミニマム」論は、やはり行政の政策公準を示したものにすぎないのでして、地域住民つまり生活主体者の生活の実質を出発にした基準設定とはいえません。こうして「市民的発想」というよりは「生活者の発想」に立って、「コミュニティ

・ミニマム」を想定するわけです。

なぜならば、コミュニティは、市民の定住的生活の体系として表現されるもので、その地域的表現だからです。さらにまた今日の時点では、その生活者の主体性、連帯性の回復の手掛りとして、コミュニティ形成を考えようというのですから、実質的な生活体系と運動体系という二つの側面を、環境条件整備という方向で結びつけるのに、目標基準が必要で、それをまずミニマムの水準で追求しようというのが、「コミュニティ・ミニマム」なのです。

もちろんミニマムだけでよいわけではありません。さらに次の目標は、「オプティマム・スタンダード」（好適基準）であるし、さらに、将来生ずるであろうより高い欲求を先取りして整備し、むしろ人々のより高い欲求を開発する形の「プロジェクト的施設」の整備も考えていく必要があります。CATVなどは、この後者に入るものかもしれません。

そうなってくると、それらの施設は、必ずしもすべて行政による公共投資によってだけ整備されるものとは限らなくなります。コミュニティ住民自身の自己負担とか、外からの民間資本の導入なども、ときに必要になるかもしれません。ともかく、生活者自身の主体的参画（知恵と技術と労力と金銭をふくめて）の意思こそがコミュニティ形成の根元といわなければなりません。

注 1964年7月13日から10日間ギリシャ
デロス島での会議の報告

磯 村 英 一

外国でも毎月「コミュニティ・ディベロップメント・アンド・トラディション」という本を出しておりますが、これは結局こちらの研究所の「コミュニティ」と同じようなものでありますので、こんど私はこれを訳して送ってやろうと思うのですけれども、むこうではコミュニティの研究を、いろんな学者が集まってやっています。

こんど出席しました人々は、各国の学者があらゆる部門から集まっております、コミュニティというものを、全般的にはヒューマン・セツルメント (Human Settlement) というふうに広く解釈をし、そしてこのヒューマン・セツルメントを10のカテゴリーに分けて、そのなかで具体的なコミュニティというのをあげております。

そういった内容を申しあげます前に、どうしてこういう会議ができているかということをお願いすると、この会議は昨年から始まりましたものですが、ずっと遡って1920年に——これは日笠先生がた建築のご関係の方がよくご存知なんですが——主として建築関係の世界の学者がアテネに集まり、世界の都市づくりの憲章、通称「アテネ憲章」というものをつくりまして、これが95か条にわたってできております。

そのなかに、コミュニティというものがどういう条件でできるかということがあげられております。

内容的には、住居はどういった条件でなければならないか、職場に対してはこういう条件が必要である、レクリエーション、あるいは交通はどうあるべきか、というようなものが95か条にわたってありますが、それがすでに40年もたってしまいましたので、ひとつ世界の地域社会の変貌に伴って、新しいものを考えたらいいじゃないか、という声がたまたまいろんな人から出まして、そのなかでとくに、コミュニティを中心に計画の面でも今までいろいろなアイディアを出しておりました、アテネの、東京工業大学といったものに相当しますアテネ・テクノロジカル・インスティテュートのプレジデントをしておりますコンスタンチノ・ドクシアディズ (Doxiadis, Constantinos A.) という人が主唱いたしまして、昨年私どもにも集まれということで「世界町づくり会議」がもたれたわけです。

この会議はまったくプライベートの集会でして、昨年も同じ時期にアテネに集まりました。幸いギリシャのある会社のプレジデントが船を貸してくれ、その船に40

人の学者が集まりましたが滞在する限りにおいては、宿賃が助かるというわけなんです。そのようなことで10日間、会議をいたしました。

目的は、新しい「アテネ憲章」をつくりたいということでありましたが、話し合ってみますと、現在の世界でヒューマン・セツルメントというようなものを基本的に考える必要があるのではないかという意見が出て大きな課題としては、都市が非常に大きくなりすぎるということが第1、それから自動車の発達と、われわれのコミュニティをどのように調和させるかということが第2、次に都市の発達に関連して農村をいったいどうするかということが第3の課題であります。したがってこの三つを前提にしまして、現在の時点において人間のいちばんしあわせなコミュニティのスケール、いわゆるヒューマン・スケールというものは、どの程度がいちばんよいかを見出すことが第4点で以上の四つが主題目でございます。

昨年もこういうことを自由討議いたしましたが、なかなかまとまりませんで、それで今年、第2回をやりました。今年が昨年と違いましたのは、ソ連から2人の学者が加わったことでした。この2人は新しいメンバーなものですから、考え方をまとめますのに、かなり手間どりましたため今年は、新しい「アテネ憲章」といったようなものをつくることができませんで、来年もう1回集まろうということで今年は終わりました。

参加した学者の1、2の名前をあげますと、現在M・I・T（マサチューセッツ工科大学）の都市計画の教授をしておりますチャールス・エーブラムス（Abrams, Charles）という方、産業分類で有名なコリン・クラーク（Clark, Colin Grant）これはロンドン大学の教授です。

ニューヨークの行政研究所の所長をしているテビン・リンチ（Lynch, Tevin）これは行政方面の教授であります。それから日本にもまいりまして、ドーム建築——野球場なんかをドームの中へ入れてしまうというので有名なバックミンスター・フラー（Fuller, Richard Buckminster）という人がまいっております。また、日本にも紹介されております「メガロポリス」という厚い本を書きましたジャン・ゴットマン（Gottmann, Jean）というフランスの学者もきておりますし、イギリスの前インド駐在国連大使をしておりましたアーサー・ケストラー（Koestler, Arthur Otto）さらに、サー・ロバート・マッシュ（Matthew, Sir Robert H.）と申しまして、イギリス建築学会の会長、アメリカからはかなりまいりましたが、その中に現在加州大学の都市環境部の教授で、日本にもきたことのあるマルティン・マイヤソン（Meyerson, Martin）という人、それにコロンビア大学の名誉教授であるレックスフォード・タグウェル（Tugwell, Rexford G.）といった人たちが見えまして、10日間いろんな討議をしたのであります。

その討議のいちばん基礎的なものを考えた場合におきまして、ヒューマン・セツ

ルメントのスケールというものを、さきほど申しましたように、10の段階に分けております。まずこれをご紹介申しあげますが、最初にヒューマン・スケールのいちばん小さいユニットはなんであるかと申しますと、**部屋**だということ、部屋が人間の住むいちばん小さいユニットで、これをどのようにセツルするかということが、まずコミュニティを考える場合において、非常に重要なのではないかと、にもかかわらず部屋というもののあり方が、かなりおろそかにされているのではないかとということで、第1のスタートがまず部屋である。

部屋のいろいろなファンクションに家族というものを加えまして、そこではじめてハウスというものが、第2のカテゴリーにはいってまいりました。

その家がある程度集合いたしまして、こんどは**ネイバーフッド**と申しますが、近隣的な一つのグループでこれを第3といたします。

実はその間に、プロットとかブロックというのがございます。これをこの際は抜かしまして、私はいちおう10に分けてご説明申しあげるのでありますけれども、その**プロットとブロック**というのはいれば12になります。

このプロットというものはどう理解すればよいかと申しますと、家の機能のなかに若干の公共的なものと申しますか、たとえば井戸をいっしょにするとか、水道をいっしょに使うというようなもの、そういうものにプロットという一つのアイディアをあてはめております。

それからその次にブロックと申しますのは、一つの道路で区画された場合において、その地域をブロックのユニットであると解釈します。ですからプロットのユニットは、一つのブロックのなかで、あるなにかの機能というものを共同にしました場合をいいます。したがって、あるいは12に分類したほうがよろしいかも知れません。

そのブロックが1、2いっしょになりまして、**ネイバーフッド**となります。したがってネイバーフッドの場合におきましてもネイバーフッドと認める要素において共同の遊び場であるとか、なにが必要であるかということは、いま議論のさいちゅうであります。いちおうユニットとしては**ネイバーフッド**だということでその**ネイバーフッド**がいっしょになりまして、一つの**コミュニティ**になります。

コミュニティという場合において、どういうことを考えるかと申しますと、行政的な管理機構はそこに含まないというので、あくまでも住民の自主的な共同体であるということを前提といたしております。

それからそのうえに**タウン**というものがありますけれども**タウン**ということになりますと、アドミニストレーション（行政）のセンターをもったものが、**タウン**だということに考えられておりました。

建築方面のかたが非常に多かったものですから、そういう共同体的なものも、フィジカルな具体的なシンボルで表わしたいというので、だいたいいろいろな議論をい

たしましたが、それはまたあとのことにはしまして、私どもは、住民のコンセンサスと申しますか、なにか共同意識というようなものの必要があるんだと考えます。ところが建築のかたは、なんらかの形で、たとえば郵便局とか、ポストがあるとか、そういう形で表わされていいじゃないか、それが一つのコミュニティとして認められていいので、それが国によって若干違うということも考えられるが、しかし、それは行政的なものとは違うんだ、したがって、コミュニティがいくつか寄りますとそこに行政的なファンクションというものができて、これにタウンという名前をつけまして、タウンからシティという次のカテゴリーになるわけでありますが、その場合は、人口の規模といったようなものについてかなりいろいろな議論になりましたが、まだかならずしも決まりません。

このシティの場合におきまして、いろいろ議論がございましたが、ヒューマン・スケールとしてのシティは、だいたい人口30万位が適当ではないかこれはあとで申しあげます自動車時代というような場合におきまして、いろいろなファンクションを合わせてみますと、30万のヒューマン・スケールというものが一つの目標となるのではないかと考えられます。しかしその場合においては、シティだけのファンクションならば30万が限度だ。けれどもそこに日本のように県とか、アメリカのカウンティというもののファンクションが、その都市のなかに加わってくれば、50万とか60万というものが、あらためてでてくるんじゃないかということで、それをいわゆる普通の都市とは違ったものと扱って議論をいたしております。

ですからそれをさらにひろげますと、リージョン(地方)の中心と申しますか、もっと広がりますと、100万というものも認められるのでありますけれども、100万ぐらいいになりますと、非常に小さい国からもきている人がありますので、そこではキャピタルなんかも、だいたい100万程度でいちおうヒューマン・スケールとしては、もうマキシマムではないかというようなことも、大いに議論されて、まだ検討の過程であります。必然的に、東京の1千万ということが非常に問題になりました。同じ1千万でありまして、ニューヨークとロンドンと東京とではそれぞれ違う点がある。ニューヨークの場合におきましては、これはシティとリージョンのキャピタルであるけれども、ネーションのではないのではないか、ネーションのキャピタルというものは、ワシントンにあるじゃないかということが、かなり分析されました。

それからロンドンの場合におきましては、東京に似ていまして、セントラル・ガバメントもありますから東京的だけれども、現在のいわゆる皇居といったようなものの占めますいろいろな割合は東京のほうが多いのではないか——東京のことを知っている人もいたものですから——という議論もでたわけなんです。

したがって都市のスケールということでは、30万から50万というようなところに数的な一つの意見がまとまってまいりました。

こんどはそのうえになにかあるかと申しますと、7番目に、メトロポリスがあり

ます。あるいはプロットとブロックを入れますと9番目になるんですけども、このメトロポリスというのはシティとは違っていて、シティというのは、かなり行政的な一つのスケールを考えるんですが、それが機能的にさらに周辺に影響を及ぼすような場合において、そういう範囲をメトロポリタン・エリア、あるいはメトロポリスというべきではないか、というふうにお互いに話し合いました。

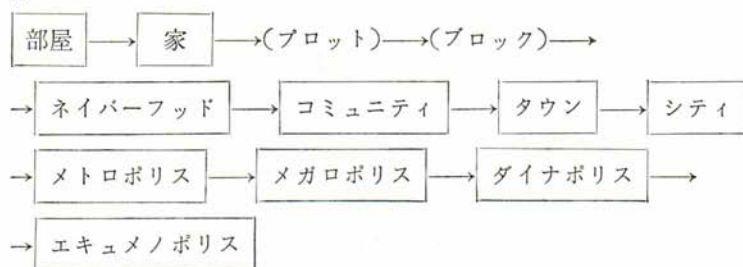
その次に、メガロポリスというのがあります。これはメトロポリスがつながりましたもので、現在、アメリカの北はボストンから南はワシントンまでつながりましたようなものを、いちおうメガロポリスといっておりますが、メトロポリスの連続体であると考えます。そのうえが、ダイナポリスというのがありました。これはあるいはお耳新しいことかと思うのでありますが、ダイナポリスというのは一つの都市が中心になりまして、次第にその都市を中心に、衛星都市的なものが、一方に連続的に発展していく、そういう形態でこれをいわゆるダイナミックに発展していくというので、ダイナポリスという言葉を使います。日本でもってダイナポリスというものが考えられるかと申しますと、日本の都市の形成を見た場合一つの都市が中心になりまして、同心円的に発展しているのが非常に多いようで、したがって一方にだけ発展するという形態は、日本としてはどこをあげてよろしいのか、私寡聞にしてちょっと話ができなかったのでありますけれども、まあダイナポリスというものをあげております。

最後は、エキューメノポリスというのがでてまいります。これが将来の都市の一つの形態としてあるのではないかということであります。

エキューメノポリスといいますのは、どういうことになるかと申しますと、かならずしも空間的に地域がつかない、一つの体制を考えます。あるいは非常に広いグリーン・ベルトを中間におきまして、そして周辺の都市とつながるといったような姿も一つのエキューメノポリスというふうに申しますし、またさらにその考え方をひろげまして、パチカンのシティと、それからパチカンのいろいろなキャソリックの団体とのつながりというような姿も、エキューメノポリス的なものと考えられるのではないかということです。また空間的につかないという意味から、たとえば国連の首都といえば、現在これはニューヨークのまんなかにあるんですけども、ニューヨークとは行政的に関係がない。が、しかし国連というものは、全世界の首都にいろいろな影響をもつということから将来、そういった都市の姿がパチカンの形態とか、あるいはエキューメノポリス的な形態というものになるのではないかというふうに考えられてきて、いままで申し上げましたように、ヒューマン・スケールのいちばん小さいものから、いちばん大きいものというように分類をいたしました。

それでは、その10か12に分けましたなかで、どこでヒューマン・セツルメントの一つの区切りをつけるかと申しますと、タウン・アンド・シティといったような段

注



□ は10で () を加えて12分類となる。

階と、タウン・アンド・シティから後のなかにおけるコミュニティのあり方ということが、いちばん議論の焦点になりました。

その焦点は、コミュニティというものの基礎的な一つの考え方ではありますが、いろいろな学者の意見といたしまして、コミュニティというのは、やはりフェース・トゥ・フェースのリレーションによってできあがるものではないか、つまり社会学で申します目の届く限りとか、あるいは足の届く限りとか、声の届く限りということでございます。

目の届く限りということを、建築のかたはどういうふうにみるかと申しますと、教会の塔が見える範囲だとか、あるいは町のタワーが見える範囲だとかいうふうにおっしゃいます。それから、西欧の方が多いものですから、教会の鐘が聞えるということが、コミュニティというものの考え方にとって、やはり必要なんじゃないかという議論が多くでまして、考えようによりましては、われわれも、考えを改めなければならないんじゃないかと思ったんです。

最後にはそれじゃ足の届く限りという場合、自動車を入れるか入れないかという議論でとうとう自動車は入れないほうがよろしいということになり、それでは自転車はどうかという議論になりましたが、自転車で歩く範囲内というような非常におもしろいことにまでなったのでありまして、いちおうその辺をコミュニティとする。

したがってそれ以上になりまして町という場合は、自動車は自由になるわけなんですけれども、まずコミュニティというものをデザインする場合には、基礎的にそういうもので固めたならばどうかというような意見が非常に強かったのであります。

そんなことでドクシアディスという人は、自分でこういう形のものをいま設計しております。そしてまたパキスタンの首都を、こういうヒューマン・スケールでもって、いわゆるコミュニティの中へ自動車を入れない。そこにはなんらかの形で、教会かあるいは学校かわかりませんが、いろいろなものを設けて、コミュニティの

センターというものを次々に配置し、一定の地点までは自動車はいってくるけれども、それからあとは自動車を入れないという形で、しかも便利なスケールを考えようというのが、そこに出されました主として建築の方面の人たちの主張でございました。

これにつきましては、アメリカのシカゴ大学からまいりましたリチャード・マイヤー (Meier, Richard L.) という教授なんかは、マス・トランスポートーションの立て前からいいましてかなり反対の意見もいっていましたが、そういう反対の意見がありましたにもかかわらず、いま申しあげましたように、コミュニティというものについていわゆる西欧的な伝統をかなり考えながらいきたいという意見が強かったのは、私どものメンバーとして加わってございました (これは人類学者でございますが) アメリカのマーガレット・ミード (Mead, Margaret) と申します女の方で非常に精力的に発言する人がおりまして、この人が、現在のような都市の姿というものは、けっして人間に幸福をもたらしているものではないということを、非常に強くいってございました。

そしてわれわれが住居に帰った場合において、ある程度のレクリエーション的な効果ももてるようなものが、コミュニティの目的の中でもうすこし願みられなければいけないのではないか、かつては寺院・寺院の境内・教会・教会のヤードというものが、非常に大きな役割をもったんだけど、それが今日は消えている。それからイギリスの都市計画を見ても、あるいはアメリカの計画を見ても、とくに団地なんかを見ると、いわゆる個人のヤードというものがほとんどなくなっている。それが集団化したヤードの中でもってどう生かされているかという、かならずしも十分ではないので、もうすこしそういうアイディアを中心にした一つのコミュニティというものの基礎的な概念をつくってみてはどうか、というのがだいたいの主張でありました。

これが主として、いま申しあげましたコミュニティを中心にした考え方の焦点になっているわけなのであります。

ところが、こんどは都市計画、あるいは最近のように地域計画といったような問題になりますと、一方においては機能的な町づくりというものを、いまのコミュニティとどのように調和させるかということについて、まだ決定的な方向がでないわけでございます。しかし原則的に私どもは、いまのコミュニティというものでまとめなければならないということを感じながら、一方において議論がありましたのは、三つの方向があるのです。

一つの方向はなんであるかと申しますと、これは住居の中で、どの程度の生活が住居を中心にして果されるかという問題であります。そこで問題になりましたのが最近のアメリカ人なんかの生活の中で、週末になると、どっかへ出かけてしまう。つまり生活というものを週末において二分するという形態が、はたしてそのまま今

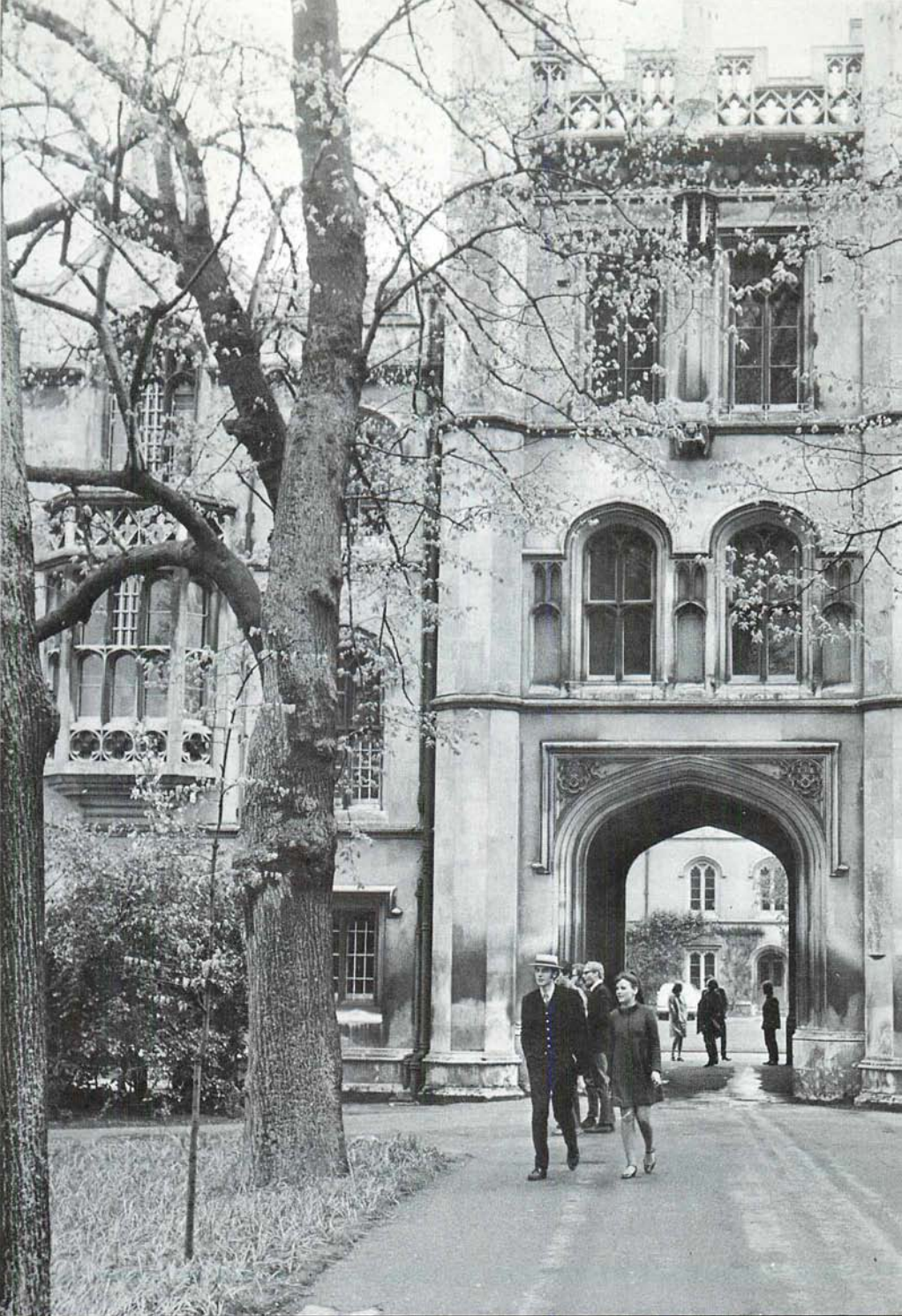
後もつづいていくものか、それとも、コミュニティの中で生活を送るというような形になるものか、これが今回の会議の場合におきまして、議論の一つの焦点になりましたが、これはまとまりませんでした。主としてアメリカ的な考え方は、1週5日はコミュニティの生活をしてよろしい。しかしもう一つのコミュニティをもつべきだという意見が、比較的、自動車を中心にしました、自動車の生活を生かそうとするアメリカ人のなかにおいて強い。したがって、週末にもう一つのコミュニティというものをつくるような、いわゆるレクリエーションを中心にしたコミュニティというものがあっていいんじゃないかという考え方であります。

その場合におきましても、別荘みたいな形——別荘という言葉が悪いんですけども、なんかレクリエーションのジードルング（セツルメント）みたいな形で、そういう生活を営むための第二の住居として考えるか、それとも機械的にレクリエーションを営むための集団的なものにするかどうかという問題につきましては、これもまた議論が分かれております。

日本はどうかということをよくいわれるんですけども、日本は中間的に、いわゆる別荘をもったり、そういう形は現在の1週6日の生活からいったら考えられない。しかし日本の全体の傾向からしましても、寮とか、あるいはレストハウスというものが非常に進んでいる形態は、いわゆるコミュニティというものを二つに割ることが意識的にはなくても、レクリエーションというものがコミュニティからある程度まで離れている形態としてみられるのではないかというような発言を、私はいたしましたのであります。ところがそれは飛躍じゃないかということをいわれましたけれども、日本がもし週5日の働きの日ということになりますれば、おのずと形態が違ってくるのではないかと思うのです。しかし、現在の段階においては、週末はせいぜいそういう形において、われわれはレクリエーションを充実しているんだ、というふうに発言してまいりました。

したがって、もう一回主としてコミュニティの問題にかえりますけれども、コミュニティというものを、現在われわれが日本の学会、それもいろいろな学会で考えております以上に、この会議におきましては、二た通りに分けましたところの自動車利用と自動車を利用しない、というこの二つの問題のジョイントを非常に重要な役割を果たすものとして扱っておりますことが、今回の会議の一つの焦点ではなかったかということであります。

（本註は第2回デロス会議に出席された磯村理事が1964年9月11日の当研究所理事会の席上報告されたものの抄録である）



トリニティ・カレッジ
——ケンブリッジ大学——

提供・イギリス大使館文化部
(次頁も)



モーニングコーヒーを飲む学生たち
—— オックスフォード大学 ——

日本の社会とイギリス の社会とについて

* R. P ドーア教授を囲んで

きき手・当所企画委員

(発言順)

並 木 正 吉	青 井 和 夫
白 石 清	宮 坂 忠 夫

* カナダ ブリテッシュ・コロンビア大学助教授、イギリス ロンドン大学教授をへて現在サセックス大学教授、同大学開発研究所研究員 社会学専攻。西欧の日本研究の社会学者としては第一人者。55年来日、山形、山梨の農村を歩き、「日本の農地改革」を書いたほか、「都市の日本人」「徳川時代の教育」の著書がある。落語ができ“変体がな”すらこなすほど日本語は達者である。1925年生まれ。

I 家庭とコミュニティとの関係

並木 きょうはドーアさんをお囲みして、コミュニティに対する日本人と外国人、とくにイギリスの人たちの考え方のちがいをいろんな角度から勉強してみたい。まず、家庭のあり方から入ってみたい。コミュニティと家庭の関係について日本とイギリスで、どういう点が違っているか、あるいはどういう点が似ているか、そういったところからお話ししていただきたい。

日本では家庭よりも地域
社会の比重が重かった

ドーア 現在のことを考える前に、まず伝統的な社会のことを考えてみたい。もし片方に家庭という集団、片方に近隣組織としての地域社会というか共同体を考えて、その二つの比重を比べてみた場合、家族制度が強いといわれている日本のほうこそ、案外、家庭のウェイトが軽いんじゃないかと思う。それが端的にあらわれているのは、儒教における二つの大きな至上命令、忠と孝についての日本人の考え方です。シナにおいては、孝が先で忠があとです。ところが日本においては忠が先で孝があとです。忠孝の精神でしょう。孝忠の精神じゃない。その一つの象徴的な事件として、平家物語にでてくる平重盛——孝と忠の板ばさみになって、結果として忠が勝つということがあった、と思う。

青井 かれの場合はジレンマに嘆くだけです。

ドーア 嘆くだけで終わっちゃうんですか。ほかのカブキでも、自分の子どもを身替わりにして、つまり、自分の家庭の一員を身替わりにして、

もう一つの政治集団としての家来と殿様というコミュニティのために犠牲にする。

それから村においても、コミュニティの拘束が強いので、村八分というのは非常にこわい。したがって自分の家族の一人がなにか悪いことをした場合には、それをあくまでかばって、そして村八分をくうかというとなんてじゃなくて勘当する。悪いことをしたものを家からはき出す。それは見方によっては、家族をなしている個人個人よりも、家という集団が大事だ、家庭とコミュニティとの関係よりも、むしろ個人と家庭との関係において分析したほうがいいかもしれませんが、コミュニティの拘束力が強いだけに、家庭の中の個人が犠牲にされてしまって勘当をくうということでしょう。これは、とくに地中海あたりの農村とは非常に対照的です。イタリアでも、ギリシャでも、トルコでも……。自分の家族がなにかをやって反感をくう場合には、よいことをしたにしろ、あしきことをしたにしろ、とにかくかばって家と家との対立が何代も続く。コミュニティというものは、第一拘束力がない。

個人・家庭・コミュニティの結びつき
——日本とイギリス

ドーア イギリスにおいても、日本の部落や村みたいな拘束力をもったコミュニティは、もう600年以來ない。結局、こう考えられるんじゃないか。日本の社会の伝統的な型としては、まず個人

人があって、その個人が集まって、家庭・家族をつくる。そして家族という単位がいっしょになってコミュニティを結ぶ。ところがコミュニティから考えれば、個人が直接コミュニティに結びつかない。ただ家族の一員としてしかコミュニティに参加しない。それと対照的にイギリスの社会は、伝統的かというと、この200年ぐらいいでできあがった型をみると、個人があって個人が片方では家族の一員であり、また片方ではコミュニティの一員である。家を通じて家の一員としてコミュニティに帰属するのではなくて、個人としてコミュニティに帰属する。同時に個人として宗教集団にも加盟

する。また職場集団などにも結びつく。そこにももとの考え方において、かなり根本的な違いがあると思います。

**地域社会よりも国家
を意識するイギリス** **ドーア** また農村を比べてみますとイギリスにおいては、まず、個人が家族の一員であると同様な形で、あるいはそれと匹敵できるくらいの形で

コミュニティの一員であるかといえばそうじゃない。コミュニティの存在が、人の頭の上においては非常に薄い影しかもっていないと思います。一つの限られた地域社会としてのコミュニティというよりは、むしろ国家の一員であるという意識のほうが強い。結局、政治行動をやる場合においては、地域社会の一員として投票したり、あるいは人を応援したり、なにかの決定に参加したりする機会と、国家の一員としてそうする機会と比べてみたら、後者のほうが、平均のイギリス人としてはずっと多いと思います。

**イギリスでは町内会
がない** **ドーア** 農村がそうであるから、まして都会に
おいておやです。日本でも、伝統的な農村にある
ような拘束力をもったコミュニティは都会にはな

い。なるほど日本では都会でも、やはり農村にあるものを原型とするような形をとっている。ですから町内会があって、その町内会の構成単位は、やっぱり家であるという形を大抵とっている。そしてまた都会は、農村出身の人が人口の大部分を占めているから、それはコミュニティのあり方として、当然のものと受けとめられて、べつに生活上の必要からそれに参加せざるをえないということがなくても、そういう町内会の組織に参加することを、農村生活の慣性でやっている人が、かなり多いんじゃないかと思う。そういう現象はイギリスではあまりみられません。まず町内会的な組織は、イギリスにおいては皆無といってい

白石 いちばん最後におっしゃった町内会的な組織、これは農村の場合は別として、都会地のことだと思うんですけども、そういうものがぜんぜんないとなると、たとえばその町全部がいっしょにやらなきゃいけない

ような仕事のときはどういう形になりますか。

ドーア それは日本にもある市町村行政機関によってまかなっている。結局大きさの問題でしょうけれども、町内会というのは、ほとんど顔見知りの人たちが、とにかくみんなお互いに知りあっていられるぐらいの大きさの単位です。そういう単位で協力して仕事をする。そういうことはまずイギリスにはありません。

たとえば私が育った町は、6万人の人口でしたがこの町と個人が直結する。その間の中間組織というものはぜんぜんなかった。ちょっとできあがったのは戦争のときです。つまり防空組織として焼夷弾警戒のために……それと終戦のとき、ストリート・パーティー、みんなで金を出し合って一杯飲む。それも目的集団であって、ストリート・パーティーはまたそうであったんです。それ以外にはまずありませんね。

白石 日本では、農村から都会地への人口移動が相当多いんですが、イギリスの場合はその点いかがでしょうか。

ドーア 結局、30年の間、農業人口というのは6%かそこいらでしょう。いま4%ですか。だから……。

白石 人口移動はそうめだたない……。

ドーア そういう時期は、19世紀の半ばごろでしたね。

青井 たとえばロンドンみたいなかなり大きな町の場合、その中に日本の区に当るようなもの、あるいは区より下の単位というのはないですか。

ドーア 行政区としては、パリシュ (Parish) というのがあるのです。そして18世紀の終わりごろまでは、いろんな統計がパリシュ別にできています。いまでも、そのパリシュの組織は存在している

パリシュ (教区) の
存在——一斉大掃除
日の習慣はない

るかもしれませんけれども、ほとんどなにも仕事をやっていませんし行政的な機能はもっておりません。ただ、イギリスの地方行政は、なにも一つのプランを考えてだんだんにつくったものじゃなくて、なれあいにできあ

がったようなものですから、地方制度は地方ごとにまちまちですけれども、ところによってはルーラル・デストリクト・カウンスルという村の構成単位としてバリッシュが残っている。そしてそういうところは、法的に制度化されてしまって、選挙も普通によそのところの選挙と同じようにする。しかし日本の町会にあたるものはない。だから寄付を集める場合などでも、たとえばレッドクロスの寄付だったら、レッドクロスの会員がまわって、その金を集める。大掃除も自分の好きなときにやる。いっせいにやるということは考えられません。

青井 困りませんか、大掃除などはいっせいにやらないと。

ドーア 大きなゴミを出して、特別にトラックを配置してもらって、という便宜のこと？

青井 ええ。

ドーア 困りませんね。かえってみんな少しずつ出したほうが運んでもらいやすい(笑声)。

コミュニティという
言葉はイギリスでは
——「生活共同体」
と「社会」

並木 ホームとコミュニティというようなことを、私たち問題にするのは、そもそも「コミュニティ」という言葉にあてはまる言葉が、日本にな
いからですけれども、かりにドーアさんが日本語
に翻訳されると、どういう言葉に翻訳されますか。

ドーア まあ、私が英語で「コミュニティ」という言葉を使えば、それは「アソシエーション」と対照的な用語として使います。つまり、両方とも一つの組織なんですけれども、アソシエーションというのは、目的がかなりはっきりしていて、その目的を達したい人がそのためにそれに参加している。また参加するかしないかは、だいたいその人の自由意思によっている。ところがコミュニティというものは、人が生まれながらに、いやおうなしに所属している集団として、日本で普通、共同体と訳しているゲマインシャフトというような場合です。いまのアソシエーションと対比する

用語は、どっちかといえば社会学者の用語ですけれども、社会学者以外のインテリ一般も使っていると思います。しかし、もう一つの使い方として「ザ・コミュニティ」というのはただ社会ということです。社会か国家か……。たとえば勲章をもらおうでしょう。「フォー・サービス・トゥ・ザ・コミュニティ」、だから社会……。

青井 「社会に貢献したかどにより」ということですね。

旅の恥はかきすて

——パリの英国人

並木 日本で、家庭と「ザ・コミュニティ」つまり「社会」との関係でよく問題になるのは、村の中では非常に行儀がよく、規則を守る日本人

が、いったん社会へ出た場合には、どうも行儀がよくない、つまり、旅の恥はかき捨てということがある。イギリスでも、“パリの英国人”ということわざもあるようですけれども、どうも日本の場合は、そういう点がいくらか極端じゃないかという観察もある。そういったことは、ドーアさんがごらんになって、やはり日本の特徴というふうにお考えになるのかどうか、かりにそういった点があれば、なにが原因でそうなるか。これは、そもそも家庭のあり方自体にも原因があると思いますが、個性が確立しておらないから、みんなの目の届くところから離れてしまうと、どうも悪いことをする、そういう感じももつわけなんです。

ドーア いまおっしゃった“パリの英国人”から考えますと、結局、旅の恥というような考えは、人間不変の心理である。これが一つ。しかし、なにが「旅」であるかということが違うということ。イギリス人は、パリへいかなければ「旅」でない。日本人は村から出ればすでに「旅」である。あるいは家から出れば、すでに「旅」である……。まあ、家から出ればということではないと思いますけれども。村から出ればということは、たしかにあるかもしれませんが。そしてそれは、さきほどいいましたように、村の拘束力が日本でははるかに強い。だから内輪と外というような観念を村においてもっている。イギリス人も家族のことについては、多少そういう観

念をもっています。そして次の境界線は、やっぱり国家です。

白石 日本の場合は個人→家族→コミュニティ、ところがイギリスの場合は、個人→家族というのと、個人→コミュニティという二つがある。その違いでしょうね。と同時に日本の場合は、家庭なりコミュニティの制約が、非常にやかましい。だからちょっとでもやかましいところからはずれば、自由を謳歌したい、そういうことなんじゃないでしょうかね。

日本には3種類のつ

きあいがある

ドーア 結局、人間が育つに従って、南洋の小さな島の小さな種族だったら、ただ一つの様式の

人間関係しかないかもしれません。つまりごく親

しい人とのつきあいです。ところがそういう南洋の小さな種族のそれよりも、もう少し複雑な社会になれば、少なくとも二つの様式があります。つまり、ごく親しい人とのつきあい、家族、そしてよそのそれほど親しくない人とのつきあいです。イギリスの場合は、だいたいその二つしかないんです。ごく親しい人——というのは家族のこと、それとそれ以外の者、しかしそれ以外というのは、英語をしゃべる人間という条件がついていて、英語をしゃべる人間でないと、人間の部には入らない(笑声)。外国は別として……。

日本はそうじゃなくて、3段階じゃないですか。つまり、ごく親しい人と、それほど親しくないけれども、赤の他人ではない村の人、それと外の人、そういう3段階の付き合いです。

並木 これまで、「コミュニティ」誌の座談会を

結婚で変わる女性 やりましたときに、こういう話がでてたんです。日

本人の付き合いというのは、非常に親しくなるか、

あるいは1年じゅうほとんどつきあわないか……。ほどほどの付き合いがないということです。おつきあいするとなれば、相手の家の台所のサラの数までわからなければ、承知ができないという付き合い方と、それから会わないとなれば1年でも会わないというふうに、分れてしまう。ほどほど

にというつきあい方ができない。遠くの人には親しく、身近かな人にはわりにさっぱりと付き合う。という私たちが学校の教科書で教わった西欧的なつきあい関係が、日本にはたりないんだということが問題になったことがあるんです。いまのような点はどうなりますか。

ドーア それは村においても、そうだと思いますか。それともいまの話は、都会の人の話ですか。

並木 都会と農村に通じるのですけれども、つまり、こういう場合にでたんです。たとえば女の人が結婚するとします。そのとたんに、女学校時代の友達関係を断ちきるといえば極端ですけれども、いちおうそっとしておいて、家庭の中へすっかりはいってしまう。そして同窓会をやるにしても、家の都合だとかだんなさまの都合で、ということになる。ところがイギリスあるいはスウェーデンの家庭にはいつてみていた限りでは、奥さんの友達、ご主人の友達というのがちゃんと分れていて、共通の友達にももちろんなりますけれども、別々に分れていることがなんらふしぎじゃない。そういうつきあいがある。どうも日本の場合は、結婚に対する期待がある意味じゃ大きすぎるためか、結婚すると、ほかのものはみんな抜けてしまう。

ドーア それは女に限っての話でしょう。女の地位が違うのじゃないかと思うのです。

白石 家庭内におけるね。それも大きな要素でしょうね。

ドーア そういう点ではそうだと思います。結婚しても、男のつきあいはそれほど変わるんじゃないでしょう？

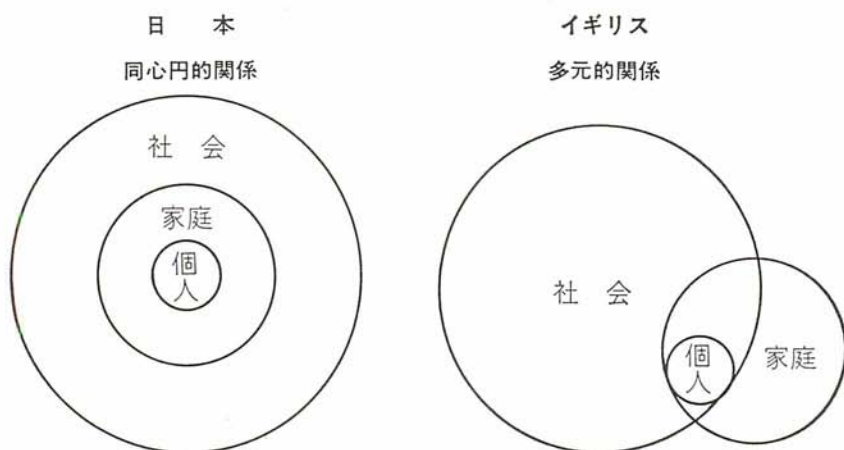
並木 なるほど男はね。女は変わる。

青井 女は名前も変わりますけれども、つきあいもそれと同時にガラリと変わっちゃう。

ドーア 男はむこ養子でない限り、そう変わらない。

同心円的關係と多元
的關係

青井 いまドーアさんのいわれたことですね、
日本とイギリスのコミュニティに対する考え方が
いちばん違うのは、日本においては個人と家とコ
ミュニティが、図に描けば同心円的になる。



ところがイギリスにおいては、家庭とコミュニティとがくい違っていて、そのまんなかに個人が存在して両方がダブっている。マルチプル・メンバーというか、そういう感じが非常に強いというふうに、要約していいでしょうね。

並木 個人が二つの人格をもっていて、一方の人格では家庭と関係しており、一方の人格ではコミュニティと関係している。だからどちらを選ぶかという場合には、個人の判断で社会を選んでみたり、コミュニティを選んでみたり、家庭を選んでみたりできる。日本の場合は、それができない

……。

ドーア いや、伝統的な社会においては……。しかし、いまの都会はよほど違います。

青井 だから、ある意味においてイギリスのコミュニティというのは、日本流に言えば、アソシエーション的な性格を非常に強くもっている。運命的なものではない。

ドーア もしイギリスがきらいだったら、よその国へ行って帰化してもいい。なにも運命的に英国人であるということはない。それは極端ですけども……。

宮坂 町内会にもどるんですけれども、さきほど、人口6万の町だとおっしゃった。その場合のコミュニティというのは、どこまで……。人口6万の町全体をさしていच्छるんですか。

ドーア それは一つの政治的単位ですね。そしてそこに住んでいる人たちは、その一員であるという意識をもっている。ですから地方選挙のときは、投票しないのもいるけれども、いちおう投票して、その町の行政について関心をもっている。ゴミをよくとってくれないとか、そういう苦情をそこにもっていくんです。ほかにどのような団体に所属するかというと、宗教団体あるいは娯楽団体、それからもちろん職業団体ですね。それはおのおの、いまの図のようにマルチプル・メンバーシップによっていて、べつに、一つの地域にもとづいてつくられた団体というのはない。

しかし宗教団体をとってみると、一つの教会のメンバーは、そう広い地域にばらまかれているわけじゃない。そしてそれは教会によって違うんです。つまり聖公会というのはイギリスの国教ですね。それがいちばん多い。それで農村だったら、一つの村の人たちはほとんど、その村の教会の一員であるという形もあったんです。だから都会においても、まだ教会区の制度があって聖公会の教会に属する人たちは、かなりはっきりした区域のものである。ところが少数派の、たとえばメソジストとかバプテストと

か、そういうものは数が少ないし、もっと広い地域にばらまかれている。

ですから宗教団体によっても、区域の関係が違ってくる。もちろん職業団体だったら、一つの事務所に勤める人は、その6万の都会のほうぼうからくるし外からもくる。また娯楽あるいはその他の、たとえばボーイスカウトというような組織も、ある程度まで区域が限定されてきますけれども、それはかならずしも教会区と同じ区域でもない。ですから地理的に規定できるような区域の一員であるという意識はないですね。

Ⅱ 家族の人間関係

並木 話題を移しましょう。家庭の中の人間関係といいますか、家族関係について、日本とイギリスを比較して、どういった点が違っているか、どこに特徴があるかということを、お話しただけたらと思うんですけども……。

ドーア それは主として、外の社会との関係ですか。

並木 ええ、その関係を頭にいられていただければ、いちばんいいんですけども、その点はいまいくらかできましたから、親と子の関係、親夫婦と子夫婦との関係、夫と妻の関係、そのもの自体として、お話しただいて結構だと思うんです。そのなかから、外との関係のあるものはあとでまた考えてみたいと思いますが……。

イギリスの夫婦と子供の小家族

ドーア だいたい家庭を考える原型というんですか、イギリスでは相当昔から小家族、つまり夫婦とその子どもが、典型的な家庭というふうに考えられていますね。したがって家庭というものは、1人の人が結婚してつくるものであって、そして子どもが大きくなってよそへ出ていく。したがって員数が減って行って、しまいに家庭をつくった2人が死んでいくことによって、その家庭はなくなる。それがイギリス人が家庭を考える場合の原型となっています。ですからおじいさん、おばあさんは、別の家庭の一員であるという考え方ですね。いっしょに住むことももちろんありますけ

れども、それは夫婦がまだ若いときに、別な家庭をもつだけの経済力がなくて、いやおうなしにいっしょに住むという形と、また親の一人がなくなって、あるいは両方とも働けなくなって、親の扶養という意味でそれを子どもの家庭に引入れるという形が、三代家族という場合には、いちばん多い。そういうのが日本では、数は少なくとも原型として考えられていて、そして小家族というものが都会的な新しい現象としてみられているのと、対照的です。イギリスでは小家族が原型であって、他のものは例外的であるという考え方があると思います。

そこから、いろいろ家庭内の人間関係が変わってくると思う。一つは、嫁しゅうとめの問題だが、嫁としゅうとめのいざこざが夫婦間のいざこざを引きおこすとか夫婦間の親密さの障害となる度合は、非常に少ない。また子供の教育についても、働いて金をとってくるのは男であって、家庭をみるのは女であるというような違いは、もちろんその夫婦の関係を規定する大きな要素ではありますが、いちおう夫婦ともに同等な権利をもっているという考え方が、一般的じゃないかと思う。そして実際子どものしつけを母のほうがよけいやるのは、いつも家庭にいるためであって、べつにそうであるべきだからそうなるのだという考え方は、あまりない。そういう意味で、たしかに相違点があると思います。

しかし具体的に、いま日本の都会に成立している小家族の形は、イギリスの小家族の形と、それほど違わないと思います。条件が非常に似たようなものになってきている。依然として都会の小家族でも、奥さんが夫に対して相当にサービスしなければならない。おふろから出たときに、ゆかたがちゃんとそろっている（笑声）というような観念も、かなり強いだろうと思いますし、またイギリスでもゆかたに匹敵するスリッパが、冬の晩帰ってきたときにちゃんと暖めてあるとかいうことが、いい奥さんとされている。しかしそれは、たまたま夫が外へ出て働いて疲れて帰ってくるんだから、一日じゅう家にいる妻がそのぐらいのことをしてもいい。ところが

夜になったら、家庭の仕事がある場合には、夫も当然手伝うべきものだという考え方ももっています。

家庭生活と個室の役割

並木 いまのようなお話は、教育の問題と関連しますが、たとえば部屋のつくり方が、日本の場合ですと、長屋式で個室がない。ところがヨーロ

ッパの場合は個室が一つずつあって、個室がある場合には、個室へはいつでも悪いことをしないというしつけがある。——私たちの周辺で、このごろ、ヨーロッパ・タイプの家をつくる人がだんだんふえてきているが、小さいときからの子どもの育て方にまだ昔の伝統があって、親が注意するにしてもかならずしも子どもが独立するような形ではなく、ある場合には、少し面倒みすぎのような注意をしている。ところが、小学校から中学校へいくころになって個室を与える。そうすると、部屋を与えられたとたんに子どもはさつきの「旅」に出ることになってしまう(笑声)。

そういう意味で、ヨーロッパの家庭が、個室を中心に家構えができていくことと結びついて、子どもと親の関係、あるいは親が子どもを育てていく場合に、どういう配慮をしているか、そういった点で、日本の家庭と違うような点がないかどうか、このへんはいかがでしょうか。

ドーア いまのお話のヨーロッパというのは、あくまでも中流階級以上のヨーロッパです。一般のイギリスの労働階級の人では、個室といっても寝室はひとりひとりがもっているのではなく、夫婦は自分の寝室をもっている。そして子どもは子どもだけの寝室、あるいは男の子の寝室、女の子の寝室というふうに、子どもが2~3人ぐらいいれば、寝室は三ついるというのが、労働階級では普通の常識です。しかしそれはあくまで寝室であって寝るとき以外にそこにはいって、自分の領域とするということは、労働階級ではまあ考えられないというか、第一、場所がない。またイギリスは、だいたい9月から4月、場合によって5月まで、暖房がいるでしょう。暖房がたけるのは1部屋がせいぜいのところです。最近までは……。僕が子

どものときはそうだったです。よっぽど急な勉強がある場合でなければ、
寝室に電気コンロを入れて1人で勉強するということではできなかった。

ですから、自分の居間ともなるような個別の部屋をもつのは、中流階級
以上です。そしてそういう家庭ですと、いまはそうじゃないですけども
20年、30年ぐらい前だったら、だいたい子どもをみる乳母、ナースという
のがいて、親だけが子どもを育てるんじゃない。そういう雇われた人が子
どものしつけをするような家庭では、どうしても雇われた人が子どもより
一つ身分が下でしょう。ですから子どもは小さいときから、自分はかなり
えらいものだという意識をもたせられる。自分がかかなりえらいものだとい
う意識をもっている人にこそ、責任感が育ちやすいと思うのです。したが
って、そういうしつけをみる人がいなくなった八つ、九つ、十ぐらいのとき
に、もう大丈夫だというふうに、親はみていられる。そういうことがい
えると思います。

ですからそういう点で、部屋の間取りからくるような人格形成の相違は
イギリスの労働階級と日本の労働階級、農民階級の間に、あまり大きな相
違はなく、むしろイギリスの中流以上の階級と、日本の中流以上の階級
との間に、相当な差がありうる。そしてたしかにいまおっしゃったように
部屋の間取りなどがものをいうだろうと思います。1人でいると、いま悪
いことをするとおっしゃったけれども、とにかく1人でいること自体が、
さみしいことだという考えをもっているでしょう。第一、1人でいること
をいう言葉がなかったからこそ、英語からプライバシーという言葉をおざ
わろ流入しなければならなかったんですね(笑声)。

並木 日本では、「小人閑居して不善をなす」といいますが……。

白石 あれはシナだ(笑声)。

青井 みんな輸入ですわ。

イギリスの農村の家 白石 ただ、さきほど、ティビカルな家族構成
族関係 というのは夫婦と子どもだけ、それで子どもが大

きくなれば出ていくというふうにおっしゃった。これは都会のような場合にはありうると思うんですが、イギリスの農村の場合、農地をそう細分するわけにもいかないでしょうし、結局、一つの家に住むことになると思うのですけれども、それが個人的に分れて住めるような形でやっていたのかそれとも同じ家の中で、たとえば経済を分けてしまうというようなことでやっていたのか、その点はどうなのでしょう。

ドーア 日本と同じような形では、ほとんど問題は起こらない。少なくとも最近では……。ということは、イギリスでは小農というか、家族農家というのは非常に少ない。農業人口の大部分はまだ農業労働者です。農業労働者のほうが、農業主よりも急速に減ってきますけれども農業労働者は都会の労働者と変わらない。一人前になって結婚するようになれば、やっぱり家庭をもつぐらいの賃金をもらう。そしてべつに家で仕事をするんじゃないから、よそへ住んでもいい。農場主の場合も、ずっと前から農業が資本主義化されており、またイギリスでは小作料が安いから農場主の息子が農業をやりたいという場合には、20歳前後になって結婚するときに、親が少し援助してどこかに農場を借りさせる、あるいは買ってやる。そして息子は、長男でも三男でも、よそへ行って農業をやる。小作農としてやって少しずつ貯めていって、自分の農場を買おう、おやじが死んでしまえば、おやじの農場がいい農場だったら、1人の息子が帰ってくるかもしれない。そうでなくていまいるところに満足していれば、親の農場は売ってしまつて、その財産を分ける。

白石 いまの話ですと、イギリスの場合は農業人口も少ないし、相対的な社会に対する影響からいうと、日本の農村とはだいぶ意味が違ふ……。

ドーア ええ、そうです。またそれがかなり前からの話であつて、18世紀の終りごろまでに、もちろん農業人口の割合もいまよりはるかに多かったのですけれども……。

並木 そのころでも、3割ぐらいでした。

ドーア その3割も、資本主義化されたものですから……。

「親と子はスープの
さめない距離に住む」
母と娘の場合

並木 もう一つ、よく私たちが聞くことわざ
があるんです。二夫婦の場合だろうという気が
するんですが、親と子はスープのさめない距離
に住むのがいちばんいいんだということわざ

が、これはイギリスかどこか知りませんが、あるということを知
ります。そういうことわざがありますか。

ドーア 英語では聞いたことないですけどね、考えられることです。そ
してその親と子というのは、母と娘でしょう。父と息子じゃない……。そ
れは結局、家族のなかで、とくに賃労働者の家族のなかで、いちばん強い
愛情が生まれるのは母と娘です。この間、青井さんがやった調査でもそう
でしょう。父、母、息子、娘の四つの組み合わせをとれば、いちばん打明け
話がしやすいのは母と娘ですね。それはどうしても自然的にでてくると思
うんです。つまり、息子も娘もいちばんよく面倒みてもらって、いちばん
愛情がわきやすいのは母です。そして母と息子と、母と娘を比べた場合に
は、息子はとにかく男として一人前になるためには、母と同じようなもの
であってはいけません。だから母に対抗して自己を確立しなければならない
わけです、どの社会においても。娘はそうじゃなく、母と同じような人間
になろうとするのはあたりまえであって、母をある意味では見習ってい
く。ですから自然の生物学的条件からして、母と娘との親密さが、もっと
も強い人間関係になりやすいのだと思います。それで結婚すれば、娘はな
るべく母から遠くないところへ住みたい。

並木 ということは、もっと極端にいいますと、近ければ近いほどいい
という意味でしょうか、スープがさめないという意味は。

ドーア そうでしょうね。おそらく忙しいときに自分で料理しなくても
母に料理してもらう……。

並木 同じ家庭には住まないという前提のもとで、スープのさめない距

離に住む、そういうふうを考えてよろしいでしょうね。

ドーア そう、そう。

母と娘の同居では娘
の負担が多い

青井 ただし、ときには同居しなければならない場合がありますね。そのときは通常、娘のところへ親が同居する。日本の例ですと、昔はだいたいの男のほうの親を引取る。そうすると、嫁としゅうとめの問題がでてくる。ところが最近では、東京都のなかでも、数から申しますと男系統の親と住むのが多いんですけれども、お嫁さんの親と同居するのが、ぼつぼつふえてきた。しかし話に聞きますと、それは心理的には非常にいいんですけども、娘は非常に重荷になる。両方の板ばさみになっちゃって……。同居しなければならないような場合、そういうことはありませんか。

ドーア それはあるでしょう。それを負担に思えば、親のほうから離れてしまうでしょう。娘がそれを負担に思って、いやおうなしにやっているんだと気づいたら、あまり居心地はよくない。ですからそれよりいっそのこと、老人はいきましようという気持ちが出てくる。

女は年をとると人相
が悪くなる

並木 もう一つ、どうもこれは学問的な話じゃなくて恐縮なんですけれども、日本には“鬼ばばあ”という言葉がある。“鬼じい”という言葉は普通ない。年寄りになったときに人相が悪くなるのは、どうも、女性のほうじゃないかという説があるわけです。現在でも、事実かどうかわかりませんが、日本の場合には若干の説得力をもっているわけです。英国において、こういったようなことが、いったい考えられるかどうか、いかがでしょうか。

白石 だいたいウィッチ (witch) というのは女でしょう。

並木 やはり英国でもあったんですか。

僕のいまのは言葉づかいがまずかったんですが、年寄りになったときには、女のほうがどうも人相が悪くなるんじゃないかというようなことがあ

るんですが、どうでしょうか。

ドーア いえ、考えられないことはないですけどもね。それはつまり女のほうが自分の親を引入れるでしょう。そして女のほうが寿命が長い。男親よりも女親のほうが多い。統計的に……。それをむこが非常に不満に思うということは、よくあります。だからしゅうとめというのは、やっぱりイギリスでもいろいろ冗談のまとなるんです。しかしそれは嫁の立場からでなくて、男の立場からですね。

青井 ところが、こういう話を聞いたんです。僕たちも、どうも年をとると女性のほうが人相悪くなるように思うんですけども、女性の側からは逆をいうんです(笑声)。たとえば養老院へいってみますと、女の部屋はそれなりに共同動作をする。男の部屋へいくとみんな壁のほうを向いて、ひとりひとりブスツとして、なんにもしない(笑声)。これはいったい、どういうことなんだろうかという話がでたんですがね。

ドーア おそらく家庭内の話だったら、男のほうはサービスしてもらうのが当然でしょう。またたしかにサービスしてもらえるんです。女のほうは、年をとると、なんにも自分でできなくてサービスしてもらうよりしかたがない。ところがみんなそういう権利があるように思っていないから、自分のエクスペクテーションと実際与えられたものとの間にギャップがあって、気がくしゃくしゃして鬼ばばあになってしまう(笑声)ということは考えられますね。

白石 それに以前、村岡花子さんがおっしゃってましたけれども、女というのは、男に比べて世間が狭い。いろんな楽しみの数がないわけですね。それでいまおっしゃったように孤独になる。男ならひとりになっても、それこそ80になっても、ゴルフでもやるかということになるんですが、女の場合は、ただうちにじっとして、せいぜいおまんじゅう食べるぐらいしか楽しみがない(笑声)。そういうのが顔にでてくるんでしょうね。

ドーア そしてまた、いま日本では平均寿命の違いが5年でしょう。だ

から年をとるにつれて、鬼ばばと鬼じいになる率は、統計的には鬼ばばのほうが多い(笑声)。

Ⅲ 教 育

並木 次に教育の問題に移りましょう。イギリスの制度的な意味での教育について簡単にお話したいだと思います。それから教育ということ考えた場合に、学校と家庭がどういう分担をしているかということ、これはこの「コミュニティ」の座談会のときにもでたことです。日本人でイギリスに滞在していたある家庭のおやじさんが、子どもがいうことを聞かなくなったので「先生、しかってください」といったら、「いや、それはおまえの仕事だ」といわれて、ずいぶん違っていると感じたという話があったんです。さらに子どもをしつけていく場合に、ほかの人の協力といえますか、他人の子どもに対して、日本人の場合には注意したりなにかしますと、おせっかいとか、でしゃばるという感じで受けとられる場合もある。こういった問題をいろいろお話したいです。

ドーア まず第一の教育制度は、かなり複雑な

イギリスの教育制度 んです。そして日本でよく紹介されているイギリスの教育というのは、上流階級の私立学校の教育が多い。「自由と規律」という、池田潔さんの有名な文庫本がありましたね。それは主として寄宿制の学校ですが、そういう学校へいくのは、国民の子どもの4～5%ですね。それは非常にお金のかかる教育であって、なんらかの形のスカラシップ（奨学金制度）が少ないから、そういう学校は圧倒的に上流階級の学校です。また上流階級の子どもはその他の学校には

いないといっても、あまり大きなまちがいでない。

並木 いまのは、6歳になったときからと考えてよろしいですか。

ドーア だいたいそういう上流階級の子供の教育体系では、ナースリー・スクール(幼児保育園)みたいなものが七つ、八つぐらいのところまであって、それから八つぐらいのときから、寄宿制のブレバトリー・スクール(予備校)というのがある13歳のときからパブリック・スクール(これは同じ私立なんです)。そこには18歳ぐらいまでいって、大学に行く。

それと別の公立学校の制度は、5歳からはいって6年間の小学校があるんです。それは場合によっては、能力編成別のクラスをしますけれども、私立学校へいかないものはいちおう全部、その地域のもよりの小学校へいく。11歳のとき能力テスト、それは知能テストが主ですが、そのほかにも学力テストがあって、また先生の認定という三つの要素を組合わせて、そのあと、どの学校へはいるかを決める。そしてだいたい11歳からの学校には三種類あります。グラマー・スクールというのは、国民の2割5分から3割ぐらいがいく学校で、いちばんよくできる子どものいくところです。そこでは多少学問的な教育をやって、たとえば外国語とか、数学もかなり高度の数学をやる。そしてその他の子どもは、いま5~10%だと思いますけれども、専門的なテクニカル・スクールへいき、あとの65~70%ぐらいが、セカンダリー・モダン・スクールにはいる。そのセカンダリー・モダン・スクールは、15歳までの普通教育です。

並木 日本の中学にあたりますか。

ドーア はい。しかしこれは、戦前の日本の中学校と高等小学校の違いとみれば、あまり大きなまちがいはないと思います。

青井 グラマー・スクールのほうは……。

ドーア 昔の中学校。セカンダリー・モダン・スクールのほうは昔の高等小学校。しかし4年間で15歳までです。そこでは、フランス語を教える学校もありますけれども、それは全部の子どもに教えるわけじゃないし、

たいした程度に達しません。そしてセカンダリー・モダン・スクールから大学へ進学することは、まず不可能です。相当な独学をしなければ……。そしてその制度には、非常に不満が多いんです。結局、子どもの格付けが公にされるでしょう。

並木 11歳のときに決めるわけですね。

ドーア イレブンス・プラス・エグザミネーション。満11歳以上になってからやる試験。ですからグラマー・スクールには入れない子どもの親は非常に不満をもつ。相当な劣等感をもつ。それが非常に悪い制度だという考え方が高まってきました。しかし、この制度のいい点は、グラマー・スクールはいちおう頭の切れる子どもばかりはいっていますから、かなりいい教育を受けます。ですから知的な水準もかなり高い。戦後の日本のようにみんなが一つの学校で勉強するような学校になってしまえば、どうしてもグラマー・スクールの知的ふんいきが下がってくる。それは明らかです。

そこで、その中ぐらいをとる方針としていま考えているのは、コンプリヘンシブ・スクールです。これはその性質上、かなり大きな学校になるわけで、1,000人ぐらいの児童を入れる。そしてその中をはっきりと二つの種類に分けないで、いろいろの選択課目の組合わせによって頭のいい子どもはもっと充実した教育が受けられる。頭の鈍い子どもは無理のないところでおさまる。しかし学校という一つの社会集団の一員としては、同じ資格であって、クラブ活動も、スポーツも、自治会もみんな同等にいっしょにやる。そういう学校を進めることが、いまの労働党政府の方針なんですけれども、グラマー・スクールから、相当猛烈な反対が起こっていますね。それはグラマー・スクール自体、それからそこにはいっている子どもの親です。せっかくの自分の子どもは上に格付けされたのに、格づけの制度がなくなるのは不賛成だ……(笑声)。

並木 これは日本と同じです。

ドーア　そして大学となりますと、進学需要と供給がいままではかなりバランスがあったんです。第一、大学には入れるぐらいの資格をもっているのは、私立学校を出たものと、グラマー・スクールを出た25%……。

並木　合わせて30%ですね。

ドーア　合わせて30%じゃないです。グラマー・スクールにはいる25%は、普通課程は16歳までです。義務教育をやるのが1年で……。そこで卒業試験を受けていちおう終わる。僕がグラマー・スクールにいたときにはそこで8割までやめたんです。そしてグラマー・スクールの高等科というのがあって、あと2年続けて勉強すれば大学進学の資格を得る。

並木　そうすると、合わせて7%ぐらいのものですか。

ドーア　そのときはそうだったんですけども、いまはグラマー・スクールの高等科に残るのが、半分ぐらいになっていると思います。ですからそういう資格をもっているのは、いま15%あるわけです。しかし実際そこでやめて就職するのは、かなりいます。大学へいこうとするのは、8~9%ぐらいですか……。

パブリック・スクールなりグラマー・スクール高等科なりの卒業試験で一定の点数以上をとれば、それでだいたい大学入学資格ができるんですが大学は最低の資格を勝手に決める。大学によって、まちまちなのです。そして非常に格が上の大学は、高くつくるわけです。しかし、一定の水準に達した人は、どこへ申請してもいい。その大学がとるかとらないか、セレクションのしかたはまちまちです。しかし、試験でやっているのは、いままぜんぜんないといっていいです。だいたい文書でいちおう予選をして、そして入学できる。いままでは申請すればどっかの大学へはいれます。とくに人気のある学部でなければ……。自分の望む学部以外でもよかったら、とにかくはいれる。それではいれたら、地方政府から大学へ入学したというだけで育英資金が出るんです。その育英資金は、親の所得によるものであって、親の所得が一定の水準以下だったら、学費も生活費も全部まか

なえるぐらいの育英資金が出る。制度としては、だいたいそんなものです。

ドーア 次の問題の、教育、しつけという場合の宗教教育の役割 校と家庭の分担ですが、これは日本とかなり違うと思う。そして違ってくる原因はやはり宗教伝統にあると思います。日本で宗教が道徳と関係ないという、もちろんいいすぎなんですけれども、社会における道徳観念の体系化、普及を専門としている機関としての教会は、日本の社会に存在していないと思う。神道関係の人々は、ぜんぜんといっていいほど、その機能をはたしていませんし、仏教も主として先祖に対する儀礼に集中して、たとえば、西日本のように真宗が強い村で、お坊さんがよくお説教するというようなところでは違いますが、そういうところ以外では、江戸時代から宗教関係の団体はあまり教育にたずさわっていません。そして江戸時代において、道徳観念を体系化し普及する仕事を担ったのはどういうものかという、主として儒者です。儒者は教育者ですね。さむらいの学校の先生だった。

イギリスでは 100 年ぐらい前までは、人口の大部分がよく教会にいったんです。いまはそうでもないですけども、昔はそうだった。そして教会というものは毎週いくところであって、1 時間か 1 時間半ぐらいいてるうちに、讃美歌をうたったり聖書を聞いたりする時間が 3 分の 2 ぐらいあとの 3 分の 1 ぐらいは、道徳的なお説教を聞いているわけです。そういう意味で教会の役割は大きく、したがって学校はそれをしなくてやる必要はなかったと思います。

ドーア 日本でもイギリスでも、昔もいまも若い世代に道徳観念を植えつけていくものとしてもっとも大きな役割をはたすのは、家庭だと思っています。教会でも学校でもない。しかし家庭の中で伝わっていく道徳観念というものは、あまり体系化されていません。一般の

社会にある道德観念を体系化し、いちおう理屈をつけて、それを意識的に普及する機関の役割は、家庭ほど大きくはなくても、やっぱり重要ですね。その機関は、日本においては学校であったと思います。ですから明治には教育勅語において、国民の道德の基本を制定しておくというのが、文部省の仕事だった。そして現在でも審議会をつくって、「期待される人間像」をつくるというのが、文部省の仕事です。そういうことをすることはイギリスの文部省ではちょっと考えられない。ですから家庭に任されています。そしていまは教会の役割が非常に軽くなりまして、教会に定期的に行く人は、人口の1割5分ぐらい、教会のかわりになっているものは、マス・コミの諸機関だということがいえると思うんです。しかし、とにかく学校は非常に消極的です。

小学校の成立した事情が異なる

ドーア もう一つ伝統と関係することは、日本の学校は、現在の学校制度を明治時代に国家がつくったんでしょう。しかしイギリスでは、小学校のそもそもの始まりは19世紀の前半でした。教会の別働隊である事業団体が、宗教観念を植えつける手段として、学校をつくった。ですから学校が財政的にも教会に相当恩恵をこうむっている形になっていた。それが今世紀のはじめごろになりますと、財政的に不可能になったし、国家もそこでやっている教育に対して、かなり不満をもっていたものですから、だんだんと教会の統制力が弱まって、国家の介入が強くなったんです。そしていまは、ほとんど国家の財政でまかなっていますけれども、なかにはまだ教会が経営している小学校もある。とくに農村においてかなりあってそこでは道德教育ではなくて、その宗派の宗教教育をやります。それ以外のところでは、いまいったような経過がありましたから、国家の経営に移ったときの一つの条件として、国家の学校においても、ある程度までの宗教教育を与えるということになりました。

並木 それは何年ごろでしょうか。

ドーア もっとも大きな意味をもった法案は1902年ですが、国家が大いに介入しはじめたのは1870年です。しかしそれは国家の学校であって、いちおう国民がキリスト教の信者であることを前提にしてもいいんだけど、それは聖公会であろうが、メソジストであろうが、バプテストであろうが、国立学校で教える宗教教育というものは、どの宗派にもあたりさわりのないようにやるわけです。そういう性質のもので、聖書の歴史的なところを教えるとか、事実としての聖書が中心です。宗教というものがあっても、べつに道徳を問題とするような教育じゃないんです。あくまで子どもの人格をつくることは、家庭の仕事であって、学校は知識の領分で働いているという感じが強い。ですから「しかってください」といって、「それはおまえの仕事だ」といわれたのは、当然だと思います。

そこでちょっと違うのは、私立学校のほうです。それは寄宿制ですから寄宿制である以上、親がいなくてしょう。ハウス・マスター、つまり寮の舎監と舎監夫人が大きな役割をはたす。またそこでスポーツを中心的にやるということも、スポーツ自体が目的よりも、人格の鍛練というのが目的であるわけです。

並木 いまのお話で、だいたい学校と家庭の分担という点がよくわかったんですが、さて家庭で

家庭教育のよりどころは何か？

子どもを教育するということを分担いたしますときに、それまでは、教会の力を相当借りていたわけですが、ところがこのごろは、教会へいく人が1割5分ということですから、その際の家庭教育はどういう考え方、むずかしくいえば指導原理で教えておるのか、もう一つは、家庭教育をやる場合に、近所の子どもに対して、どういう態度をとるか、イギリスの場合は、よその子どもに対しても、いけないことはいけないと、かなり注意をするという話を聞いているんですけども、そのへんの点を少しお話ししたいと思います。

ドーア 指導原理というものをもっているかな……(笑声)

並木 現実はどうなっているのでしょうか。どういう子どもの育て方あるいはしかり方をしているか……。

ドーア そのときの気持ちによって、違うのが多いと思いますがね。しかし、日本と多少違うといえることは、日本では、子どもだからわからない、子どもだからあまり期待できないというようなことは、かなり大きくなるまで、子どもの弁解をする根拠になると思うんです。ところがイギリスでは、もう少し早くから、実際はそうでもないんですけども、おとななみの基準で行動を判断しているかに見せるように、親がします。つまり子どもに、おとなと同じ道徳基準で行動すべきだというふうに、とにかく要求するんです。たとえばお客さんがきたときに、子どもに、おとなと同様にふるまうことを要求する。あるいは子どもがそれぐらいに達していなかったら、別の部屋に入れてしまう。しかし八つ、九つ、十ぐらいになってお客さんの前に出す場合は、いちおう行儀をおとなっぽくするように要求する。

つきあいのしかたが
形式として体系化さ
れている

ドーア しつけのしかたで、一つ違うといえることは、世のしきたりを固定したものとして意識している度合いは、日本のほうがはるかに強いということです。それに気づいたのは、日本に最初

にきたとき、下町を調査していて、ある田舎からきた若い者に、「近所の人はどうか」と聞いたら、「とても親切だ、すぐこのへんのつきあいを教えてくれた」というんです。どういうときにどういうふうに、だれに対してどういう文句で応待して、どういうものを持っていくかということが、ちゃんと既成知識として体系化されていて、それが一つ一つ教えられるという考え方ですね。つまり、人間関係のいろんな面が、そういうふうに形式化されている。それがイギリス人としての僕には意外であったんです。というのは、近所のつきあいというのは、あくまで個人の判断、個人のスピリチュアリティ（自発的）な意識からでるものであって、なにも教わって

獲得できるようなものじゃない。

そうすると、結局、子どもに教える場合に、日本では、ああするものだよ、こうするものだよ、というような教え方が多いと思うんです。ところがイギリスの場合は、それをうまく判断できる人間をつくらなければならないと考える。ですから、ああいうふうにすればこういう結果になるんだから、こういうのはまずいんだというような親の説明がでてくる場合が多いと思うんです。

白石 説得してからやらせる。

ドーア ええ、つまり、行動を選択する一般的な基準を厳格に教え、それを考えさせるというようなしつけ方——これも程度の問題ですよ。それがイギリスと日本の違いかもしれません。

日本人が他人の子供
並木 ほかの子どもに対するしかり方は、どう
でしょうか。

に注意しないのは

ドーア よその子どもが人に迷惑をかけるようなことをやっているときには、赤の他人の人でも、あるいは近所のちょっと知っている人でも、しかってやることは、日本より多いと思う。日本でそうならないのは気がねも、多少はいるだろうと思いますし、また一つには、その個人とその子どもの問題じゃなくて、家と家の問題という意識と内輪のものと外のものという意識が強くあることと、関係するんじゃないかと思う。

白石 たとえば子どもが、公園あたりにきれいに咲いている花をとる。それを僕なら僕が、その子どもが一人だけにいるときなら、「きみ、そんなことしちゃいけないよ。みんなで楽しむんだからね」てなことをいうわけです。ところが、その親がついていると、ちょっと抵抗を感じますし、いえない。親がニコニコして見ているというようなときは、どうですかね（笑声）。

ドーア それはイギリス人だって、なにもいわない人が多いと思います

よ。しかし、なかには多少おせっかいな人がいて、親に抗議を申込む。

並木 親に申込みますか。

青井 それが日本には少ないですね。

ドーア 明らかに親子である場合には……。『子どもにそんなことさせてもいいのか』というようなことで、けんかをふっかける人います（笑声）。それは率として、イギリスに多いでしょう。日本人のほうが少ないんじゃないかと思います。しかし、それは統計をとってみなければ……（笑声）。

ドーア 統計数理研究所の国民性の研究をして

紙くずを捨てる頻度 いた人が、日本人は公衆道徳がないというがはたしてほんとうかどうか、ヨーロッパを旅行した彼が、紙くずを捨てるのが一つの標準だと思って、ローマ、パリ、ロンドンの同じような繁華街を選んで、そこへストップウォッチを持って立って、人が紙くずを捨てる頻度を計った。そして日本へ帰って同じ統計をとって、はたして日本人が悪いのかどうか、たしかめたいといっていた……。自分はそうじゃないだろうと思いますけれども、結果はまだ見てない。

公衆道徳は学校へま 青井 僕たちが前に調査したことがあるんです
かす日本 がね。とにかく日本の親にしつけのことを尋ねますと、学校と家庭内のしつけをビチッと分けてい

るんです。分担が違うんですよ。公衆道徳に関しましては学校だというのが、非常にはっきりでるんです。家庭では小さいときやってないから、とくに学校に対して、そういうものを教えてもらいたいというんでしょうけれども、意識としてもはっきり分けているんですね。家の外のことは学校、家の中のことは自分でやるんだ。

宮坂 僕のところは、男の子が小学校3年と1年ですがやっぱり学校の先生のいうことは、非常によく聞くんです。そういう感じがありますね、いまでも。ですからたとえば、たまに道徳教育でなくてテストの返ってき

たのに、先生がまちがってマルをつけてくることがあるんですよ。それを先生がまちがえたといっているいいものやら、悪いものやら……(笑声)。

白石 先生の権威の問題ですね。

宮坂 いちおういいですけどもね。そうすると、子どもがいやな顔するぐらい、先生は権威がありますね。そういうのは、どういうことになるんですか……。

白石 そうするとイギリスでは、道德教育は学校では行なわれないということですね。

ドーア 行なわないです。

イギリスの文部省の
役割

青井 文部省の任務というのは、簡単にいえば
どうのことですか。日本の文部省は、教育内容
にタッチして、教育の外的事項とか内的事項とか

を分けますけどもね。

ドーア イギリスでは文部省が、教育内容についてはあまり強く干渉しないです。もちろん視学官があるんです。それは文部省直轄の事務官でそれによって教育が一定水準まで達していることを目標にしていますけれども、具体的な教育内容は、地方政府の教育委員会で決めるんです。教科書の選定も……。ですから文部省の認定制度とか、そういうものはぜんぜんありません。

しかし、国家的に統一されているものとしては、卒業試験がある。それはいま大学から離れたんですけれども、もとは大学が組織してつくったような委員会によって、統一されています。ですからさきほどいいましたように、グラマー・スクールを出る人は、卒業試験を受けて、それで卒業資格ができる。その時期は全国的に一律じゃないですけども、五つか六つぐらいの団体があって、同じような程度の卒業試験を行なって、オックスフォードの試験を受けるとか、ロンドンの試験を受けるとか……。いちおうそれで統一されている。

青井 卒業試験でしょう？それをたとえばオックスフォードのほうから出して……。

ドーア もとは大学が深く関係していましたが、いまは大学の人はいっていますが、一つのボランティア・アソシエーションみたいに委員の大部分がグラマー・スクールの校長先生なんです。その組織が大学と相談して、教育の内容を決める。

青井 入学試験ではなくて、卒業試験が非常に問題であるし、できればその卒業試験はある程度のスタンダードのものにしたいということなんですね。

セカンダリー・スクール卒業生の学力程度
白石 そうすると、セカンダリー・モダン・スクールを卒業したものの学力といえますか、能力といえますか、それはいまの日本で考えてみた場合に、どのへんのところにあたりましょう。

ドーア それはあまりよくできない中学卒業生ぐらいのものでしょうか。だいたい日本の中学はイギリスだったらグラマー・スクールに行くことができるものと、セカンダリー・モダン・スクールに行くあまりよくできない子どもと、両方はいっているわけでしょう。ですから平均の水準が、イギリスのグラマー・スクールより落ちる。しかし、セカンダリー・モダン・スクールより上だ、だいたいそう考えていいと思います。

白石 そうすると、そこでおしまいになる人が、相当たくさんあるというわけですね。

ドーア はい。

青井 それからのちに、ある程度教育期間を延そうとする運動があるわけでしょう。

ドーア それはあります。自発的にもう1年間、16歳までとどまることができるようになっている学校が、圧倒的に多いです。そしてもう1年とどまっている人は、まだ半分まではいかないと思いますけれども、かなりふ

えています。

並木 日本ではこのごろ、“教育ママ”という言葉
イギリスに「教育マ
マ」は少ない
葉が非常にさかんなんです。これは自分の子ども

にめくらになっているといえますか、とにかく自分の子どもだけの教育に熱心で、教育一般に対しては、どうもあまり目が向かない。そういうママのことをいっているわけですけども、イギリスの場合、そういう点はいかがでしょうか。

ドーア あまり“教育ママ”は見あたりませんね。ということは、二つの大きな条件があります。一つはいまの日本のような、入学試験という激しい勉強による競争的な試験制度はありません。ですから問題となってくるのは、結局11歳のときで、その前の勉強ぶりに非常に気をつけてやっているところは、かなりあるでしょう。そしてそういうところは“教育ママ”がしやすい条件がそろっているんです。しかしそれはまだそういう段階だけであって、そこでは知能検査の比重が高いんです。知能検査は、勉強にぜんぜん関係しなくはないけれども、それほど関係しないんです。

並木 成績そのものとは関係しないから……。

ドーア そうです。自分の子どもが頭がよくないんだったらしょうがない、勉強しろ、勉強しろとしても、それはどうにもならないという考え方です。それからもう一つは、PTAという組織が、ほとんどないのです。このごろ少し多くなってきているが、だいたい学校と家庭との連絡はあまり密接じゃない。そして学校からいえば、父兄というのは文句をいいにくるもの……(笑声)。

並木 その文句の種類には、ある程度重点がありますか。

ドーア まあ、おれの子どもをぶったとかね(笑声)。僕がいった学校はだいたいそうだった。それは労働階級のところで、まだ義務教育に非常に対抗するような意識が多分にあるようなところです。まだアテンダント・オフィサーという欠席児童の家庭を回って事情を調べる専門の人が6万の

町に2人ぐらいいたんじゃないかな。ですから学校と家庭の間はむしろ対立的なのが、本来の姿である……。これは30年前の話で、もうだいぶ変わっていますね。

白石 日本の場合、試験というものがあるんで、母親が一生懸命しりをたたいて勉強させる。ところがイギリスでは、いまおっしゃった知能テストが、科学的に相当オーソライズされているんで、いちおう知能テストでこういう計数ができれば、親としてはいたしかたないと思って、あきらめてしまうというような状況なんでしょうか。

ドーア はい、そうです。

青井 日本では、知能テストの勉強までやりますからね。

宮坂 その知能試験はだれがやるのですか。

ドーア 地方政府です。

並木 もう一つ、日本でよくいわれることで、
学校差が大きな問題
にならない
というふうに聞いているわけですが、日本の年功序列、あるいは学歴による給与の差違、これが現在までのところかなりあったわけですね。大学ないしいい大学を出れば、いい会社へはいれる。その会社の中でどういう職務をやるかは別なんです。とにかくいい会社——いい学校——いい幼稚園というふうにつながっていったわけです。そういうことが、いったいイギリスの場合にはどうなっているのか、これはあとでおうかがいしたいと思った階層の問題とも結びつくと思うんですけども、このへんが、さっきの“教育ママ”が比較的発生しないということと関係しないかどうか……。

ドーア しますよ。結局11歳のときに、セカンダリー・モダン・スクールにはいるか、グラマー・スクールにはいるかによって、職業、したがって所得がだいぶ違ってきます。しかし、グラマー・スクールにはいったとすれば、どのグラマー・スクールにはいるかということは、それほどもの

をいいません。そしてこんど、もう一つ上の段階の大学となりますと、どの大学にいくかということによっては、多少変わってきます。いまでも、たとえば外務省にはいる人は、大部分がオックスフォードかケンブリッジを出た人です。それでやっぱりみんな、オックスフォードやケンブリッジにいきたがる。いちばん成績のよくできるものは、だいたいそこへはいるという関係から、当然でてくる結果です。しかし、それほど学歴にこだわりません。

そして、就職はあくまで個人単位でやって、学校単位でやるということはないです。たとえば日本では一つの会社が、東大に何人、慶応に何人とか、割当を頼むでしょう。そういうことはイギリスではない。いちおうだれでも、どこかの大学を出ても、大学生を欲しているところへ申請することができる。ですから地方の大学へいっても、非常に優秀な成績で、たとえばファーストクラスをとる。そして面会したところ、まともな人間みたいに見えるというような人は、一流の会社にはいれて、べつに大学の閥というものが会社の中にあるわけじゃないから、業績によって上がっていくことができる。しかし、まだ大学出と中学出との間のカベが、かなりあるわけです。ですからいちおう大学を出ていなければ、相当高い地位にまで上がっていくことがむずかしいのはたしかです。大学の格づけによって多少は将来性が違ってきますけれども、日本ほどじゃない。

並木 いまのようなお話ができましたから、階級
小遣いのやり方、童 の問題に移りましょう。その前に二つほどおうか
謡の教育的役割 がいいたことがあるんです。一つは戦後子ども

に小遣いを月ぎめで与えてみたり、そのときそのとき与えてみたり、とにかく親が子どもに小遣いを与えるという習慣が、かなりでてきて、昔はこういうような、月ぎめとかなんとかいうやり方は、しなかったような気がしますけれども、イギリスの場合、子どもに小遣いを与えるような習慣が、いったいあるのかどうか、どうなっているのか、きわめて小さいこ

とかもしませんが……。アメリカあたりですと、子どもになにかの仕事を与えて、自分の働きに対して小遣いは与えるものだということで、新聞配達をやらせたり、ベビー・シッターをやらせたりということがあると聞くわけですが、そういったこととの関係。

もう一つは、この「コミュニティ」の座談会をやりましたときに、ある先生から、外国では、「ブリーズ」「サンキュー」ということを、子どものときから教えている、そしてそれを童謡にしてくださいとかならずその言葉をいわせるようにしているという話ができました。こういったご記憶は、ドーア先生にございますか(笑声)。

ドーア それは子どもに小遣いをやれるだけの経済ベースの家庭では、定期的にやっていましたし、いまでもやっています。そして子どもに貯金するという観念を与える。

並木 アルバイトとの関係は……。

ドーア アルバイトとの関係は、アメリカと違うと思うんです。子どもが学校へいきながらできるアルバイトというのは、新聞配達とか、土曜の商店の手伝いとかですか、そういうものは、イギリスではいまは多少違っているでしょうけれども、日本と同じようにそれ以前の段階ですよ。それを行っている人たちは、家庭の収入を補助するためにやらざるをえない人が多くて、そういう仕事の口は、その人たちで十分埋まってしまう。子どものためのアルバイトというような余裕が、最近まではあまりなかったんです。ですからアメリカは、家庭がそういう補助的収入を子どもに要求しないからこそ、子どもが貯金をつくるためのアルバイトとして、一般習慣になりうるものなんです。

並木 独立心を同時に養う……。

ドーア そう、そう。そしてもう一つの質問の歌。僕はうたったことはない……(笑声)。実は逆に、こんどうちの子どもを隣の幼稚園に入れて、このごろ少し歌を覚えてきたんですが、いちばん先に覚えたのは、「おべ

んとう、おべんとう、うれしいな」とかなんとかで始まって、おしまい
「いただきまーす」（合掌しておじぎする）で終わる（笑声）。それで僕は
よく考えるんだがこういうふうに、歌で言葉をちゃんと教えるのはこれは
日本の発明だ（笑声）。

Ⅳ 階級と身分

並木 これはどうも……。それじゃ、おほめいただいたところで、階級の問題にはいたい。英国の場合の階級とか階層と、日本の場合と、これまたいろいろ違って、そのことから、コミュニティに対する対応のしかたもいろいろ違ってきているように思われる。こういった問題について、お感じになっていることを……。

教育組織と階層組織 の密接な関係

ドーア さきほどいいました教育制度の分裂と
いいですか、私立の系統と公立の系統がはっきり
分れているということは、イギリスの階層組織を
形成する決定的な要因になっているのです。私立学校はもともと貴族の学
校で、そしてそれが19世紀に刷新されると同時に多少開放されて、金さえ
あれば中流階級でもはいれるようになった。中流階級も、金ができれば上
流階級になりたいわけですね。上流階級の文化、動作、ふるまい、言葉
を取得したい。ところが、自分一代では不可能かむずかしい。しかし少なく
とも子どもを、一人前の上流階級の人間にするためには、そういう学校へ
やる。そしてそれがとくに寄宿制の学校であったために、そこに独得な文
化が生まれ、そこから、その卒業生の人格を形成するのに、学校が非常
に大きなウェイトを占めた。

そういうところから、特殊な人間がでてきたわけです。その特殊な人間
は、どのような人格の人間であるかという、結局、学校の児童の大

部分を形成していた上流貴族家庭の典型的な人格が、そこで模範となってそれが卒業生の典型的な人格、動作になっている。貴族の文化というのは支配者の文化ですね。生まれながらにして、人に命令する立場にあるものという意識をもって育った人のカテゴリー、それが一つ、そしてそれと隔離されたその他の社会というのは、自然にかなり大きな文化的な差がでてくるんです。ですからいまでも、まあ40歳ぐらいになってくると、ぼやけてきますけれども、20歳ぐらいの青年に会って、15分ぐらい話すといいたいわけします。これは寄宿制のパブリック・スクールを出た人か、あるいは公立のグラマー・スクールを出た人か、なんとなくアクセントとか、言葉づかい、動作ふるまい、身の持ち方というか、それからスポーツ、趣味たとえば私立学校ではラグビーをやって、公立のグラマー・スクールではサッカーをやる。そういう違いまであるんです。考えてみれば、日本にはあまりないことでしょう。

イギリスにおける二 種類の国民

ドーア　そしてもう一つは、そういう二つの流れの学校が一世紀ぐらい続いたのが、もうすでにイギリスが工業社会になってからの話なんです。

農村だったら、地主と小作人との間に、しょっちゅう個人的な交流があるでしょう。小作人の娘が地主の家へ奉公に行く。それによって、地主の家のしきたりを少し覚えて、それが浸透してくる。農村社会においては、それほどはっきりした文化的な差が生まれてこないんです。ところが工業社会において、そういう二つの隔離された文化伝統が、二つの系統の学校によって維持されていく場合には、個人的な交流はほとんどないですね。だから工業社会における労働者群と、そのまわりの郊外に住んでいる中流の上と上流の人たちとは、まさに19世紀において、ディズレーリ (Beaconsfield Benjamin Disraeli 1804~1881) という首相になった人の小説にあったように、「ツワー・ネーションズ」だった。彼の小説のもっとも有名な一つ、「シボー」(Sybil) (1845) というのは、副題が「ザ・ツワー・ネ

ーションズ」です。まさにそういう社会だったんです。

ドーア 今世紀にはいつから多少変わってきたの
中間階級の発生 は、まず中間職業の多いこと、つまり、人に命令する立場にある人と、人に命令される立場にある人ばかりじゃなくて、いろいろな技術的・中間水準の仕事が多い。それによって、中学出程度の労働階級生まれの人が少し勉強して、中流階級を形成していく。また育英資金の制度が、主として1920年代からだんだんと拡大されて、大学までいけるようになった。そしてそれが戦後になって、もっともその機会がふえてきた。ですから多少、社会移動（流動性）が多くなっている。

またそういうことで、1950年代のもっとも典型的な小説のテーマ、あるいは劇のテーマとされているのは、例の自分より格の上の妻をもつ人の悲劇—というか労働階級の有能な人が、上流までのし上がって、同じ大学で学んだ金持ちの娘と結婚して、そして二つの文化の衝突が結婚生活の中にあられてくる。それをテーマとする小説が相当多い。

並木 たとえば、どんなところにあらわれるでしょうか。

ドーア それは生活全般において……。

並木 たとえば日本の落語で、熊さんが、公卿に奉公していた娘さんを嫁にもらった、ほかは申しぶんないが、言葉がすこぶるていねいな宮仕え言葉で、これに閉口するというのがある……。

ドーア いや、日本の場合は、そういうお上品な妻をもらっても、まだ男は優勢でしょう。ところがイギリスはそうじゃない。元来、夫婦は同等でしょう。日本だったら、元来、男尊女卑だから、女が少し上でも、まだ男はやりきれんだけけれども、イギリスは、基本的には夫婦同等という形になっているから、社会的には女のほうが上だと、男はしいたげられるということになる。だから男の柄の悪さに対して、妻が抗議する。すると夫がビールを飲んだり、変な友達を連れてきたりする。自分（妻）はいなか

に帰って、近所の貴族のフォックス・ハンティング(きつね狩り)の連中が毎年やる派手な舞踏会にいきたいんだけど、だんなはそんなつまらないものには出たくない。そういうようなことがあるわけです。

並木　ともかく、そういうことが1950年代に起きたわけですね。

ドーア　それが社会の流動性が多くなった一つの端的なあらわれです。階級関係を変えていく一つの要素は、そういう移動の増加と、もう一つはマスコミの普及、とくにテレビですね。昔は、貴族の家とか上流の家に奉公にいかない限り、その生活の内容を知る方法がなかった、だから真似しようと思っても、真似のしようがない。ところがいまテレビで、あらゆる階層の人たちの生態が見られる。また労働者の所得の向上によっても、多少、真似ができる。だからそういう文化の異質性が、多少変わってきます。たとえば大陸を旅行するということでも、10年前までは、ほとんど中流階級の人しかできなかった。しかしいま、炭坑の労働者がイタリアへ2週間の旅行にいくとか、そういうことができるようになった。そして自動車を労働者でももてる。そういう点では、文化的な対立観念がかなりなくなってきつつあると思うんです。

並木　ここでいろいろ座談会をやりましたとき

階級のなかでの交際　に、ステータス・コンシャスといいますか、とにかく階級を差別する意識が、イギリスの場合もかなり強いし、日本でもある意味では強い。ただ意識のしかたが、少しイギリスと日本では違うんじゃないか、たとえばイギリスの場合ですと、大学に勤めている人の住んでいるような町、そこには、大学の先生もおれば、大学の事務の人もおる。あるいはかりに学生も住んでいるとすれば、その人たちは、学生、助手、教授という、日本でいえば、いくら身分的な差はありますけれどもこれは仕事は別として、ふだんのつきあいはまったく同等につきあっている。ところが、そういう地域社会と、ほかの職業の人が住んでいる社会との間では、かなり差別を意識している。日本の場合

には、大学の先生と生徒との間に、すでに相当差別意識があって、大学の先生は、隣の村のお医者さんとか、あるいは自由業の人とは、かなり親近感をもっている。こういうような階級の差別観というのに、なにか少し違いがあるんじゃないだろうか、というような話が、ちょっとでたんですけども、なにかお感じになるようなことはございませんか。

ドーア いや、そういう違いよりも、むしろこういうことじゃないですか。たとえば、そういう町を想像してみますと、大学の人が、教授、助手生徒を含めて、一つのグループをなすような意識をもっているよりも、大学の先生が交際する友達を求めるのは、まず、ほかの大学の先生、同じような教育を受けたものとなると思うのです。ところが、かならずしも大学出だから交際できるというわけじゃないんです。大学の先生のなかにも、やはり労働階級から上がっていった人もあるし、またいい家庭に生まれて上級の私立学校を出た人もある。そして友達として交際する場合には、やっぱり自分と同じような労働階級あがりの人、あるいは上流階級生まれの人……。

並木 氏と育ちというふうにいったら、いくらか氏のほうがものをいうということですか。

う社会

ドーア そうです。その氏は同時に育ちですから……。交際する場合のいろいろな趣味が一致する点は、そこからでてくるんですけどもね。たとえば、サンモリッツにいたときにこうこうだった、というような話をすると、相手は“おれはサンモリッツにいったんだぞ”というホラふきとも受けとらないし、当然のこととして、おそらく彼もサンモリッツに冬休みにいったろうという前提のうえに立って聞く。またスポーツの話をすれば、パブリック・スクールにいったなら、クリケットの話をするとか、そういう点で、同じ出身階級で同じ教育を受けた者同士が、交際しあうのが普通だと思うんです。

並木 もう一つ、日本の指導者階層とイギリス
指導者階級の開放性 の指導者階層では、たとえば日本の場合、明治以

前の指導者は、氏と育ちというので一つの階級社会を構成しております。一方、別の社会で育ってきた者のなかで能力のある者がおれば、比較的自由にむこ養子にするというふうに、日本のほうが開放的であったような気もするんです。イギリスの場合には、相当閉鎖的である。その点はどこからそういうふうになっているのか、またそういう特徴があるかないかということも、ちょっとおうかがいしたいと思うんですけれども……。

ドーア それはたしかにそうだったと思うんですよ。1870年の日本とイギリスを比べると、イギリスがトワー・ネーションズであったとすれば、日本は二百いくつのネーションズであったといえると思うんです。つまりそのときには、階級間の文化的な差よりも地方間の文化的な差のほうが強かった。だからこそ、薩長閥というのが非常にものをいった。薩摩の下級武士と、薩摩の家老との間の関係のほうが、薩摩の家老と仙台藩の家老との間よりも、密接だったと思うんです。つまり、階級身分による差よりも、藩意識による差のほうが強かったでしょう。そしてそれをいっしょくたにすれば、すでに地方的な差がある以上、階級的な、あるいは身分的な差は、それほどものをいわなかった。また教育の伝統の違いというものもあるし、画然とした二つの文化系統を明治時代においては、つくっていませんでしたでしょう。

むしろ、日本にイギリスと同じような現象があるとすれば、それは終戦までの学習院あたりにはあったと思います。学習院出の人たちは大部分、学習院出の人と結婚しあっていたらと思うんです。

白石 ことに戦前はそうです。

並木 戦後は崩れましたがね。

ドーア 戦後は、学習院の形も変わってきたでしょう。

青井 日本の場合、ある意味では、そういうふうに画然と差のあることに対して、一種のルサンチマン（怨恨）みたいなものを感じるのが、かなり多いと思うんですが、イギリスの場合には、当然その二つは別ものだというふうに、割り切っちゃうんですかね。

並木 二つに分れていて、そしてお互いにその存在価値というか、ねうちを認めあっているということで、いままで、続いてきたんでしょうね。

学制改革による劣等感 ドーア まあそれはお互いにいっても、相手が下だという意識を両方でもっていた。しかし、

それによってできた階級観念と、最近できあがったグラマー・スクールとセカンダリー・モダン・スクールから生まれてくる階級観念とは、多少違う。1920年ごろまでは、労働階級に生まれた人は、どうしても不幸な運命にある人だということになっていた。結局、恵まれた家庭の子弟とは、将来がぜんぜん違う、同じような希望がもてるはずはないということだった。それになにも自分が悪いのではなくてそれは社会が、それだけ貧富の差をつくっていることが悪い、あるいはそれが当然としても、自分が貧乏な家庭に生まれたのが運が悪かったんだというふうに、割り切っていたんです。そしてそういう人は筋肉労働者になっていって、非常に能力があったら、労働組合幹部になったり、政治家になったりして大臣になる機会があった。

ところが、戦後のような公立学校の制度ができあがりますと、労働階級でも、いちおう能力があればグラマー・スクールにいて、国家が面倒みてくれて、大学を出て、中流階級には入れるでしょう。ですから筋肉労働者として残った人たちは、自分が筋肉労働者となったのは、能力がないからだ、社会が悪いのでもないし、運が悪いのでもないんだ、自分に能力がたりないからということになる。そしてそれはとくにコンプリヘンシブ・スクールをつくらうとする一つの大きな理由なんですけれども、今後11歳から、ぜんぜん別な学校で学校生活を送るような制度ができて、いいほう

の学校を出た人はみんな管理職、専門職につき、下のほうの学校を出た者ばかりが筋肉労働者になったとすれば、たとえマスコミなんかの影響によって、文化的な異質性が緩和されても、筋肉労働者における劣等感というもの、昔よりもいっそう、はげしくなり、人間として耐えられないことになってくる。またもう一つの問題として、どこから労働組合の幹部がでてくるか……。いままでは非常に頭のいいやつでも、しょうがないから筋肉労働者になった。ところが、頭のいいやつはみな吸い上げられちゃう。コンプリヘンシブ・スクールをやったのは、そういう問題があります。

並木 いまのお話を聞いておりまして、一つ、
「職業に貴賤なし」

というのは伝説？

おうかがいしたい点がでてくるのですが、私たち
小学校の教科書でイギリスの社会というものを教

わったときは、かならず職業に貴賤なし……。

ドーア 大学の小使も、世の中でいちばんいい小使になれる(笑声)。

並木 そういうことを、繰り返し教わったものです。そのへんのことについて……。

ドーア それは日本の社会制度を正当化するための伝説にすぎない(笑声)。

青井 イギリスにおいては、かならずしもそういうことを常々いっているわけじゃないんですか。

並木 親子三代続いた門番があって、門番としての職業に対する誇りは皇帝にもまけないという(笑声)。

ドーア そうなのがいたでしょう。

並木 漢語でいえば「匹夫もその志を奪うべからず」ということになるんですが。たとえば19世紀ですか、クラフトマン・シップといいますが、職人組合ができて、職人としての誇りを感じてくるとか、またそれを自覚してくるような、また自覚を促すような教育をした時期があったと思うんですけれども、そういうことがイギリスの労働者について、いちばん最初

にでた旅の恥はかき捨てという場合の「旅」を、イギリス全体にまで、つまり、内輪というものをイギリス全体にひろげた、そういう感覚を植えつけるのに、役立ってきておるような気がするんです。労働者階級であると同時に、イギリスの市民であり、国民であるというイギリス人としての誇りをもってきたということがないかどうか。

ドーア それはかなりあると思います。誇りがもてるだけの職業であれば……。しかし、そういう職業が一方では種類がふえていっても、単純労働者が多くなってきたりして、その職業をもてる人口の割合が少なくなってくるんじゃないですか。ただ、そういう教育を意識的にやることは、やっぱりやりました、徒弟制度というもので……。ただ、いまは徒弟制度というものは、多くの場合、イギリス経済の発展の障害となっています。そういう徒弟制度が確立されたのは、日本と同じように、職人が工業の主流をなしていた時代ですね。そしてまた、人口が相対的な過剰状態で、労働人口の不足というものがない時期です。ですから徒弟というものは、見習ばかりでなく、一つ経なければならぬシゴキの時代でもあった。

そして現在でも、そういうふうに制度化されたものが、依然として残っています、たとえば旋盤工になるのに、15歳からはいつて7年ぐらい年季を入れなければ、一人前として組合が認めてくれない。実際は、少し教育しようと思ってやれば7年なんてバカらしいですね。しかしそれを変えようとするれば、ちょうどしゅうとめと嫁の関係を変えると同じように、いちおう我慢してすごしてきたやつが、若い者はなにいったる、というようなことで、反対するでしょう。それはいま国民経済からいえば、かえってマイナスであって、また職場における人間関係をくさらせる一つの条件になっていますね。それに対して、若い者は相当な不満をもっていますから……。しかしそれが、とにかく職業に貴賤はない、自分は社会のりっぱな一員であるという意識を助長させたかということ、そうかもしれません。

並木 歴史的には、そういった役割はいくらかはたしてきた。

ドーア それはありましたね。それが普選運動政治的権利の獲得まで発展して、その運動が成功してはじめて、ほんものになってくる。結局、自分は総理大臣と同じイギリスの一国民であるというような意識は、そういう政治的権利の獲得以後のことであると思います。そしてその運動は、チャーチスト（英国国教徒）などをとっていても、職人が主流をなしていたといえますね。しかし、それはかなり大きな工場地帯にあって、昔式のひとりひとりの企業者としての職人時代のもではなくて、すでに工業化がかなり進んだ時代です。

白石 階級の問題で、さきほどおっしゃった上流というところ、具体的にいうと、貴族とか非常な大金持ちでしょうが、貴族は別として、金持ちクラスの上流といわれるのは数としてどのくらいおりますか。

ドーア それはちょっと見当つきませんが、いちおうハウス・オブ・ロード（上院）に席をもっているのは全国で1,000人たらずですね。そして大金持ちは……。

並木 そうすると、6万人の人口のうち、上流階級は1～2％いるかないか……。

ドーア そんなものです。しかし、いちおう上流とみなされるのは、やっぱりさっきの教育の問題なんです。

青井 パブリック・スクールが4～5％というんですからね。

ドーア その4～5％の中にはかなりインチキなものがありまして…。

青井 金ですか。

ドーア 結局そういう学校にはいるためには、まず学費が払えることが必要条件ですね。しかしそれだけが十分な条件じゃなくて、縁故ではいることがかなり多いですね。

並木 だれかに紹介してもらわなきゃいけないわけですか。

希望校へは赤ん坊の ドーア はい。むしろ自分がその学校を出た人
ときから登録する なら、そして自分の息子を入れようとすれば、だ

いたいはいれる。しかしそうでないものは、先着順ですね。だから子どもが生まれたときに、あるいは生まれる前から、男である女であるかわからない時代から、入りたい学校に登録しておく。

青井 それは早いな。日本よりもっと早い(笑声)。

ドーア だいたいそれで十分ですね。そして14歳になって、そのときはたとえ卒業生の息子に優先権を与えていても、払える親はそれほど多くないし、あるいはお金のでき方が遅くて、子どもをそこへ入れることに気づいたのが遅れたとか、また一流の学校へ入れると、相当な上流とつきあうことになる、そういうやつとつきあうと、ぜいたくになって自分が困るというような、もう少し下の人のための学校とか、あるいは子どもがよくできないで、うまくいけばグラマー・スクールに入れたい、ところが頭がよくないので、公立のセカンダリー・モダン・スクールにいけば、自分の子どもがかわいそうだから、しいて私立学校に入れようとする。そういう親のための私立学校というのは、かならずしも教育はいいわけじゃないけれども、まあ、かなりいい家庭からきているという保証がついているだけの話で、あまり柄の悪いことを覚えてこない。そういうための私立学校が、かなりあるんです。ですから、いちおう上流教育を受けたといって通せるものは、3%ぐらいでしょうか。

ドーア ですから上流かどうかということは、

社交界が大切な役割 一般の評価ができあがるというわけでもないし、

またその人がどういう階層に属しているかという

基準のおき方は、人によってまちまちでしょうけれども、どういう人と交際するか、夜のパーティーによばれるときは、どういうところへよばれるか、だいたいそれが主になるんじゃないですか。

並木 社交界の関係ですね。

グラマー・スクールの全寮制の舎監になるのは、どういう人でしょうか。

ドーア 学校の先生のなかで、かなり人格的にしっかりしていると思われて、よく人の世話をする、またその奥さんも、同様にしっかりしていて人の世話をよくすると思われている人です。

白石 たいへん具体的な話ですけども、私立学校へかようためにかかるお金ですね、一年間にどれくらいかかるんですか。

ドーア いまいちばんかかるところ、たとえばイートンの場合、800ポンドぐらいじゃないですか。よく知りませんが。

白石 80万円ですね。

並木 つきあいの問題で……これもきわめて具
日本人と名刺の役割 体的な話になるんですが、座談会でこういう話がありました。日本人の名刺の使い方のことで、たとえば旅行するような場合日本人は隣の人となかなかお互いにしゃべりあわない。とくに昔の二等車現在の一等に乗る連中は、まず名刺の交換をしないと、お互いにしゃべらない。ところがヨーロッパへいけば、隣同士、きょうは天気がいいとか悪いとか、自分の肩書ぬきでお話ができる。日本人はどうもレットルにこだわっているところがあるんじゃないかという話でたんです。三等車に乗る連中は、これはきさくなもので、景気はどうだとか、なにはどうだという話をする。こういった点、おたくの場合いかがでしょうか。

ドーア それは多少違うでしょう。というのは、イギリスは階級社会であって、日本は身分社会であるというふうに要約しておけば、身分社会においては、二つの階級があって、その二つの階級の内部は、みんな同等であるというんじゃないんです。身分社会においては、むこうが先輩であるかもしれない。同じ大学の先輩であるか、あるいは会社でいうと、自分は係長で、むこうが課長であるかもしれない。それによって交際のしかたも違ってくるんですね。だからいちおうそれをたしかめてからでないと……。

並木 お天気の良いさつもできない。

ドーア お天気についていう場合の言葉づかいも関係してくる。ところがイギリスの場合は、まず一等と三等があって、そしてだいたい上流の人が一等に乗り、そうでない人は三等に乗る。だから違う階級の人が同席するということはまずない。同席しているのは、同じ階級の人であるという前提に立って話しあえる。

並木 さっきの氏も育ちも同じ人たちですね。

ドーア 年齢差とか身分差が、階級内部では、それほどものをいわないということはいえると思いますね。

並木 ちょっと余談になるんですが、私たち英語を習うとき、めんくらった表現の一つは、イエス、ノーの使い方です。たとえば、“Don't you like him?”（あなたは彼が好きではありませんか）と聞いた場合、日本でしたら、「いいえ、好きです」といいますね。しかし、英語では、“Yes, I do”とか“ No, I don't”ということになる。日本の場合と、使い方が違うわけですが、これは日本人の考え方が主観的なのか、あるいは相手の立場を尊重しすぎておるのか、なかなか微妙なところだと思うんです。

ドーア 英語の表現は、ものごとに即して、客観的に好きとかきらいとか、そのものズバリでやっておるようでもあるし、また自分の主張を非常に主張しているというようにも思われますし、簡単に、主観的、客観的といいあらわせないような面があるんですけれども、ドーアさん、こういったところは、なにか考え方の差と結びついているというふうに、お考えでしょうか。

ドーア あまり結びつかないと思います。というのは、「はい」＝「イエス」、「いいえ」＝「ノー」という先入感があれば、翻訳がしにくくなって、いざこざが起こるんです。「イエス」というのは、ただ動詞が肯定である場合にくる冠詞、「ノー」というのは、否定である場合の冠詞である。ラテン語の語法も、日本語と似てましたね。質問のしかたが、日本語では

「か」だけでしょう。「ですか」とか……。ラテン語では二様あって、一つは「はい」という返事を予期する質問のしかたと、「いいえ」という返事を予期する質問のしかた、それによって、「イエス」と「ノー」の使い方が変わってくる。いろいろ言葉が違って来るんだけど、それはあまり国民性とかそういうものとか関係がない。その差を理解していれば、翻訳に苦勞することはぜんぜんない。

並木 冠詞というふうに考えればよいわけで、いまの国民性による考え方の差とは別ですね。

ドーア 翻訳に苦勞しないし、また翻訳したものは、和英訳の場合に、もとの日本語にでているニュアンスは、全部英語で表わすことができると思うんです。

V コミュニティの展望

並木 日本人のあり方は、さっき図で示されたように、個人があって、家庭があって、社会がある。イギリスの場合には、個人が両方にはいって、別々の人格でそれに接している。こういう原型的な社会の構造があったわけですが、日本の場合に、今後イギリス的な構造に変わっていくかどうか、あるいは、現に変わっているかどうか、あるいは変わっていくことが必要なかどうか。これを問題にして頂きたい。

イギリスがそういうふうになったのは、もともとというよりは、さっき600年ぐらい前に、狭い意味でのコミュニティというものがなくなって……というふうにおっしゃったがそのころから、いまの社会的な構造ができたみていいでしょうか。

ドーア ええ、そのころからだんだんとできあがってきた。

並木 そうすると、それ以前は個人——家庭——コミュニティだったんでしょうか。

年功序列、生産雇用
的な雇用制度

ドーア ええ、もともと家というものは、日本ほど重みをもっていなかったというか、たとえば封建時代の村においては、やっぱり家を通じて村に属していたということはいえると思うんですが、それが崩壊してからはその当時でも、日本と多少違っていたと思います。つまり、家の連続性というもの——まず先祖の崇拜とかいうことがなかったために、家の連続性

を象徴するようなものがないということも関係します。そして国家も含めて、あらゆる家庭以外の団体に個人が参加する場合には、自発的な意思によって参加するのだというような意識は、日本においても、個人主義的な傾向によって、だんだんと普及してくるだろうと思います。しかし、それがどこまでも発達してくるかということは、疑問だと思うのです。そしてイギリスでそれが発達してきた条件と、今後日本の社会に予想できる条件との一つの大きな違いは、職業団体の形成だと思っています。つまり、もうすでに日本の社会は、人口の大部分が農村的な共同体的な拘束のなかにとどまりながら生活した社会から、非常に急速に、大企業に依存するような社会に移ってきた。そしてその大企業は、イギリスよりもずっと、コミュニティに近い要素をもっている。それは終身雇用制からくるんです。

ですからさきほどいいましたように、あらゆる集団に属する、参加するということは、自分の自由な選択によるものであるという意識が発達するためには、人間の一生の間に、そういう自由な選択をする機会がかなり多くなければ、発達しないんです。日本においては、大学あるいは中学校を出て就職をするときは、そういう選択の余地がある。しかしそれは一生に一回の勝負で、そのあとはだいたい、転々とまわるやつは不まじめで、おっちょこちょいで、まともな人間でないという意識が、かなりあるでしょう。ですから、そのあとは大きな選択を要する機会がないんです。また企業というものも、ゆりかごから墓場まで世話をするというような形のものです。どこに住むかという選択も、社宅が多くあるところではないわけですね。ところが、会社が社宅をもたないイギリスでは、まずそれが一つの選択になるわけです。そして音楽に興味をもっているとすればどこか近所の町にコーラス・グループがあるかどうか聞き、そしてあったら、その書記はだれかというのをさがして、コーラスにはいりたい。それも一つの選択の機会なんですけれども、日本だったら、大きな企業には音楽部があって当然そこへはいる。あるいは休みをとる場合にもどこへいくというのは一

つの選択だけでも、会社に海の家、山の家があったら、それも決められてしまう。人間が自由に選択する余地というものは、日本ではまだはるかに少ないと思うんです。都会にあっては、職業団体が人間の生活のなかでそれほど大きなウェイトを占めないイギリスにおいては、複数のサークルがある条件がそろっている。そしてそのたくさんのサークルの一員である人は、二重人格じゃなくて、複数人格ですね。どういうときに、どういう人格をもっとも強く出すかというところに、人間の個性の自発性があらわれてくるわけです。

青井 たとえば地域民主主義といったようなものが日
地域民主主義 本よりもイギリスのほうが強いようにわれわれは聞いているんですけども、ところがコミュニティということのなかに埋没しているような格好ではなくて、そういうものから、ある程度抜け出さないと新しい地域民主主義というものは育たないんですかね。

ドーア 日本の地域民主主義には、いろいろな形がありますけれども、政治研究会とかそういうものを形成しているのは、杉並区とか世田谷区では、奥さんたちが主になっているでしょう。つまり、大きな職業団体に所属していないものですね。男というのは、生活の中心がどうしても職場にある。そして政治的に参加するということになると、だいたい組合を通じてですね。そしてその組合も、企業別の組合であって、第一生命の組合というようなことになってくる。また政党の形も、それによって変わってくるんです。

イギリスの政党は、あらゆるところに支部があって、政治に興味をもっている人は、その近所の支部の一員となる。労働党だったら労働党というもの、形としては、支部の連合会みたいになっているんですね。まず僕はWHOのパーティーの一員であって、WHOのパーティーの一員として労働党に属している。それでイギリスの労働組合は、労働党と密接な関係をもって、資金の面で相当助けてはいるんですけども、多くの労働組合

員の政治活動というのは、労働組合を通じてじゃなくて、個人として党の支部にはいっているんです。

青井 話は変わりますがけれども、最近、朝日新
青少年の非行化問題 聞の「世界の若者たち」という連載のなかの「イギリス」のところで、保守党支持者なんですけれども、「労働党が天下をとって社会保障が完備するにつれて、若いやつはやる気がなくなった、ぐうたらが多くて困る」といってだいぶ憤慨している記事が載ったんです。若者たちの傾向というのは、やはり第二次大戦後、急速に変わりましたか。

ドーア それはだいぶ変わりました。というのは、二つの条件があります。一つはさきほどいいましたように、教育制度がだんだんと完備されるにしたがって、セカンダリー・モダン・スクールにいった人たちのなかで劣等感が強くなってきた。

並木 やりきれない連中ですね。

ドーア もう一つは、収入が上がったことですね。セカンダリー・モダン・スクールを出て単純労働をやっても、相当な収入があって、家に金を入れてもまだ、オートバイを買ったり、古い自動車を買ったり、ウィークエンドに旅行するぐらいの金ができるんです。ですから遊び方がもっと派手になり、もっとやけになって……。

並木 非行少年の程度は、これも率はちょっと比較できませんけれども日本とイギリスとごらんになって、いかがでしょうか。

ドーア 率としては、イギリスのほうがずっと高いとみていいと思いますね。

並木 日本もいまが序の口で……。

青井 いや、日本も多いですよ。

並木 僕は、むこうのほうが多いと思っているんだけど……。

白石 イギリスのほうが、コンプレックスをもっている連中も多いでし

ようし、だからそういう抑圧された爆発力というのは、日本より強いかもしれませんね。

青井 これは非常に大きな問題ですね。

並木 所得と無関係ですからね、日本の場合でも。むしろいまでてきているのは、貧しい階層じゃない。

青井 イギリスでもいま、“怒れる若者たち”をどうするかというのが、非常に大きな問題になっている。

みえを利用してコミ
ュニティを拡大する
のは危険

並木 ただ、いまのドーアさんの観測のように
日本の場合、会社、工場に勤める場合でも、終
身雇用のような格好になっていて、比較的、職業
選択の自由がまだ少ないわけですね。今後だんだ

んふえると思いますけれども、少ない。そういう社会において、社会全体のことを考え、旅の恥はかき捨てという「旅」を、できるだけ遠くへもっていくには、いったいどういうふうに考えたらいいんだろうか……。オリンピックをやりまして、あのときはともかく東京の町を比較的きれいにした。東京が外国人に対して、少し内輪になったわけです。ある人は、あれはみえだというふうにいったんですけれども、みえでも利用すればあれだけのことができるんだから、世間体を気にするという性質を利用して、その世間体をもう少し広く大きくしたらどうだ、世間というのを、外国に対してというふうにだんだんやっていけば、自分の身内の範囲が、広くなってくるんじゃないかという考え方もあるんですが、このへん、どういうふうにお考えになりますか。

ドーア しかしそれを強く出せば、恐ろしいナショナリズムになりかねないですね(笑声)。

並木 なるほど、その面は非常に危険ですね。

外国人の評価を気に
しないことが大切

ドーア むしろ、僕がもっと健全だと思うのは
それほど外国人の評価を気にしないでそれほど自

分が日本人であるという意識を強くもたずに、だれとでも——ドイツ人でも、フランス人でも、イギリス人でも、言葉さえ通じれば、日本人と同じように交際できるんだという自信をもっている若い者が、現在、多くなっていることです。これは頼もしいと思います。この間、朝日のだれかがいまごろの若いものを論じていて、そういう人たちが多くでてくることを書いてましたけれども、これは非常にいい、望ましい傾向だと思いますね。

並木 日本人の特徴の一つは、好奇心が強すぎて外国のことが気になりすぎることです。島国で、しかも非常にユニークな場所でしょう。比較するものがないですから、自分を位置づけることが困難で、常に不安定だ。そういったコンプレックスから免れるということが大切だということですね。

ドーア それはさっき私がいいましたように、国家という集団でも、それに所属するかしないかは、個人の自由であるというような考え方が、英国に育って日本に育たなかった条件は、それにあると思うんですよ。地理的な関係、文化の異質的な関係、言葉……。たとえばヨーロッパ人同士だったら、イギリス人がフランス語を習うのは、そうむずかしくはないですね、日本人が英語を習うよりは。

それが端的にあらわれたのが、まさに国籍の選択なんだけれども、亡命ということは、ヨーロッパではかなり昔からあって、それほど大きなことじゃない。ところが日本人としては、亡命するということは、戦前において監獄に入れられることが確実で、亡命した人は非常に少ないでしょう。モスクワへいった数人と、アメリカへいった数人ぐらいで……。それだけ自分の国の日本と、よその国との間の差が大きかったために、自分の国家に属することはまさに運命的で、どうにも選択のしようのないことであったろうと思いますね。

並木 どうもいろいろありがとうございました。

終　り　に

企画委員 白石

地域社会研究所が呱呱の声をあげてから間もなくまるまる11年を迎えようとしている。最初に“コミュニティ”という誌名をきめ、表紙その他のデザインを考えてからでも10年は経過している。その間ねっからの事務サラリーマンが諸先生の驍尾に付して無我夢中で“コミュニティ”40号までの期間を過して来た。今でこそコミュニティといえど何となく判って貰えるようになったけれども、当時は何のことやら自分自身でもよく理解していなかったことである。

この10年ということで一区切りとして、今までの研究、調査から啓蒙活動を振り返って果してコミュニティとは何ぞやという大それた主題に取り組み、またまた皆様の前に新しい問題を提起する破目になってしまった。今後のわれわれの仕事が、数限りなく続くと思われる皆様方の実践研究活動の一助にでもなれば幸甚これにすぎるものはない。

なお末尾に付したR. P. ドーア教授と企画委員の対談録（全部日本語で行なわれた）は40年7月の収録で古いものであるが、当時より活字にする了承を得ており内容的にも読者の興味を惹くと信ずるもので、会田雄次京都大学教授の“アーロン収容所”等と読み合わせられれば、また一興かと考える。

（1974，9）

編集委員

青井 和夫	白石 清
並木 正吉	日笠 端
宮坂 忠夫	前田 和甫
松原 治郎	森村 道美

地域社会研究所刊行物 No. 52

コミュニティ 40—コミュニティ—10年

昭和50年1月30日発行

頒価 200円

編集

財団法人 地域社会研究所

郵便番号 100

東京都千代田区有楽町1-13

第一生命館

電話 (216) 1211 (大代表)

振替 東京 137404

発行

株式会社 国 勢 社

郵便番号 141

東京都品川区西五反田2-19-3

五反田第一生命ビル

電話 (492) 5878

振替 東京 376

印刷

大日本印刷株式会社

地域社会研究所について

この財団法人は、近代のかつ民主的な地域社会（コミュニティ）の発展に寄与する目的で、第一生命保険相互会社が剰余金の一部をさいて基金を提供して、昭和38年10月10日に設立されました。

その事業としては、

- 1 近代の市民意識で裏づけられた地域社会観念の確立についての調査研究
- 2 近代的地域社会観念の啓発と普及
- 3 近代的地域社会を形成する各分野の調査研究
- 4 前記の諸事業についての実験と指導
- 5 地域社会についての書籍、パンフレットの刊行

などを行ないます。

これらは、いずれも人間生活の全般にわたる大きな問題で、たいへんむずかしい問題でありますので、研究所の組織は、広く各分野にわたる権威者の方々をもって構成されております。

今後、事業の成果により、わが国の地域社会における産業、文化、教育、福祉厚生、建設、自治などの面の諸問題がしだいに解明され、いささかなりとも、新しい日本の社会の実現と発展に役立つことを念願する次第であります。

なお、この研究所の顧問ならびに役員は、つぎのとおりであります。

顧問 （五十音順・敬称略）

石坂 泰三

東畑 精一 農学博士・学士院会員

理事長

矢野 一郎 第一生命取締役相談役

常務理事

白石 清 第一生命監査役

理 事

青井 和夫 東京大学教授
磯村 英一 文学博士・東洋大学教授
氏家 寿子 日本女子大学名誉教授
緒方 信一 日本育英会会長
勝沼 晴雄 医学博士・東京大学教授
高山 英華 工学博士・東京大学名誉教授
並木 正吉 農業総合研究所計画部長
日笠 端 工学博士・東京大学教授
福武 直 文学博士・東京大学教授
宮坂 忠夫 医学博士・東京大学教授
矢田 恒久 第一生命取締役会長
山口 正義 医学博士・結核予防会理事長・労働衛生研究所長

監 事

酒井杏之助 第一勧業銀行相談役
高橋 正男 第一生命常務取締役

評議員

東 俊郎 医学博士・順天堂大学教授
田辺 定義 東京市政調査会顧問
塚本 亮一 第一生命取締役社長
内藤寿七郎 医学博士・愛育研究所副所長・愛育病院長
中根 千枝 東京大学教授
西尾 信一 第一生命専務取締役
前田 和甫 東京大学助教授
松原 治郎 東京大学助教授
森村 道美 東京大学助教授
湯沢 雍彦 お茶の水女子大学助教授

出版案内

購読ご希望のかたは、誌代を直接郵便振替（東京137404番、財団法人地域社会研究所）でご送金ください。また、継続して購読されるかたは、1年分をまとめてご送金されるとご便利です。（本誌の送料当所負担）

コミュニティ

（A5判）（年間4冊発行予定）

既刊	第1号	コミュニティのあり方	（200円）
	第2号	新しい農村生活	（"）
	第3号	地域社会と婦人	（"）
	第4号	都市生活とコミュニティ	（"）
	第5号	家庭のしつけとコミュニティ	（"）
	第6号	老人問題とコミュニティ	（"）
	第7号	コミュニティと青少年	（"）
	第8号	日本人のつきあい	（"）
	第9号	家族と親族	（"）
	第10号	健全な子どもの育成	（"）
	第11号	今日の教育を考える	（"）
	第12号	レクリエーションとスポーツ	（"）
	第13号	健康なまち	（"）
	第14号	交通安全とコミュニティ	（"）
	第15号	日本人のことばと話し方	（"）
	第16号	テレビと家庭生活	（"）
	第17号	家庭婦人の学習	（"）
	第18号	公共の場におけるマナー	（"）

第19号	精神衛生	(200 円)
第20号	ヨーロッパを考える	(")
第21号	公衆衛生	(")
第22号	千代田地区保健活動10年の総括	(")
第23号	創造的農業者	(")
第24号	団地生活を考える	(")
第25号	食生活を考える	(")
第26号	日本人の暮しと住まい	(")
第27号	地方都市とコミュニティ	(")
第28号	わがコミュニティ	(")
第29号	家族はこれからどうなるか	(")
第30号	自然と人間	(")
第31号	子どもの遊び場	(")
第32号	コミュニティと広場	(")
第33号	乗物と人間	(")
第34号	ことわざとコミュニティ	(")
第35号	主婦の生活時間	(")
第36号	おやじの座を語る	(")
第37号	社会と健康	(")
第38号	災害とコミュニティ	(")
第39号	日本の青年	(")
第40号	コミュニティ——10年(新刊)	(")

高年齢を生きる

(A 5 判) (年間 1 ～ 2 冊発行予定)

既刊	第 1 号	高年齢人口の問題点	(200 円)
	第 2 号	高年齢者と家族	(")
	第 3 号	定 年	(")
	第 4 号	高齢者の生活記録より	(")
	第 5 号	オーストリアの高齢者と家族	(")

コミュニティ叢書

No.1

会社従業員の生活と意識

——第一生命従業員調査——

編著者・青井和夫（東京大学教授）／発行・地域社会研究所／取扱・国勢社
／A4判・184頁・頒布価格850円

○近郊農業地帯（神奈川県足柄上郡大井町）に社屋移転に際し第一生命の従業員全員と配偶者を対象に生活構造、態度、意識、希望等をまとめたもので研究者はもちろん、地方進出を企図する企業および受け入れ側にとっての資料。調査集計表多数集録、

No.2

大井町一地域社会の構造と展開

編著者・福武直（東京大学教授）／発行・地域社会研究所／発売・東京大学出版会／B5判・720頁・頒布価格2,500円

○第一生命の理想的なまちづくりの構想による移転とともに急速に都市化が進みつつある同地域における経済・社会・政治などの姿を把握分析したもので、今日各方面の関心事となっている農村の都市化地域開発計画などの参考資料。

No.3

都市生活者の生活圏行動

——第一生命従業員調査——

編著者・高山英華（東京大学教授）／発行・地域社会研究所／取扱・国勢社
／A4判・188頁・頒布価格1,600円

○第一生命の従業員とその家族を対象に4回にわたる生活行動調査の結果をまとめた、いわゆる東京のホワイトカラー層世帯の行動パターンを示したもので、大都市や近郊地域における施策に対する参考資料。既刊No.1の姉妹編として刊行。職員行動地図および調査集計表多数集録。

No. 4

大井町開発基本計画

編著者・日笠端（東京大学教授）／発行・地域社会研究所／取扱・国勢社／
A 4判・128頁・頒布価格2,000円

○最近とみに市街化が進んでいる神奈川県大井町を対象に、コミュニティ・プランニングの考え方をいかに都市計画のなかに折込むかという課題を研究してまとめたもの。農村から都市へ脱皮しようとする地域における施策に対する参考資料。図・表多数集録。

No. 5

恒心会員の歩み

——岡山県の創造的農業者——

編著者・並木正吉（農林省農業総合研究所計画部長）／発行・地域社会研究所／取扱・国勢社／B 5判・220頁・頒布価格1,500円

○かつて表彰をうけた岡山県下の優秀な若き農業者たちのその後10数年にわたる経営の変化のかずかずや地域に対する活動を詳しく追跡し、その業績を広い視野にたって評価したもの。類書がまれなのみならず、困難な転期にたつわが国の農民・農村・農業の将来に対する資料として薦める。

No. 6

農漁村社会の展開構造

——秋田県由利郡金浦町——（品切れ）

編著者・福武直（東京大学教授）／発行・地域社会研究所／発売・東京大学出版会／B 5判・380頁・頒布価格2,800円

○東北の日本海沿いの農漁村金浦町を対象に、産業経済・社会・政治の諸構造をはじめ生活改善・教育など広範にわたり、歴史的過程から現状の問題点にふれそれらを明らかにし、学問研究の上で大きく寄与するのみならずこんにち揺れうごく農漁村のありかたに対しても示唆となる参考資料。

No.7 地域社会の形成と教育の問題

—神奈川県大井町—

編著者・松原治郎（東京大学助教授）／小野浩（武蔵大学講師）／発行・地域社会研究所／発売・東京大学出版会／B 5 判・267頁・頒布価格2,400円

○既刊No.2で調査分析した神奈川県大井町のその後の社会構造の変化、とくに新しいコミュニティの動向のなかで、教育の問題のもつ意味と展開過程を実態調査に基づいてまとめたもの。実践的な施策にとって大いに役立つのみならず、地域社会の教育問題に関する学問研究上の意義も大きい。

姿勢研究所刊行物案内

財団法人姿勢研究所は、地域社会研究所と同じように第一生命保険相互会社から提供を受けた基金によって設立されたもので、国民の健康と福祉の向上に寄与するため、心身の健康の基本である「姿勢」についての諸問題について、あらゆる分野から調査研究をおこなっております。

その事業の一つとして、姿勢と健康に関して、平易な知識を啓発普及するため、「姿勢と生活」シリーズという下記冊子を発行しております。ご購入ご希望の方は姿勢研究所へ直接お申込み下さい。（送料当所負担）

（郵便振替東京104481）

1 「姿勢と生活」シリーズ

- | | | |
|-----|--------------|--------|
| 第1号 | 「姿勢と健康」 | （200円） |
| 第2号 | 「日本古来の姿勢」 | （ 〃 ） |
| 第3号 | 「椅子・テーブルの研究」 | （ 〃 ） |

第4号	「姿勢百態」	(200円)
第5号	「スウェーデンの椅子研究」	(")
第6号	「いすの歴史」	(")
第7号	「剣道と姿勢」	(")
第8号	「特殊者の姿勢」	(")
第9号	「スポーツと姿勢」	(")
第10号	「椎間板ヘルニア・腰痛」	(")
第11号	「歩行と姿勢」	(")
第12号	「住いと姿勢」	(")
第13号	「姿勢の進化」	(300円)
第14号	「直立姿勢の神秘」	(200円)

2 「姿勢シンポジウム論文集」

内容：基礎，人間工学，整形外科座位姿勢，特殊問題，体育・スポーツの6項目・30論文および文献目録

発行：昭和46年10月1日

体裁：B5判・323頁

頒価：1,500円（印刷実費），送料当所負担

（〒100）東京都千代田区有楽町1丁目

第 一 生 命 館

財団法人 姿 勢 研 究 所

電話（03）216—1211

